
魔法少女リリカルなのはTwo girls

大原野山城守武里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはTwo girls

【Nコード】

N9667M

【作者名】

大原野山城守武里

【あらすじ】

祖父が死んで天涯孤独となった少女木崎さくらは途方にくれていたところを緑色の長い髪の魔女に誘いをかけられる。「ゼクエスの帝王になれば何でも思うがまま。死者を生き返らせることもできる」と。だが、そのためにはもう一人の候補であるルーシー・ブランケットを殺さなくてはならない。躊躇するさくらだが、ルーシーは容赦なく襲ってくる。応戦していくうちにさくらの中に相手に対する憎悪が芽生えるのだった。互いを傷つけあう二人の少女。その結果、さくらは左腕をルーシーは左目を失ってしまう。殺し合うことに恐

怖と疑問を感じ始める二人の少女。ルーシーは謎の武装集団フォーサイズに襲われているさくらを助ける。それは彼女がそうしたいと思ったからだった。だが、運命は二人を決して戦いから遠ざけようとはしなかった。

※原作のキャラクターは途中まで登場しません。

※デバイスの台詞の英文がおかしい時もありますが、大目に見てください。

※拙い文章ですみません。

登場人物と用語（前書き）

サウンドステージXの1年前が舞台となります。リリカルなのはにそんなに精通しているわけではありませんので、原作と異なるところがあるかもしれません。

また、原作の登場人物は途中まで登場しないのでご了承ください。

登場人物と用語

登場人物（とりあえず本編オリジナルだけ）

木崎さくら Sakura Kizaki Height 130.9 cm weight 27.2 kg

本編のヒロイン。日食の日に生まれ、祖父が死んだことで（両親は幼少のころに死別）天涯孤独となったことから、魔女からゼクエスの帝王候補に選ばれる。小学校5年生

ルーシー・ブランケット Lucy Blanket Height 140.3 cm weight 34.5 kg

もう一人のヒロイン。さくらとは別の世界の人間で、同じく天涯孤独だったため神官にゼクエスの帝王候補に選ばれる。月食の日に生まれる。

魔女

緑色の長い髪をした少女。さくらを帝王候補に選んで、その体にゼクエスの魔闘士の証であるリーガル・コアを形成する。

神官

長い金髪の男の子。ルーシーを帝王候補に選んで、その体にゼクエスの魔闘士の証であるリーガル・コアを形成する。

ギルバート・ミハイル Gilbert Mikhail（ダニエル・ジャツカル Daniel Jackal）

新興宗教団体レッドコメートの教主。その正体は武装宗教集団フォースサイズのボス。

用語

ゼクエス

ミッド式やベルカ式とは全く異質の魔法の系統。この魔法を使う者は5000年に二人しか現れず、その二人が戦って勝った方がゼクエスの帝王となることができる。ちなみに、ゼクエス式の魔導師は魔闘士と呼ばれる。

リーガル・コア

ゼクエスの帝王候補たる証。魔女か神官によって体内に形成され、その者の血を帝王の血にかえる。なお、すでにリンカー・コアがある場合は、それを破壊してから形成されるが、それ以前に習得した魔法が失われることはない。

バンパイア・デバイス

ゼクエスの魔闘士が使うデバイス。使用者の血を吸うことで威力を発揮する。

第1話【二人の少女】？

第1話【二人の少女？】

木崎さくらは幼いころに両親を亡くして、それ以来祖父と二人で生活していた。祖父は剣道の師範をやっていて、さくらも物心ついたころから竹刀を振っていた。といっても、さくらは母親が剣道をやっているのを見て始めたわけで、決して祖父に影響されてのことではない。

だが、さくらが剣道に熱中するようになったのは両親が死んでからだった。親がいない寂しさを剣道で紛らわそうとしたのだ。その動機はさておき、元々の天賦の才もあってか小学校高学年になる頃には同年齢の子供はおろか大人ですら太刀打ちできないまでに上達していた。剣道はさくらの人生の中で大きなウエイトを占めるようになっていたのだ。

それは突然だった。祖父が倒れたと聞いたさくらは大急ぎで家に帰った。家でさくらが見たのは物言わぬ祖父の亡骸だった。さくらは頭の悪い娘ではない（かといって良くもないが）。祖父の死が何を意味するか理解できるだけの知能はあった。彼女には他に身寄りがいない。祖父だけが彼女に残された最後の身内だったのだ。その祖父もいなくなってしまった。ショックのあまりさくらは家を飛び出した。

家を飛び出したさくらは川原で祖父との思い出に耽っていた。

「たまや、こっちおいで」

「さくらです」

「たまや、お菓子をあげよう」

「さくらです」

「たまや、かわいいねえ」

「さくらです」

ちっちゃい頃のさくらが玉のようにかわいかったということで、祖父はさくらを「たま」と呼ぶようになったのだ。唯一の孫ということで、それはそれは目に入れても痛くない可愛がりようだった。しかし、その祖父はもういない。

祖父がやっている道場は門弟が多く、そこからの収入で生活に困るということはなかった。しかし、祖父が死んだとなれば道場は閉鎖されるだろうし、収入も途絶えることになる。いまはまだ貯えがあるから生活できるが、そう長くはもたない。まだ小学生のさくらに金を稼ぐことは無理だ。不動産とその定着物を売却すれば当面の生活費にはなるが、住む家がなくなるという問題に直面してしまう。何よりも問題なのはひとりぼっちになってしまったということだ。

「私、これからどうなるんだろう」

突然の出来事にさくらは自分のこれからに不安を抱いた。こうなってしまった以上、さくらは自分の力だけで生きていく手段を考えなければいけない。だが、いまの彼女にできることは膝を抱えて蹲るだけだった。

「そうやっていても死んだ者は生き返らんぞ」

不意に聞こえてきた声にさくらはビクッとなって後ろを振り返った。すぐ後ろに緑色の長い髪をした女が立っていた。

「なっ……」

さくらは絶句した。さくらは武道家である。人が近づいたら気配でわかる。こんな間近くまで接近されて気付かなかったことは一度もない。

「どうした？ そんなに怖がるな。私はお前の味方だ」

そんなこと言われても見ず知らずの人に味方と言われて信じるほどさくらは世間知らずでもお人よしでもない。ましてや、只者でないとしたら尚更警戒しなければならぬ。それに、さくらは女に何か異質なものを感じていた。

「誰：ですか？」

「名乗るほどの者ではない。私を魔女と呼ぶ者もいるが、名前などどうでもいいことだ」

どうでもいいと言う割には自分の本名は言わないようだ。よほど言いたくないような変な名前だろうとさくらは勝手に推測した。もしかしたら緑丸緑子っていう名前かもしれない。いやいや、女の名前などどうでもいい。

「私に何の用ですか？」

武器になりそうな物を手探りで探しながらさくらは魔女に訊いてみた。あからさまに自分を警戒しているさくらは魔女は突拍子もないことを口にした。

「お前の望みを叶える方法を教えてやろう」

「私の望み？」

「一人で寂しいのだろう？ 家族を取り戻したいと思わないか？」

「何を言っているの……」

「そんなに私を怖がるな。言っただろ？ 私はお前の味方だと」
そっとさくらの頬に手をあてる魔女。震えるさくらの頬をなでながら魔女は話を続けた。

「ゼクエスの帝王になれ。そうすればおまえの望みも叶う」

「ゼクエス？」

「すべての次元世界を統べる王だ。死者を生きかえらせることもで

きるぞ」

「なっ」

「どうだ？ 悪い話ではないと思うが」

「そ、そんなこと言われても……」

「信じる信じないはお前の自由だ。だが、このままではお前は確実に一人だぞ？」

確かに魔女の言うとおりだ。かといって世界の王とか死者を生き返らせるといった与太話が信じられるわけもない。魔女もさくらが自分の話を全然信じていないとわかつているので、ここはあえて突き放すことにした。

「お前が信じないなら仕方ない。私も無理強いはしたくないからな」と魔女はその場を立ち去ろうとした。そうになると人間はつい追いかけたくなる。

「待って」

さくらは去ろうとする魔女をあわてて呼び止めた。

「本当に死んだ人を生き返らせることができますか？」

信じたわけではない。しかし、他に何も浮かばないさくらはたとえ漫画みたいな話でもすがりつくしかないと判断したのだ。

「ゼクエスの帝王は王というよりも神に近い。神に不可能はない」

「：わかりました。お願いします」

一か八かさくらは魔女の言葉に賭けてみることにした。普段のさくらならこんな事にはならない。祖父が死んだショックと自分のこれからに対する不安が彼女の判断力を鈍らせたのだ。

「本当にいいのか？ もう後戻りはできないぞ」

魔女は念押しした。さくらは一瞬躊躇したが、女が只者でないと

感じた自分の直感を信じることにした。

「お願いします」

「わかった」

魔女は頷くと地面に膝をつけてさくらの両肩をつかんだ。

「いいか、私の目をじっと見ていろ。決して目をそらしたり瞬きしたりするなよ」

「はい」

「いくぞ」

合図と同時に魔女の両目が黄色く光った。その直後、さくらは自分の目から体内に何かが流れ込んでくる感覚に襲われた。

「な、なんなの……」

さくらは思わず目をそらしかけた。

「目をそらすな。じきに終わる」

「は、はい」

女の注意で目をそらすことはなかったが、目から流れ込んでくるような感じが全身を駆け巡っていることにさくらは不安を抱いた。やがて、魔女の眼光が収まって、それと同時に全身を何かが駆け巡っているような感覚も収まった。

「終わったぞ」

「えっ、もう？」

さくらは全身を見たり触ったりして、何か異常がないか確認した。見た感じ変わったところはないようだ。

「あの、私になにをしたのですか？」

「お前の体内にリーガル・コアを形成した。お前にはいま帝王の血

が流れている」

「リーガル・コア？」

「ゼクスエスの帝王を継承する者の証だ」

「証……」

さくらは自分の両掌を見てみた。やはり、どこも変わったようには見えない。

「それで、私はその帝王というものになれたのですか？」

「いや、お前はまだ候補の一人にすぎない」

「候補？」

ということは、さくらは他の誰かと競い合って勝利しなければ帝王にはなれないということになる。そして、魔女はさくらが耳を疑うようなことを口にした。

「候補はお前以外にもう一人いる。そして、お互いが戦って生き残った者が帝王となる」

勝利することが条件ではなく生き残ることが条件。それは、帝王になるには相手の死亡が必須条件になるということだ。

「そ、そんな……」

あまりに恐ろしい話にさくらは腰が引けてしまった。無理もない。魔女は帝王になりたければ相手を殺さなければならぬと言っているのだ。小学校5年生の女の子に突き付けるには酷というよりも無茶な条件である。躊躇いを見せるさくらに魔女は冷酷な事実を突き付けた。

「もう、後には引けんぞ。お前はすでに候補になってしまった。お前が嫌がっても向こうはお前を殺しに来るぞ」

「で、でも、どうして私なんです？ 他にもいっぱい人はいるのに」「誰でもいいわけではない。条件がふたつある。一つは日食もしく

は月食の日に生まれた事、もうひとつは天涯孤独であること」
確かにさくらは日食の日に生まれている。

「それらの条件をクリアした者で私が最終的に選んだ者が候補となるのだ」

「どうして、そのことを先に言ってくれなかったんですか」

「言ったら嫌だと言うだろ？」

魔女の指摘にさくらは押し黙った。当たり前だ。人殺しをすると言われて、はいいいですよとなるわけがない。さくらはまんまと魔女に騙されたのだ。

「さあ、どうする？ あくまでも人殺しが嫌と言い続けて相手に殺されるか、それとも相手を殺して世界のすべてを手に入れるか。好きな方を選べ。私はチャンスを与えてやった。それを活かすかどうかはお前次第だ」

魔女の提示する選択肢は二つ。殺すか殺されるか。それは、とても難しい選択だった。

第1・5話【二人の少女？】

第1・5話【二人の少女？】

その世界は内戦で荒廃していた。20年以上の内戦で兵士となる大人が少なくなってきたため、子供までもが武器を持って戦っていた。

ルーシー・ブランケットもそんな子供兵士の一人だった。物心がつくまえに両親が死亡したルーシーは武装勢力『青き正常なる世界のために活動する会』によって育てられた。ただ他の子供たちとちがうのは、ルーシーは最前線に立たされることがなかったことだ。それは、リーダーのアブラヒムがルーシーの父親の親友だったからだ。亡き親友の忘れ形見を立派なレディとするため、アブラヒムはルーシーを大事に育てた。無論、武装勢力にいる以上ルーシーも戦闘とは無縁ではなかった。何度も命の危険にさらされたこともあった。それでも、ルーシーは自分が不幸とは思わなかった。皆が自分を大事にしてくれているとわかっていたからだ。

だが、それは永遠を約束されたものではなかった。終焉は突然に訪れた。チャイムを鳴らすなりドアをノックするなりしてもらいたいののだが、何も言わずに許可ももらわずにやってくる。不法侵入と訴えたところで聞き入れてもらえない。政府の治安部隊にアジトを発見され急襲を受けたのだ。

「逃げろ、ジーナインG9だ」

外にいた仲間が駆け込んだ直後に何発も銃弾を浴びて倒れた。同時に治安部隊の隊員が屋内に進入して銃を乱射した。

「こっちだ」

アブラヒムはとっさにルーシーの腕を掴んで奥に逃げた。銃弾がルーシーをかすめたが、どうにか逃げ込むことができた。しかし、何

人かの同胞が銃弾に体を貫かれた。

「政府の組織が実弾兵器を使うなんて……」

禁止されている武器をこうも簡単に使うことにルーシーは怒りを覚えた。それも事もあるうに法令を順守すべき政府の組織である。仲間のステイブが敵に応戦しながら言い返す。

「それが奴らってことだ」

長期に及ぶ（ところどころで停戦期間はあったが）内戦でこの世界は国土だけでなく人々の心まで荒廃してしまっていた。誰もが、大人だけでなく子供までもが、人を殺すことに慣れてしまっていた。

「くそっ、このままじゃ全滅だ」

「俺が突破口を開く！」

「おい、待てミーシャ！」

仲間の一人が制止を振り切って飛び出した。銃弾が彼の体をかすめたり命中したりしたが止まることなくそのまま突き進んだ。腹に何か抱え込んでいるような姿勢で向かってくる姿に、その意図を察した治安隊員は悲鳴を上げた。

「逃げろ！」

だが、すでに時遅く彼らは自爆に巻き込まれた。

「ミーシャ！」

仲間の壮絶な死にルーシーは叫んだ。その手をアブラヒムが引く張る。

「行くぞ、この隙に脱出するんだ」

外にはまだ治安部隊がいるが、さっきの爆発で混乱しているはずだ。その混乱に乗じてルーシーたちは脱出を図った。

逃げ切ることができたのはルーシーだけだった。最後はアブラヒムが囹となって敵を引きつけてくれたのだ。だが、これでルーシーは一人となってしまった。

『Are you all right?』

デバイスのモルゲンステルンが主を気遣うが、ルーシーの心は沈んでいた。ああも簡単に仲間が全員いなくなるなんて思ってもみなかった。特にアブラヒムはルーシーにとって父親のような存在だった。

『Try not let it get to you』

「ありがとう。モルゲンステルン」

もはやルーシーにはこのしゃべるブレスレットしかいなくなってしまった。頼りになる人なんていない。多少の魔導の心得があるルーシーは他の反政府組織に入るという選択肢も無いこともないが、もう人が死ぬところを見たくはなかった。

「これからどうしよう……」

政府が戦争で親を亡くした子供たちを保護している施設に入るという手をあつたが、そこは児童保護施設という名の人間の廃棄場だった。満足な食事も与えられず狭い部屋に明らかに過剰な数の子供を詰め込む。当然、栄養失調や疾病にかかって倒れる子供が続出した。無論、ちゃんとした施設もあつたが、そこに入れた子供はほんの一握りだった。それだけ親を亡くした子供が多いということだ。その子供たちを放置していたら武装勢力に兵士にされてしまうため、それを防ぐためにこのような収容施設が存在しているのだ。もう、ルーシーには行く場所がなかった。

「どうして……」

ルーシーは空を見上げて呟いた。

「どうして、空はこんなに明るいのにその下にいる人たちの心は暗いの？　なんで、皆が憎しみ合って殺し合って…そんなの誰が望んでいるの？」

やるせない気持ちで胸がいっぱいになる。ルーシーは政府だけが悪いとは思っていなかった。自分たちの正義のために戦うのは政府だろうと反政府だろうと変わらない。彼女は武装組織と一緒にいたが、戦闘らしき戦闘に参加したことはなかった。戦闘に巻き込まれたのは今回のように敵の急襲を受けたときだった。

「私はこれから何をすればいいんだろう……」

ルーシーは自分に問いかけた。復讐？　いやアブラヒムはそんなこと望まない。彼は死んだ娘とルーシーをだぶらせている節があった。そんな彼がこれ以上ルーシーが戦争に関わるのを快く思わない。だとしたら、普通の幸せな人生を送ることか？　しかし、いまのこの世界の現状ではそれこそ至難の業であろう。となれば、残された道は…。

「この戦争を終わらせる」

しかし、どうやって？　戦争というものは始めるのは簡単でも終わらせるのが非常に難しい。勝っていたとしても失った犠牲以上のものを得るために戦いを続ける。負けている方は何としてでも勝とうとして戦いを続ける。勝利が期待できなくなったとしても、少しでも降伏条件を有利にしようとして戦い続ける。あとはどちらかが力尽きるまで戦うしかない。時空管理局もとうの昔にさじを投げてしまっている。ルーシーは途方に暮れた。目的を見つけたとしても彼女にはそれを達成するだけの力も手段もなかった。

「困っているようだね。なんなら僕が手を貸してあげようか？」

不意に声がしたのでルーシーは後ろを振り返った。背後に彼女と
同じ年くらいの少年が立っていた。

「いつの間に？」

まったく気配を感じなかった。

「はじめましてルーシー」

「どうして私の名を？ あなたは……誰？」

「僕は神官だ。神の意思を君に伝えに来た」

「神の意思？」

この世界に神の存在を信じているのなんてほとんどいない。いる
のは死んだ者とまだ死んでいない者だけだ。

「そんな怪しい者を見るような目で見ないでよ。僕は君の味方だ」
自分から敵意はない、味方だと言って近づいてくる奴ほど信用で
きないとはアブラヒムの弁である。詐欺師が自分は詐欺師と言って
近づいてくるだろうか。それと一緒にである。

「私に何の用なの？ 神の意思って？」

「ルーシー、君は神になるんだ」

ルーシーは首を横に振った。とても子供の冗談につきあえる気分
じゃない。

「あなた別の世界の人間ね。この世界じゃ神様なんて単語出さない
方がいいわよ。神様なんて所詮無知で無力な人間が絶望の中から少
しでも希望を見出そうとして生み出した空想の産物なんだから」

たといえたとしても、この荒廃した世界なんてとっくの昔に見捨て
られている。神に見捨てられた、そして人々が神を信じない世界。

「宗教の勧誘に来たんでしょうけど、もう少し訪問先を考えるべき

ね。よりによってこんな世界に来るなんて」

「確かに君の言うとおり神はいないかもしれない。少なくとも僕は見たことがない。だから、君が神になるんだ。神になればこの世界の戦乱も終わらせることができる」

「本気なの……」

ルーシーは神官の顔色をうかがおうとするが、その表情はいたって普通である。何かを隠そうとしたり相手を騙そうとしたりと風には見えなかった。

「神がこういうものなのかそれは僕にもわからない。でも、人間以上の力を与えることができる。その力の使いようで君は神にも悪魔にもなれる」

「神にも悪魔にもなれる力……」

「君はこの戦争を終わらせたいと願っているんだろ？　いまの君には無理だ。誰も君の意見になんて耳を貸さない」

「だから神になれと……？」

「決めるのは君だ。僕はチャンスを与えた。それを活かすも活かさないのも君次第だ」

「……」

ルーシーはしばし考えた。神官の言うようにこのまま生きていたとしても、いずれ野垂れ死にするのが見えている。しかし、もし本当に神になれるとしたら……。

「わかったわ。神にでもなんにでもなる」

「よく決心したね。もっとも君がこれから生きていくにはこれしかなかったんだけどね」

まるで最初からそうなるかわかっていたと言わんばかりの神官にルーシーは少しイラッとした。

「で、どうすればいいの？」

「まずは僕の両目を見るんだ。絶対に目を閉じたりそらせたいしないように。いいね」

「わかった」

「じゃ、始めるよ」

「えっ？」

神官の両目が赤く光ったことにルーシーは虚をつかれた。変な子供と思っていたが、もしかしたら人間ではないのかもしれない。その直後、ルーシーは目から何かが体内に流れ込んでくるような感覚に襲われた。

「な、なに？」

「目を閉じないで、もうすぐ終わるから」

「う、うん」

不安を覚えながらもルーシーは神官の言葉に従った。しばらくして神官の眼光も消えてルーシーの体内を何かが駆け巡るような感覚も消えた。

「何をしたの？」

「まずは君のリンカー・コアを破壊してリーガル・コアを形成して、君の血を帝王の血にした」

「帝王の血？」

戸惑いを見せるルーシーに神官はさらなる条件を口にした。

第2話【悲しさと寂しさと】？

第2話【悲しさと寂しさと？】

神官がルーシーに出した神のような存在になるための絶対条件、それはもう一人の候補と戦ってどちらかが生き残らなければならぬことだ。

「それは相手を殺せということ？」

「手段や方法は問わない。とにかくどちらかが生き残っている状況が成立した時点で神のような力を持つゼクエスの帝王が誕生する」

「ゼクエス？」

それはルーシーが初めて耳にした単語だった。育ての親であるアブラヒムはたくさんの書物をルーシーに読ませて学ばせたが、その中にゼクエスという単語はどこにもなかった。そのゼクエスの帝王というのになったら神様みたいな力が出せてこの世界の戦争も終わらせることができる。だが、そのためにはもう一人の候補が死亡するという状況を作り出さなければならぬ。確実かつ早期ということであれば、それは殺害するということだろう。

「お断りするわ」

ルーシーはあっさり拒否した。誰かの命と引き換えになんてできない。世界の平和にするための第一歩が人殺しなんておかしすぎる。

「悪いけどなかったことにして。私は誰かを犠牲にして望みを叶えるような人間じゃない」

だが、そう言われて引き下がる神官ではない。

「君がそう言っているにも向こうは君を殺しにくるよ。その時はどう

するんだい？」

「その時はその時よ。向かってくる敵は排除するだけ。それでも命を取ろうとまでは思わない」

ルーシーの意思が堅いと知った神官は作戦を変えることにした。

「ちょっとついてきて。君に見せたいものがある」

「見せたいもの？」

訝りながらもルーシーは神官が差し出した手を握った。

「これから君をある場所につれていく。そこで最終的にどうするか判断して。それで、君がどうしても嫌だと言うなら僕もあきらめる」どこにつれていかれるかわからないがルーシーはOKすることにした。

「いいわ。行きましょう」

「じゃ、行くよ」

神官はルーシーをつれて瞬間移動した。

「ここは……」

普通なら一瞬で周囲の光景が変わると多少なりとも頭がクラクラするものだが、目の前の光景はクラクラするのも忘れるくらい異様なものだった。ルーシーがつれてこられたのはどこかの街らしいが、異様なのは住民らしき人間が皆倒れていることだろう。内戦が全土に拡大しているこの世界では、街が戦闘に巻き込まれて住民が全滅するというケースは決して珍しくはなかった。だが、この街が異様なのは建物などに破壊された形跡がないことと、死亡している住民たちに外傷が見当たらないことだ。

「ここは第30地区ね」

それはルーシーたち反政府組織の間で噂になっていた場所だった。

陸軍治安特務部隊第9グループ通称G9による無差別大量殺戮が行われたとされる場所だ。政府は伝染病の蔓延と発表しただが、実際は地区全体が反政府運動に染まったことへの過剰な対処だというのが反政府組織の間での見解だ。伝染病か治安部隊による虐殺か確証は得られなかったが、実際に現場を目の当たりにしてルーシーは確信した。

「政府の仕業ね」

「D3を使ったんだ」

「なんですって？」

ルーシーは信じられないといった顔で神官の方を振り向いた。

「南国条約で禁止された毒ガスを使うなんて…政府の組織なら少しぐらいの分別はあるだろうに…」

拳を握りしめ怒りに震えるルーシーに神官が冷たく指摘する。

「君たち反政府勢力もこれほどじゃないけど数多くの違法行為をしてきたんだよ。結局、人間がしてきたことはどれも同じだってことさ」

神官の指摘にルーシーは思わず睨みつけたが、反論はできなかった。ルーシーが身を寄せていたグループではそんなことはなかったが、反政府組織の中には非道な行為に走るグループがあるのは事実だからだ。

「ちょっと見て回ってきていい？」

「いいよ。僕はここで待っているから」

ルーシーは街を見て回った。吸引した瞬間に死に至るD3ガスは被害者に苦痛を与えることはない。だが、少量でも広範囲の生物を死亡させる強力さゆえに使用が特に禁止されている毒ガスである。初めて実戦に投入された第78管理世界での1ヶ月戦争ではわずか

一週間で数千万人の人命を奪っている。

「亡霊のひとつやふたつは出てきてもおかしくないわね」

周囲の惨状にルーシーは独りごちた。ガスが散布されるその瞬間までこの人たちにはそれぞれの生活があった。会社で働くお父さん、学校で勉強する子供、お買い物するお母さん…それらが一瞬にしてすべてを奪われたのである。老若男女の区別もなく、そう赤ん坊でさえも。誰もが無残な死骸を晒しているのだ。死屍累々の惨状はまさにこの世に地獄が現出したようだった。

「なんで…なんでこんな…」

怒りがこみ上げてくる。戦場で人が死ぬのは仕方ない。皆それを覚悟して戦っているのだ。だが、この人たちはどうだ。戦いとは無関係の人たちばかりではなかったのか。公園で遊んでいた子供たちは、それを見守っている母親たちはなぜ死ななければならなかったのか。ルーシーは政府への怒りで胸がいっぱいになった。同時に悲しくもなった。どうして彼らはいや人類はこうも簡単に皆殺しという惨いことができてしまうのだろう。

「でも、私も当事者だ…」

ルーシーはまだ人を殺したことが無い。アブラヒムの配慮だ。アブラヒムは言った。

「お前だけはキレイなままでいてほしいんだ」

内戦もいつかは終わる。その時に社会に出ても恥ずかしくないような女になれ。アブラヒムがいつも言っていた言葉だ。自分が神のような存在になるために人を殺したら、自分に期待してくれていたアブラヒムの言葉を裏切ることになる。そうしたら自分を逃がすために犠牲となったアブラヒムに報いることなんてできない。だが…

「このままでは、こんな悲しいことがもつと起こってしまう」

仲間をすべて失った時も、この街を状況を見たときも最初は怒りがこみあげてきたが、それよりも悲しみが上回るようになった。悲しみは胸が痛くなり、その痛みでルーシーは涙を流した。涙が流れ切った時、ルーシーはある決意をかためていた。戻ってきたルーシーを一目見るなり、神官はクスツと笑った。

「どうやら決心がついたようだね」

ルーシーはそれに答えず無言のまま神官に近寄った。

「本当にその何とかの帝王とかになったら、この戦争を終わらせることができるのね？」

「この世界だけじゃない。すべての次元世界から戦争をなくすことができるよ。ゼクエスの帝王はすべてを統べる支配者だからね」

そのゼクエスの帝王というのがよくわからない。これまでたくさんの本を読んでいるルーシーは伝説の類の話も結構知っているが、ゼクエスなんて聞いたこともなかった。

「私はその帝王候補になったのよね。体も作り変えられた。どこがどう変わったの？」

「これを持って」

神官はカードと読み取り機らしきものをルーシーに渡した。

「そのカードをリーダーに読み込ませるんだ。そうすれば君はゼクエスの魔導師、ゼクエスの場合は魔闘士というんだけどね。それに变身することができるんだ。まあ、論より証拠やってみて」

「……わかった」

すでにルーシーはミッドチルダの魔導師である。しかし、リンカー・コアが壊されてリーガル・コアというのが作られた。ミッドチルダの魔導師ではなくなったということか。少し不安を抱きつつも

ルーシーはカードをリーダーに読み込ませた。

「変身！」

リーダーに読み込まれたカードが光の粒子となってルーシーを包み、彼女の服を消してバリアジャケットを装着させた。最後に先端に斧と槍の穂先がついた長柄の武器が出現して変身が完了した。

「これがゼクス……」

「そうだよ。ミッドやベルカとはまったく異なる魔法体系。選ばれし者のみができる最強の魔導師だ」

「すごい……力がこみ上げてくる」

「君の持っているそのデバイスは魔槍ハルバード。君の血を与えることで真価を発揮するんだ」

「血を？」

「帝王の血さ。一回やってみてごらん。大丈夫、ちよつとの血でいいからさ」

言われたとおりにルーシーは魔槍の斧の刃の部分に指をあててみた。すると、ちよつと触れたただけなのに皮膚が切れて血が出てきた。その血に反応して魔槍が話し出した。

「Nice to meet you. My master」

「こちらこそよろしく」

「それで君たちの契約は終わった。いいかい、よく聞いて。ゼクエスの魔闘士にはどんな物理的攻撃でも魔法攻撃でも突破することができないAIシールドがあるんだ。そのAIシールドを打ち破る唯一の攻撃法が主の血を与えられたデバイスによる攻撃なんだ。それともう一つ、君たち帝王候補にはそれぞれ相手の何かを絶対的に支配する力が与えられている。ルーシー、君には相手の記憶を1年間の分だけ書き換える力を与えてあるんだ。これは相手と視線を合わさなきゃ駄目だし、同じ帝王候補や一定以上の魔力がある魔導師に

は通用しないけど、結構役に立つと思うから有効に使って」

「ありがとう、いろいろと」

「君をここに連れてくるのは正直迷った。君が怒りだけに身を任せたらどうしようってね。怒りは憎しみとなり憎しみは復讐しか生まなくなる。でも、君は怒りよりも悲しみを優先させた。君ならきつという帝王になれるだろう。僕の役目はここまでだ。君の相手は第97管理外世界にいる。一刻も早くゼクエスの帝王が現れるのを期待する」

そして、神官は姿を消した。残されたルーシーは改めて決意をかためる。

「ごめん、アブラヒム。私はあなたの期待通りの大人になれそうにない。でも、絶対にこの世界から戦争をなくしてみせる」

そのためにもう一人の帝王候補を殺めることになったとしても。

「いくよ、ハルバード」

「Yes, Your Highness」

ルーシーはライバルがいる第97管理外世界に出陣した。

第2. 5話【悲しさと寂しさ】？

第2. 5話【悲しさと寂しさ？】

さくらがゼクスエスの帝王になるには相手の候補を殺さなくてはならない。とても、小学校5年生に提示するような条件ではないだろう。

「お前にその気が無くても向こうはお前を殺しに来るぞ」

魔女はそう警告したが、さくらはそれに返答することはできなかった。殺すのは嫌だけど殺されるのはもっと嫌だ。どっちも嫌だ。

「私はどうしたらいいの？」

誰もいない道場でさくらは途方に暮れた。彼女には相談できる人がいなかった。いたとしても、誰も信じてはくれないだろう。それでも話を聞いてくれるだけでも気分が軽くなる。だが、さくらには気軽に話しかけられる友人がいなかった。内気なさくらは他人とコミュニケーションを図るのが不得手だった。唯一、他人に対して積極的になれるのが剣道に打ち込んでいる時だが、稽古している時は相手の顔は防具で見えにくいし、剣道をしている時のさくらは集中力すぎてほとんど無言となってしまうのだ。そして、稽古が終るとそそくさと出て行ってしまふのである。だから、剣道の門下生たちともコミュニケーションが取れていなかった。寂しいと思わないわけではなかった。だが、いままでは祖父がいてくれた。それだけでもよかった。寂しいと感じた時はいつも以上に稽古に励んだ。でも、祖父はもういない。稽古の相手もない。

「私はひとり……」

道場にはさくら以外誰もいない。祖父の剣道教室は本人の死によ

り自然消滅となった。葬式は近所の人でやってくれた。喪主となつたさくらも忙しく働いたため、まだ見ぬ相手との戦いについて考えることができなかった。ようやく、ゆっくりと考える時間ができたところだ。だが、日が暮れる寸前のうす暗い道場はさくらの孤独感を助長させた。道場において寂しいと感じたことは一度もなかった。

「そういえば独りで道場にいたことなんてなかったな」

さくらは道場での思い出を振り返った。記憶に残っている最初の思い出は稽古をしている母の姿を見ているときだった。さくらの母親は全日本剣道選手権大会で2回出場して優勝と準優勝という成績を収めた実力者で、3回目の出場登録の直前に妊娠が発覚して表舞台から身を退いたのだ。さくらの記憶に残る母はいつも優しかったが、どこか寂しげでもあった。本当はもっと大会とかに出て全国の実力者と渡り合いたかったのかもしれない。子供ができてしまったために、身を引く羽目となってしまった。無論、本人の自己管理の問題である。が、さくらは最近自分が母から生きがいを奪ってしまったのではないかと悩むようになった。それなら、自分が母の分まで剣道で活躍しようと決意した矢先の今回の出来事である。

「お母さん……」

母のことを思い出してさくらはまた寂しくなった。寂しくなったときに慰めてくれていた祖父もいない。道場までついているこの広い敷地にただ一人でいるという孤独感にさくらはいたまれなくなった。

（ゼクエスの帝王になれば家族を取り戻すことも容易い）

さくらは魔女の言葉を思い出した。そう言っただけで魔女はさくらにリングとヘビのブローチを渡したのだ。リングにヘビがからみついている趣味の悪いブローチだ。魔女の言っていることが本当であれば、帝王になれば母も父も祖父も生き返らせて一緒に生活することがで

きる。寂しさで身が潰れそうになるさくらは今すぐにも帝王になりたかった。だが、そのためにはもう一人の帝王候補を殺さなければならぬ。

「そんなことできない……」

そうは言っても向こうはさくらを殺しにいずれやってくる。殺し合いはおろか喧嘩もしたことがないさくらに勝ち目はない。

「なんとか、話し合うことはできないかな……」

しかし、さくらは自分から初対面の相手と積極的に会話するのが苦手な少女だった。いい考えが思い浮かばないまま時間だけが過ぎていき、腹が減ったさくらは晩御飯を食べに家にもどることにした。道場を出て家に向かおうと歩き出したさくらは何かの気配を感じて振り返った。すると、道場の屋根の上にさくらと同じ年くらいの長い髪の少女が斧と槍が一緒になったような武器を持って立っていた。

「だ、誰？」

とっさに身構えるさくらに侵入者はこう言い放った。

「私はルーシー・デオドア・ブランケット。貴方と同じゼクエスの帝王候補だ。貴方には何の恨みは無いけど、私は貴方を倒さなくてはならない」

その瞳には迷いがなかった。

第3話【初めて抱く他人へのある感情】？

突如として現れたルーシーにさくらは愕然と立ち尽くした。

「あ、あなたが……」

相手が自分と同じ年くらいの女の子だったことにさくらは驚きを隠せなかった。子供であるさくらが帝王候補なのだから、相手が子供でもおかしくはない。だが、さくらは殺し合いをしようとするのだから相手はてっきり大人の男性だと思い込んでいた。それが自分と同じ女の子だったのだからさくらが驚くのも無理はない。しかし、事実は事実である。さくらを見下ろすルーシーからは殺気が感じられた。武道をやっているさくらにはわかった。相手の少女が幾多の修羅場をくぐりぬけてきたことを。

「あ、あの……」

とにかく話をしようと思った。だが、明らかにこちらに敵意を向けている相手を説得できるような話術などさくらは持ち合わせていなかった。おろおろするさくらに、ルーシーは魔槍を大きく振りかぶった。

「ま、待って」

さくらの制止に聞く耳持たずといった感じでルーシーは襲いかかった。ルーシーが振り下ろす魔槍を寸前のところでかわしたさくらはなおも話をしようと試みた。

「ちょっと待って。私の話を聞いて。話せばわかる、わかるから」

「問答無用」

ルーシーはさくらの話を聞く気はなかった。さくらが戦闘の素人だと見抜いたルーシーは一気に片をつけるつもりなのだ。

「逃げ回らない方がいい。よけいな苦しみを味わうことになる」

そう忠告するとルーシーは、魔槍の穂先をさくらに向ける形で構えた。さくらを刺し貫くつもりなのが見てわかる。初めて感じる自分への殺意にさくらは息を吞んだ。そんなさくらにルーシーは一言、

「ごめん」

その顔には一瞬躊躇いが見られたが、すぐにキツとした目つきになつてさくらに突進した。

「ブリッツアリガー！」

魔槍の穂先がさくらの胸を捉える。が、さくらの体を突然光が包んだかと思つたら、槍が何か壁にぶつかったかのように止まった。光が収まり、自分の攻撃を止めた壁の正体にルーシーは唇をゆがめた。

「A I シールド……！」

防御魔法で最高を誇るシールドの向こうには黒いバリアジャケットに身を包んださくらの姿があつた。ルーシーは魔槍に血を与えなかったことを後悔した。A I シールドを打ち破れる唯一の攻撃手段が主の血を与えられた帝王候補のデバイスによる攻撃なのだ。もしルーシーが魔槍に自分の血を与えていたらいまの一撃で決着はついていただろう。一方、寸前のところで命拾ひしたさくらだったが、変身して魔剣を手にしてもなお戦うことを躊躇っていた。魔剣グラムはさくらのデバイスで、ルーシーの魔槍と同じく主の血を吸収することで威力を発揮するバンパイアタイプのデバイスである。

剣を構えながらも震えているさくらをルーシーは不憫に思った。恐らく、戦いとは無縁の環境で育つたのだろう。同時に羨ましくもあった。やはり戦場は子供がいるべき場所ではない。こうして、子供同士が命をかけて戦うなんて本来おかしいことなのだ。だが、目

の前で死んでいった仲間たちや何もわからないまま毒ガスで皆殺しにされた人たちの姿がルーシーを戦いに駆り立てていた。しばし、対峙していた二人だったが、その時に玄関のチャイムが鳴らされた。

「どうやら人が来たようね。今日はここまでにしておきましょう」
ルーシーは槍を下げて姿を消した。どうやら引き上げてくれたらしい。

「ふはあっ」

緊張が解けたさくらはへらへらと腰を下ろした。変身も解けて魔剣もブローチに戻った。チャイムが何回も鳴ったが、さくらはその場から立つこともできなかった。やがて、何回もチャイムを鳴らしたのに誰も出てこないことを不審に思った近所の奥様が様子を見に入ってきて庭でへたり込んでいるさくらを発見した。

「どうしたの、さくらちゃん。何があったの？」

近所の奥様が驚いて駆け付けると、さくらはガクツと気を失った。

目が覚めたとき、さくらは布団の中にいた。

「なんで、私……」

さくらは自分がなぜ布団の中にいるかわからなかった。昨夜、もう一人の帝王候補であるルーシーという少女の襲撃を受けてそれから……

「誰か来たから、あの娘が帰って……」

それから確か近所のおばさんが駆け付けてくれて安心したのかそのまま気をうしなってしまった。自分をここまで運んでくれたのは多分そのおばさんだろう。それか、奥さんに呼び出された御亭主だ

ろう。

「何かお礼を言わないと」

そのお婆さんのおかげでさくらは命拾いしたのだ。それと魔剣にも。

「ありがとう、あなたのおかげで助かった」

「No problem」

あの時、ブローチが自己判断でさくらを变身させてAIシールドを展開していなかったら、さくらはルーシーの魔槍に胸を貫かれていただろう。その時のことを思うと怖くなる。

「どうしてこんなことに……」

それは自分が魔女の甘言に乗ってしまったからだだろう。なら、あの少女はいかなる理由で帝王候補となったのか。自分と同じような理由かそれとも世界の支配者になるという欲望からか。だが、初対面でほとんど会話もなかった相手だが、さくらにはルーシーが自分の野心や欲望のために相手を殺すような少女には見えなかった。何か彼女なりに理由があるのだろうか。

「なんとかお話がしたいけど」

だが、いまの自分はルーシーにとって倒すべき相手でしかない。どうすれば話し合うことができるのか。と、その前に、

「何か食べよう」

昨夜からなにも食べていない。2階の自分の部屋から1階の台所に下りてみると、握り飯が置いてあった。恐らく、昨日のお婆さんが作っておいてくれたのだろう。洗面所で顔と手を洗って、居間で握り飯を食べながらさくらは今後のことを考えた。きっと、ルーシーはまた襲ってくる。まだ戦うことに躊躇いがあるさくらに勝ち目

はない。

「どうすればいいんだろう」

いい考えが思い浮かばないまま時間だけが過ぎていき、学校に行く時間となってしまうた。さくらは急いでシャワーを浴びて歯を磨いて髪を整えてランドセルに教科書とノートを詰めた。と、ここでさくらは今日が授業参観日であることを思い出した。いつもは祖父が来てくれたのだが、祖父が死んだいまとなつては誰も来てくれる人はいない。

「……」

さくらは一度詰めた教科書とノートをランドセルから出した。学校に行く気が失せてしまったのだ。

「学校に電話しなきゃ」

休む旨を学校側に伝達すべくさくらは携帯電話を手にとった。そこへ、玄関のチャイムが鳴った。

「はい」

玄関に行ってみると、昨夜のおばさんが来ていた。

「どう？ さくらちゃん具合は」

心配で見に来てくれたらしい。

「あ、はい大丈夫です。昨夜はすみませんでした。ご迷惑をおかけして」

「一体どうしたの、何があったの？」

庭で女の子がへたり込んでいて駆け付けたら気絶したのだから心配するのも無理はない。

「それは、その……」

さくらはどう返答しようか迷った。正直に言っても信じてはもらえない。だったら嘘をつくしかない。しかし、全部嘘では怪しまれるかもしれないので所々事実を交えて話した。

「道場の上に人がいたんです。それで、びっくりしちゃって……」

「不審者？ 泥棒かしら？ どんな人だったの、男？ 女？」

「暗くて顔はわかりませんでした。がっしりした体格だったので男の人だと思います。悲鳴をあげようと思ったんですけど、怖くて声が出ませんでした」

「それで、その男はどうしたの？」

「チャイムが鳴ったら逃げて行きました」

「そう危なかったわね。怖かったでしょ。女の子ひとりだもんね。やっぱり警察に通報した方がよかったかしら」

「いえ、大丈夫です。あまり騒ぎにしたくないので」

「そう？ あなたがそう言うんじゃない。でも、気をつけないと駄目よ。女の子ひとりなんて泥棒に入ってくださいと言っているようなものだから」

「はい、気をつけます」

「ところで、もう学校に行く時間じゃないの？」

「ああ、今日は気分が悪いので休もうかと」

「そうよね、あんなことがあったばかりだものね。でも、明日はちゃんと行くのよ」

「わかりました。ありがとうございます」

おばさんが帰るのを見届けた後、さくらは学校に電話して休むことを伝えた。

「明日はちゃんと来るんだぞ」

担任はそう言って電話を切った。

「明日ね、行けたらいいんだけど」

さくらは自嘲気味に呟いて携帯を閉じた。周りはいつもと変わらない平穏だ。自分だけが平穏じゃなくなったことにさくらは少し苛立ちを感じていた。

第3. 5話【初めて抱く他人へのある感情】？

さくらは気分転換に外にでることにした。一人でいたらルーシーに襲われるかもしれないので、他の人がいる場所にいた方が安心という判断もあった。近くの公園に行ってみると、小さい子供を連れてきている母親たちの姿があった。さくらも小さい頃に母親に連れて行ってもらったことがあった。

「……」

しばらくベンチで遊んでいる子供たちやそれを見守りながら会話している母親たちを眺めていたさくらだったが、その平和そうな光景に不機嫌になっている自分に嫌気がさした。

「最低ね」

吐き捨てるように呟くと、さくらは場所を変えることにした。これ以上、他者が幸せにしているのを見たくなかった。もう自分にはあの人たちみたいなごくありふれた普通の幸せさえこないのだ。そう思うと、なんだか複雑な気分になる。

『ゼクエスの帝王になれば死んだ家族を生き返らせることもできる』
もし、魔女の言っていることが本当だったら。さくらは温かい家族に囲われたごく普通の生活を取り戻せるだろう。だが、それにはもうひとりの帝王候補であるルーシーの命を奪わなければならない。さくらにはできない相談だ。かといって、ルーシーに殺されるのを由として人生の幕引きを決めるには、10年数ヶ月という歳月は短すぎるだろう。仮に、ルーシーと話し合いで戦いを回避できたとしても、ひとりぼっちという問題は解決しない。どの道を選択しても、さくらにとってはつらい決断となる。

「あの娘もこうして悩んだのかな」

さくらはルーシーのことを思った。昨夜の戦いでかすかに見せた躊躇い。彼女も他人の命を犠牲にして目的を果たすことに疑問を感じているのかもしれない。魔女が言っていた。帝王候補は天涯孤独な者が選ばれると。だとすれば、ルーシーもさくらと同じように家族を失ってひとりぼっちということになる。

「帰ろうか」

平日の午前中に、小学生が学校にも行かずブラブラとしているのを町内会の巡回パトロールの人に見咎められたら、やっかいだと思ったさくらはひとまず家に戻ることにした。気分転換のつもりで外に出たが、結局は気分が重くなっただけだった。公園を出て、家に向かうさくらは不意に周囲の景色が一瞬にして紫っぽい色に染まるのを見て目を疑った。

「な、なに？」

狼狽するさくらにブローチが要警戒を告げる。

「on full alert」

理科があまり得意でないさくらでもこれが自然現象でないことはわかる。こんなことができるのは…

「いる、彼女が……」

さくらは周囲を見渡した。ルーシーの姿はどこにもない。とする
と……

「上！」

空を見上げると、ルーシーが空中に浮かんでいるのが見えた。ルーシーは、さくらが自分に気付くとスーッと降りて地面に着地した。

「今度は邪魔が入らない」

魔槍をさくらに向けるルーシー。さくらは周囲に起きている現象について訊いてみた。

「これは何なの？ どうして周りの色が変わったの？」

「あなた、結界も知らないの？」

ルーシーは意外だという風に問い返した。だが、すぐに納得する。

「そうか、管理外世界だから魔法のことを知らなくても……」

しかし、それにも疑問がある。どうして、魔法が認知されていない世界の少女がゼクエスの帝王候補に選ばれたのか。最強の魔導の王というなら、その候補は相当な実力者でなければならぬはずだ。しかし、自分はBクラスの魔導師だし、さくらは恐らく魔法についても知ったばかりの実戦も経験したこともない素人だ。だが、いくつか腑に落ちない点があっても、二人が帝王候補であるというのが現実だ。

「結界というのは一定のフィールド内に邪魔者を入れなくする魔法のこと。こうしておけば昨夜みたいに他人に邪魔されることは……」
ルーシーは魔槍を大きく振りかぶった。

「待って！」

さくらが制止するが、無論ルーシーは聞き入れない。

「ない！」

言葉を終わると同時にルーシーはさくらに突進した。さくらも意を決してブローチを手を取った。

「セッタップ！」

「Yes, My Lord」

変身したさくらは魔剣で魔槍を受け止めた。

「ちょっとでいいの。お話をする時間を…」

「言葉なんて必要ない」

「どうして？ 私たち女の子なんだよ？ こんな……がつ？」

さくらは最後まで言いきることができなかった。ルーシーの蹴りが腹に入ったからだ。

「言ったはずだ。言葉は必要ないと」

よろめくさくらにルーシーは魔槍を振り下ろした。

「A I s h i e l d」

魔剣がA I シールドを発生させてさくらを守った。ルーシーはいったん後ろに下がると魔槍の突端に指をあてた。魔槍に自らの血を与え再びさくらに突進するルーシー。その猛攻にさくらは防戦一方となった。

「ま、待つて」

ルーシーの攻撃を何とかしのぎながら、さくらはなおも話し合いによる解決を試みた。だが、ルーシーは相変わらず耳を貸そうとしない。

「どうして……」

自分がこうも訴えかけているのに全く聞き入れようとしないうるシーにさくらは若干の苛立ちを覚えた。

「私たちは戦争をしているんだ。戦争を終わらせるにはどちらかが滅ぶしかない」

二人の戦いをルーシーは戦争と表現した。勝った方がすべての次元世界を支配する。確かにこれは全世界の命運をかけた戦争といえ

るだろう。だが、戦争を知らないさくらにはそんな理屈など納得できなかった。

「そ、そんな……」

「納得できないなら私を憎んでくれても構わない。私は自分がしたことには弁解もしないし、正当化するつもりも無い。私は私がしたいことをするだけ」

そこには昨夜かすかに見せた躊躇いはなかった。ルーシーはまたいったん下がって魔槍の穂先をさくらに向けて構えた。昨日の技をやるつもりなのだ。

「ブリッツアリガー！」

主の血を含んでいる魔槍にはAIシールドも役に立たない。さくらは剣で受け止めた。だが、ブリッツアリガーの威力はさくらの想像を超えていた。さくらは衝撃に耐えられずに後方に吹っ飛ばされてしまった。

「きゃあああああっ！」

このままではさくらは塀に激突してしまう。そう判断した魔剣がAIシールドを発生させてさくらを激突の衝撃から守った。

「Is not there injury？」

「ええ、ありがとう」

札を言いながらも、崩れた塀を見てさくらはゾッとなった。AIシールドがなかったら、さくらは直に塀に激突して最悪命を落としていたかもしれない。

「どうして？ 私、何も悪いことしていないのに……」

さくらの中で理不尽に命を狙われることへの怒りが湧き上がってきた。怒りの矛先はルーシーに向けられた。

「そんなに帝王になりたいの？ 見ず知らずの自分に何も危害を加えていない人を殺してまでなりたいものの？ 帝王になって何がしたいっていうの？」

「私が帝王になって何がしたいかをい言ってもあなたには関係ない。私が帝王になった時はあなたはこの世にいないから」
平然と答えるルーシーにさくらはさらに怒りを募らせる。

「あなたが怒りを覚えるのは理解できる。だから、せめて苦しまずに眠らせてあげる」

そう言うのと、ルーシーは魔槍を構えて突撃態勢をとった。

「いくよ」

ルーシーはさくらに向かって突進した。そして、魔槍を高速で突きだす。この技は目にも止まらぬ速さで槍を突き出すことで、あたかも槍が何本もいっぺんに突きだされているかのように見えるのである。ブリッツアリガーよりも威力は劣るが、これを回避するのはまず不可能だろう。

「ノインドラツェ！」

ルーシーはこれで勝利を確信した。戦闘の素人であるさくらにこの技は見きれないだろうからだ。だから、さくらの左わき腹を狙って突きだした魔槍が魔剣で受け止められるとルーシーは驚愕した。

「なっ！？」

最初は偶然だと思った。だが、明らかにさくらはルーシーの動きを読んでいた。あの自然な流れるような感じの魔剣の持っていていき方は、単純に目で追いかけてのと全然違っていた。それは、かなりの実力がなければできないはずだ。さくらの予想外の動きに咄然としていたルーシーは、次にさくらと目が合ってその凄まじいまでの殺

気に満ちた目にゾクツとなった。

「！」

とっさにルーシーはさくらから離れた。ルーシーはこれまで数多くの戦場を経験してきたが、さくらのような心の底から凍りつくような冷たい目を見たことはなかった。

「なんで、こんな娘が……」

ルーシーは事前にさくらを観察していたが、それで見るとさくらは普通の女の子だった。何度も仲間の死を目撃し、自身も幾度か死線をさまよってきた自分とちがって。だが、ルーシーは知らなかった。剣道の稽古をしている時のさくらは大の男すら畏怖させる威圧感を放っているのだ。ルーシーがこっちの世界に来た頃には稽古が行われなくなっていたので彼女には知りようがなかった。剣先を自分に向けるさくらにルーシーは攻撃に移ることができなかった。さっきまでと違って隙がまったくくないのだ。しばし睨み合いが続いた後、さくらが一步を踏み出した。

「でりゃあああああっ！」

「！」

ルーシーはさくらの動きが見えなかった。本能的に頭ををのけぞらして、さくらの突きをかわしたがほんのちよつとでもタイミングが遅れていたらルーシーの顔は魔剣に貫かれていただろう。

「くっ」

すぐにさくらを魔槍で振り払って下がらせたルーシーだったが、相手の実力を過小評価していたことを認めざるを得なかった。

「やはり一筋縄ではいかないようね」

不利を悟ったルーシーは出直すことにした。

「今度こそという言葉は使いたくないけど、次に会った時は必ずあなたを倒してみせる」

そう言い残してルーシーは姿を消した。それと同時に結界も解除されて周囲の色も元にもどった。ようやく戦いから解放されたさくらだったが、生まれて初めて他人に憎悪と殺意を抱いた事に自分が怖くなってしまった。

「私は…私は……」

自分を抱きしめて両膝を地面につけるさくらの体は震えていた。そんな彼女を優しく慰めてくれる人はいなかった。さくらは孤独だった。

第4話【敵か味方か】？

戦いが終わった後、ルーシーはこの世界での拠点としている邸宅に戻っていた。これは、ある富豪が別荘としているのをルーシーに貸し与えているものだ。なぜ、赤の他人のルーシーに別荘をタダで使わせているのか、それは別荘のオーナーがルーシーにそう約束したという風に記憶を書き換えられているからだ。これがルーシーに与えられたゼクエスの能力だ。

「お嬢様、紅茶をお持ちいたしました」

男の使用人が紅茶と菓子を持ってきた。

「ありがとうございます、そこにおいというて」

「かしこまりました」

使用人が紅茶と菓子をテーブルの上において一礼してから去るのを横目で見届けたルーシーは紅茶を口に運んだ。

「平和ね」

庭で紅茶飲んでくつろぐなんて、いままでには考えられないことだった。ゼクエスの力がある限り、自分はこうして何不自由ない平和な暮らしができる。

「いっそのこと、このままでもいいかもね」

ふと、そんな考えが頭をよぎる。だが、その度に仲間や第30地区の住民たちの死が思い起こされる。容赦ない政府軍の攻撃で頭が吹っ飛ばされた者、爆弾で体が四散して腸が空中に舞った者、公園でいちゃついている時に毒ガスで死に至ったカップル、結婚式の最中で同じく毒ガスで人生最良の日を終焉の日とされてしまった新婚さん。彼らの悲惨な死に様が頭から離れないのだ。いまでも、ルー

シーの故国では内戦が続いており、大勢の人が犠牲となっている。故国の人々がこれ以上犠牲にならないためにも、ルーシーは一刻も早くゼクエスの帝王にならなければならない。だが、過日の戦いで性急に事を運ぼうとして情報収集を怠った結果、さくらに思わぬ不覚をとって以来ルーシーは慎重に行動することになっていた。

「果報は寝て待て、か」

この世界で知った言葉だ。気が急いてばかりいると、思いがけないミスを起こしてしまうかもしれない。ルーシーは使い魔がさくらのことを調べ上げている間、この森に囲まれたプール付きの別荘でくつろぐことにしたのである。借り物とはいえほとんど自分の物とっていい。その気になれば、無償で譲渡したとオーナーの記憶を書き換えることもできる。

「便利な能力ね」

クッキーを割って地面にいる小鳥に与える。菓子とはいえ食べ物として動物に与えることはいままでもなかった。食料が常に不足していたからだ。小鳥たちがクッキーをつついているのを微笑ましく眺めていたルーシーは紅茶を飲み干すと、椅子から立ち上がって使用人に出かけることを告げた。

「どちらへ？」

「ちよつと散歩してくる」

「かしこまりました。お氣をつけて行ってらっしゃいませ」

いちいち慇懃にお辞儀をする使用人にちよつとうんざりしつつも、こうしたお嬢様暮らしも悪くないともルーシーは思った。彼女が借りている別荘がある森は動物もたくさんいて、自分の世界にはいないこうした動物たちを観て回るのが好きだった。

「あ、ウサギ」

草むらからウサギが顔をのぞかせていた。この耳が長い不思議な動物がルーシーのハートを見事なまでに捕えてしまっていた。

「おいで」

しゃがんで手招きするルーシーだが、ウサギは森の方に逃げて行った。

「やっぱりわかるんだ。怖い人間だって」

寂しそうにつぶやくルーシー。ゼクエスの帝王候補がなぜ天涯孤独でなければならないのか。それは絶対なる支配者は孤独でなければならないからだ。だから、親兄弟も頼りになる親戚縁者も心の友も持つことが許されないのである。ルーシーは親はとうの昔に死んでいるし、育ててくれた仲間も全員死んでしまった。データーでルーシーの事を知っていても、生身の彼女を知っているものは神官やさくらをのぞけば絶無である。神官はどうやら人間ではなさそうだから、人間でルーシーを知っているのはさくらだけということになる。別荘のオーナーや使用人、最近知り合った近くのコテージの富豪令嬢らしき女性はルーシーを知っていると一言えなくもないが、その素性までは全然知らない。ルーシーも彼らのことをそんなに知らないし、知る必要もないことだ。

ウサギに振られてしまったルーシーは気を取りなして立ち上がるうとした。その時、ルーシーは木々の向こうに何かを感じた。気になって森の中に入って行った。

「この辺だと思うけど」

ルーシーは周囲を見回したが草で見にくい。草をかき分けて探している赤紫色のクリスタルが落ちていた。

「ディアス？　こんなところに？」

珍しい拾い物をまじまじと見つめるルーシー。少し前までなら貴

重な価値があるものだが、いまのルーシーにはただの石ころの価値しかなかった。捨てるのも何なのでルーシーは持つておくことにした。

「そうだ、加工してもらってアクセサリにでもしよう」

さっそく別荘にもどって使用人に業者にでも注文してもらおうと、道に出たルーシーは二人組の若い女性と出くわした。

（この世界の人じゃない…）

他次元世界の人間が何の用で？ 不審に思いながらも軽く会釈してやりすごすことにした。すると、向こうから声をかけてきたではないか。

「あ、ちよつといいかな？」

「：なんですか？」

警戒している様子のルーシーに、長い金髪の女性は少し困ったような顔になった。

「そんなに怖がらなくてもいいよ。決して怪しい者じゃないから。ちよつと聞きたいことがあるんだ」

泥棒が自分を泥棒と自己紹介しないのと同様で、怪しい者が自分を怪しいとは言わないだろう。だから、ルーシーも二人への警戒を解かなかった。二人が魔導師であるなら尚更だ。

「この辺に、このくらいの大きさの赤紫色のクリスタルみたいなもの落ちてなかったかな？」

「……」

どうやらこの二人はディアスを探していたらしい。ルーシーは無意識にディアスを持った手を後ろに隠した。そこを金髪の女性は見逃さなかった。

「ごめん、その手をちょっと見せてくれる？」

ルーシーは一瞬躊躇ったが、言われたとおりにディアスを持っている方の手を広げて見せた。二人組はお互いの顔を見合わせた。

「これ…ですかね？」

オレンジ色の長い髪の女性が自信なさげに尋ねた。本物を見たのは初めてらしい。それは金髪の女性も御同様のようだ。

「うん、多分そうだと思う」

こちらも自信がなさそうだ。

「これ、お姉さんたちに出来ないかな？」

「えっ？」

唐突に何を言い出すんだというようなルーシーは二人を見た。別にいる物ではないが、見ず知らずの他人にくれてやるつもりもない。

「これはね、非常に危険なものなんだ。だから、ね？」

危険なのはルーシーも知っている。だからこそ、それを知っている者にディアスを渡すわけにはいかない。使いようによっては大金を稼ぐことも立身出世を果たすこともできる。ルーシーは二人の記憶を書き換えることにした。まずは金髪の女性から。ところが、何度ゼクエスの能力を発動させても女性の記憶を書き換えることができない。

（この人…かなりの魔力の持ち主だ）

まだ若いのに。二十歳ぐらいか。オレンジの髪の女性はそれよりもいくつか年少のようだ。

「駄目、かな？」

金髪の女性は自分が記憶を書き換えられそうになったことに気付いていないようだ。どうするかルーシーは迷った。ディアスを彼女らに渡す義理はない。持ち主というのなら返すべきだが、14年前に49個に散らばったディアスには持ち主なんてものはいない。持ち主がいけないというのであれば、拾った者が持ち主になるのではないだろうか。つまり、この場合はルーシーがこのディアスの持ち主であって、それをどうしようかはルーシーが決めることだ。

「……いいですよ」

ルーシーは迷った末にディアスを渡すことにした。ディアスは人の心を操るとされている。だが、人の記憶を自由に書き換えられるルーシーには必要ないものだし、ゼクエスの帝王候補である彼女には1個や2個のディアスは通用しない。もし、断って力づくで来られたらゼクエスの力が通用しない相手だけにどんな苦戦を強いられるかわからない。しかも、相手は二人だ。ここは余計な諍いは避けた方が賢明だろう。

「ありがとう、ごめんね」

ほっとしたような顔で金髪の女性は礼を言った。その優しそうな顔はディアスを悪用しそうには見えないが、人は見た目で判断してはいけないというのがルーシーの経験則だ。

「君、この辺の子？」

「ああ、いえ、いまだけあそこの別荘にいるんです」

「そこのお嬢さん？」

「まあ、そうです」

まさか本当のことはいえないから嘘をついた。

「そう、もしよかったらあの向こうのコテージに遊びに来てくれな
いかな？ お礼がしたいからね」

「えっ？」

金髪の女性が指差した方にルーシーは驚いた。そこにあるコテージとはルーシーが最近知り合った富豪令嬢のものだったからだ。

「あそこの人ですか？」

「友達なんだ。時々使わせてもらっている」
(友達?)

金髪の女性の説明にルーシーは引かなかった。あそこの令嬢は間違はなくこの世界の人間だ。外界と交流がほとんどないこの世界で、異次元世界の人間と友達になるなんてことがありうるだろうか？
急に二人への不信感を強めたルーシーは誘いを断った。

「いえ、結構です」

その少し怒ったような感じに二人は困惑の表情を浮かべた。

「なにか気に障るようなこと言った？」

「いえ、別に。では、私はこれで失礼させていただきます」

ルーシーは一礼すると、走って去って行った。

「なに怒ってたんでしよう、あの娘」

オレンジの髪の女性がわけがわからないといった感じで尋ねる。

金髪の女性は首を横に振って、

「わからない。でもディアスは回収したから任務は完了だよ。今日はアリサのコテージに泊まって、もどるのは明日にしよう。二人とも最近働きづめだったしね」

オレンジの髪の女性に反論はなかった。

第4・3話【敵か味方か】？

別荘にもどったルーシーは使い魔からの報告を聞いていた。

「そう、御苦労さま」

報告を聞き終えたルーシーは使い魔を下がらせると、今後の作戦について考えた。気になるのは報告の中でのさくらと戦闘中のさくらのギャップが激しいことだ。報告によればさくらは学校では目立たない存在で、クラスメートから声をかけられたら応じるが、自分から積極的に他人に声をかけることはないし仲良しグループに入ることもしていないらしい。

「人との接触を怖がっているのね」

だが、ルーシーには何回も話をしようと持ちかけてきた。もっとも、この場合は自分の命に関わることだから積極的にならざるを得ないだろう。人間嫌いというわけではなさそうだ。そんなおとなしい少女が、視線だけで相手を殺せそうな鋭くて冷たい殺気に満ちた目をするのだから世の中わからない。だが、そんな危ない少女と戦わなければならぬルーシーとしてはわからないではすまされない。まともに戦ったら負けるかもしれない。

「やっぱりの手でいくしかないか」

いささか卑怯ではあるが。だが、命を賭けた戦いに卑怯もへったくれない。負けたら負け犬、死んだら犬死にだ。

「明日決着をつけよう。関係ないと思うけどあの二人も気になるし……」

林道で会った二人組の魔導師。可能性は低いと思うが、いらぬ介入を受けたらややこしくなる。その前に決着をつける。でも、それ

までは……

「お嬢様気分を満喫しよう」

何事も体験するのは大事なことだ。翌朝、ルーシーは別荘のオーナーを呼び出して記憶をもとにもどすと別荘を後にした。

ルーシーとの戦いの翌日からさくらは学校に通いだした。学校に行く気分でもなかったが、他にすることもないので行っているだけだ。だから、授業中でも心ここにあらずといった感じで空を眺めてばかりいた。この日も教師の話も軽く聞き流してノートもまったくとれてないまま午前中がすぎた。あの日からいつもこんな調子だった。生きるか死ぬかの岐路に立たされている状況では授業をまともに受ける気が失せるのは当然だろう。ルーシーはこしばらく姿を現していない。どうしたのだろうとぼんやり考えて給食を食べていると、クラスメートたちが窓際に集まってざわつきはじめた。

「だれだよ、あの子」

「めっちゃかわいいじゃん、転入生じゃないのか？」

「でも、変な格好しているね。向こうの学校で流行っているのかな」
何事かと思いつつ外に向けたさくらは持っていた牛乳瓶をポロッと落としてしまった。床に落ちて瓶が割れる音にクラスメートの注目が集まったが、さくらはそんなことに構っていられなかった。窓の外のグラウンドに立っていたのはルーシーだった。次の瞬間、周囲の景色が灰色となりクラスメートたちがピタッと動かなくなった。まるで時間が止まったかのように。

「結界？ でも、こないだのとは違う」

前とは違う結界を使うということは何か事情があるからだ。それが都合によるものか作戦なのかわからないが、ルーシーが現れた以上やることはひとつだ。

「私はもう迷わない。避けられない戦い。それが私の運命なら」
さくらはブローチを手にとって窓から身を乗り出した。

「我、選ばれし者なり。風よ、水よ、火よ、土よ、黒き太陽の下に生まれし魔闘士に力を与えたまえ。敵を殲滅する強さはこの手に、困難に打ち勝つ勇氣はこの胸に。魔剣グラム、セッタープ！」

「Yes, My Lord」

窓から飛び降りるさくら。落下中に変身が完了し、地面に激突する寸前にAIシールドを発生させて衝突を防いだ。

「AIシールドを使いこなしている」

さくらは確実に強くなっている。ルーシーはそう判断した。

（やっぱりあの手しかないか）

できるなら卑怯な手は使いたくない。だが、ルーシーは戦うために来たのではない。勝つために来たのだ。一方、さくらはまだ若干の躊躇いがあった。話し合う余地がないことは前回までの戦闘でわかっていたが、それでも人の命を奪うことをそう容易に決断できるものでもなかった。

（戦うしかないとはわかっているけど……）

少なくとも向こうは話し合うつもりは毛頭ないようだ。その証拠に、さくらの方に魔槍の穂先を向けて魔法陣を発生させている。だが、ルーシーのその動きにさくらは疑問を感じた。ルーシーは魔槍に自分の血を与えていない。血を与えられたバンパイアデバイス以外の攻撃ではAIシールドを突破できないことはわかりきっているはずなのに。さくらがルーシーの真意を計り兼ねていると、ルーシーが魔槍の穂先に魔力弾を形成しはじめた。身構えるさくら。すると、ルーシーは穂先を校舎の方に向けた。

「えっ？」

「ストライクボルト！」

さくらが驚きの声を上げると同時に魔槍から魔力弾が発射されて、校舎の屋上に着弾した。崩れ落ちる外壁にさくらは愕然となった。もし、教室に着弾していたら児童に死傷者が出ていたはずである。

「一体なにを……」

「私はあなたとちがつて元はミッドチルダの魔導師だった。だから、ゼクス以外の魔法も使える」

「そんなことを聞いているんじゃない！」

下手すれば死人が出たかもしれない行為をしたのに冷然としているルーシーにさくらは怒りを覚えた。

「どういうつもり？」

詰問するさくらにルーシーは表情を変えずに答えた。

「これは警告だ」

「警告？」

「もし、あなたが少しでも抵抗したらこの学校を無差別に攻撃する」
「なっ！」

相手の思いがけない卑劣な手段にさくらは体の震えが止まらなかった。恐怖からではない。相手に対する怒りで震えが止まらなかった。だが、さくらには学校の人たちを見殺しにはできなかった。友達がいなくさくらだが、クラスメートが嫌いというわけではなかった。親しく交流することそなかったものの、祖父が死んで一人ぼっちになったさくらを気遣ってくれたクラスメートもいるのだ。自分から皆の中に入っていけないさくらを誘ってくれたクラスメートもいた。そんな人たちを自分たちの戦いに巻き込みたくなかった。

「どうなの？」

「：わかった」

卑劣なルーシーに怒りを覚えつつもさくらにはどうすることもできなかった。さくらは魔剣をルーシーの方に放り投げた。それを確認したルーシーは魔槍に自分の血を与えて振りかぶった。ルーシーとて、こんな卑怯な手は使いたくなかったが、確実に勝利するにはこれしかないと判断したのだ。

（勝っても後味が悪いのはわかっているけど）

それでもルーシーはやるしかなかった。さくらの頭上めがけてルーシーは魔槍を振り下ろす。これで本当に終わったとルーシーは確信した。さくらには魔剣がない。A I シールドは無効化されている。いまからじゃよけるのも不可能だ。ところが、さくらは魔槍の斧の部分で両手で挟んで受け止めたのだ。

「なっ？」

「剣がないからって剣術家が戦えないってことはない。素手で戦う方法だってあるんだ！」

さくらは自分から後ろに倒れて巴投げの要領でルーシーを頭越しに投げ飛ばした。真剣白刃取りを初めて見たルーシーは気が動転して、あっさりと投げ飛ばされてしまった。その隙にさくらは魔剣を拾って、刃に指をあてて血を与えて一気にルーシーに斬りかかった。もう、何の躊躇もなかった。さくらのいままでにない積極的な攻撃にルーシーは防戦一方となった。だが、ルーシーも負けていられなかった。卑怯な手まで使ったのに負けるわけにはいかないのだ。態勢を立て直して反撃に打って出る。もう、作戦も何もない。ただ、本能のままに打ち合うだけだ。

「あなただけは絶対に許さない！ 関係のない人たちまで巻き込むことないのに！」

「言ったはずだ！　これは戦争だって。戦争は勝って終わらないと意味がない！」

「そこまでして勝ちたいの！？」

「あなたにはわからないことよ。平和で平穏な生活をしてきたような人間にはね！　あなた、ご両親やおじいさんが亡くなって一人になった自分を世界で一番不幸だって思っていない？　私にしたらそんなの不幸のうちに入らないわ！」

斬り合いながら激しく罵り合う二人。もはや二人の間には憎悪と敵意しかなかった。もしかしたらそれは二人が持つ魔剣と魔槍の影響によるものかもしれない。実戦経験豊富なルーシーと剣術の天賦の才に恵まれているさくら。二人はほぼ互角の戦いを展開したが、実戦経験で上回るルーシーが徐々に押し始めた。あせったさくらが突きだした魔剣をルーシーは魔槍の石突に近い部分で払いのける。そうしてできた大きな隙をルーシーは見逃さなかった。すかさず、さくらの胸めがけて槍を突き出す。

「！」

自分の胸に迫る魔槍にさくらは戦慄した。もう、回避することは不可能だ。だが、あと数秒で魔槍がさくらの胸を貫こうかという時、誰かが突きだした杖の先端が魔槍の槍と斧に間にぶつかって魔槍を止めた。

「えっ？」

せっかくの好機を台無しにしてくれた人間の顔を見てルーシーは驚いた。昨日、別荘近くの林道で会った金髪の女性だったからだ。

「誰？」

さくらも予期せぬ第三者に驚いていた。そんな二人に金髪の魔導師は指示を出してきた。

「二人ともいますぐ戦闘を中止してこちらの指示に従って。私は時空管理局執務官フェイト・テストロッサ・ハラオウンだ。ここでの戦闘は危険すぎる。二人とも武器を収めて」

ルーシーが予感したとおり事態はややこしくなりそうだった。

第4・7話【敵か味方か】？

いきなり現れた第3の魔導師にさくらは頭が混乱していた。

「誰？ 帝王候補って二人だけじゃないの？」

さくらは自分とルーシー以外に魔法を使える人間はいないと思い込んでいた。それが、いきなり目の前に混乱するのも無理はない。しかも、かなり頭に血が上っている状態なので、さくらはフェイトを敵と認識した。命を助けられたことに考えがいかずいきなり斬りかかるさくら。魔剣をバルディッシュで受け止めたフェイトはさくらの目を見てギクッとなった。とても子供がするような目じゃなかった。相手に対する憎悪に満ちた目。

「ま、待って」

フェイトはさくらを落착かせようとしたが、さくらは聞く耳を持たなかった。一方、それを見ていたルーシーは時空管理局が介入してきたことに少なからず動揺していた。

「戦場には常に不測の事態が起こるとは言うけど……」

あの金髪女性が時空管理局なら一緒にいたオレンジ色の髪の女性も管理局ということになる。もしかしたらそれ以外にもいるかもしれない。状況がつかめないためルーシーはこの場を撤収することにした。ルーシーが撤収したことで彼女が発生させていた結界も消えた。周囲の色が元にもどったことにさくらが気をとられた隙にフェイトはさくらから離れた。

「！」

さくらはすぐにフェイトを追おうとしたが、この時の彼女は肝心なことを忘れていた。結界が消えたということは動きが止まってい

た人間が活動を再開するということである。

「あれ？　おい、あれって木崎じゃねーか」

「えっ？　だって、いままでここにいたじゃんかよ」

「なにがどうなっているんだ？」

教室にいたさくらがいきなり消えたかと思ったたらグラウンドにいて、しかも服が違っていて剣を持っているのだ。クラスメートたちが驚くのも当然だ。それ以外の人間も、さっきまでグラウンドにいた少女といまいる少女が違うことに驚きが生じていた。

「しまった……」

さくらは自分が取り返しつかないミスを犯したことに愕然となった。その時、また周囲の色が変わって、さくらとフェイト以外の人間が消えた。魔剣が自己の判断で結界を発生させたのだ。だが、もう手遅れだ。クラスメートの目からしたらさくらは一瞬のうちに教室からグラウンドに移動してしまったように見える。どんな解釈をしても、さくらが普通の人間ではないと誰もが認識するだろう。もう、さくらにいままでの生活を送ることは不可能となってしまった。愕然と立ち尽くすさくら。やがて、彼女の肩が震えだした。さくらが肩を震わせて笑っているのだ。最初は低い笑いだったが、徐々に声が高くなって最後は大声で笑うようになった。気が狂ったのではないかと疑いたくなるような笑いだったが、その目からは涙が流れていた。

「終わっちゃった。終わっちゃったよ……」

普通の女の子でいられる時間が終わってしまった。帝王候補になった時点でこうなることはわかっていた。だが、さくらにはまだ普通への未練が残っていた。だから、ルーシーの襲撃があるかと思いつながらも学校に通っていたのだ。それがすべて壊れてしまった。普通の人間としての生活への退路が断たれてしまった以上、さくら

にとって目指すべきものは一つだけとなった。

「もうこうなったらなってやる。帝王にでもなんでも」

そして、失った家族を取り戻す。取り戻して皆と幸せになる。そのために他人を犠牲にしようとも。さくらはフェイトに視線をもどした。フェイトが帝王候補とは関係ないということはさくらにもわかってきたが、邪魔するのなら排除するだけだ。

「あなたは誰？ 関係ないなら帰って。邪魔するなら容赦はしない」
さくらは魔剣をフェイトに向けて警告した。

「私は時空管理局執務官フェイト・ハラオウン。ちょっと話を聞かせてほしいだけなんだ。君たちが何者でなぜ戦っているのか」

「関係ないなら帰れと言ったはずだ。質問には答えない」

頑なさくらにフェイトはいささか困惑気味となった。結界が発生したから調査に来たら、二人の少女が戦っていてそのうちの一人が昨日会った少女だった。とにかく、戦いをやめさせようと割り込んだが、一人には逃げられてもう一人には敵意を向けられている。いったい、この少女たちは何者なのか。

「ゆっくり話をしたいんだけど無理なようだね、バルディッシュ」

「It looks that way」

できるなら戦闘は避けたいが、このまま帰るわけにもいかなかった。フェイトはさくらに危険なものを感じていた。放置していたらどんな災厄になるかわからない。

「悪いけど一緒に来てもらおうよ。抵抗しないなら君には……」

フェイトは最後まで言い切ることができなかった。さくらが自分のデバイスの刃に指をあてて血を流しているのだ。魔剣には剣身中間部に溝があって流れてきた血が溝を通して切っ先付近まで達する

ようになっていた。

「一体、何を……」

フェイトにはさくらの行動がわからなかった。彼女はバンパイアデバイスを見たことがなかったのだ。動揺するフェイトにさくらは斬りかかった。フェイトはバルディッシュでそれを受けとめる。だが、

「！」

フェイトはバルディッシュの柄の魔剣の刃を受けている部分にひび割れが生じているのを発見した。

「そんな……」

長年、愛用してきたデバイスがこうも簡単にひびが入れられていく様にフェイトは言葉を失った。バルディッシュの柄に生じた亀裂は大きくなっていき、このままでは真つ二つとなりフェイトを凶刃が襲うことになる。何としても主を守ろうと頑張るバルディッシュだが、それは無駄な努力だった。魔剣はいとも簡単にバルディッシュを粉碎してその主に迫った。

「クッ……」

フェイトは覚悟を決めた。もうよけることもできない。だが、魔剣がフェイトの脇腹に達する寸前にさくらの体が魔力のリングで拘束された。

「なっ!？」

いきなり自分の体がリングで拘束されたことにさくらは驚きの声を上げた。両手と両足を拘束されたさくらはバランスを崩して倒れた。

「あともうちよつとのところで……!」

悔しがるさくらの前に現れたのはオレンジ色の髪の女性だった。

「遅くなりました。大丈夫ですか？ フェイトさん」

「ありがとうございます、ティアナ。私は大丈夫だけどバルディッシュが……」
フェイトは破壊されたバルディッシュに目を落とした。彼女にとつてバルディッシュはただのデバイスではない。長い間、ともにがんばってきた戦友ともいえる存在なのだ。それが無残にも破壊されたのだからその心中は察するに余りある。だが、フェイトはいつまでも自分のことで悲しんではいられなかった。ティアナの捕獲魔法で身動きがとれないでいるさくらの処置をどうするかが先だった。

「この娘は？」

ティアナの質問にフェイトは首を横に振った。

「わからない。魔導師みたいだけど、どうも違うみたい。ミッドチルダでもベルカでもない。この世界の娘みたいだけど……」

「いったい、彼女は何者なのか。フェイトはさくらを管理局に連れていくことにした。罪状はある。フェイトへの攻撃行為だけで十分パクることができる。しかし、フェイトはまだ子供であるさくらを犯罪者みたいに連行したくはなかった。できるなら、任意の事情聴取に応じてほしいと思っていた。しかし、さくらは興奮している状態でも素直に応じてくれそうにない。いまでも拘束が解かれたらすぐにでも飛びかかってきそうな目でフェイトを睨みつけていた。

「どうします？」

ティアナが困った顔をしてフェイトに尋ねる。フェイトにしてもどうしていいかわからなかった。下手に触ろうとしたら噛みついてきそうな感じだ。それに、さっきからフェイトを睨みつけている目は、とても子供がするような目ではない。管理局でも敏腕と名高い

フェイトですら、その目に背筋が凍るのを感じるくらいだ。

「そんな睨まなくても大丈夫だよ。私たちは君の敵じゃないから。ちよつと、お話を聞かせてほしいだけなんだ」

フェイトはどうかしてさくらを落ち着かせようとした。すると、さっきまでフェイトを睨みつけていたさくらが今度はティアナの方に視線を変えた。

「えっ？」

なんで？　と言いたげな顔をして戸惑うティアナ。しかし、急に無表情になるとさくらを拘束しているリングを全部外してしまった。

「ティアナ？」

フェイトは驚いてティアナの方を振り返った。その隙にさくらは魔剣を拾うと、背中から赤い光の羽を生やして飛び去った。

「待ちなさい！」

フェイトは追いかけようとしたが、その前をティアナが立ちふさがった。

「どうしたの？　ティアナ」

ティアナの豹変にフェイトは戸惑った。その間にさくらは遠くまで飛び去ってしまった。

この世界での活動の拠点としているコテージにもどったフェイトとティアナは上司であるクロノ・ハラウン提督に今日のことを報告した。ティアナはあの後さくらの姿が見えなくなると、元にもどったがなぜあんな行動したのか自分でもわからないらしい。魔力リングを外したのも、さくらを追いかけようとするフェイトを止めた

のもそうしたいと思ったからだ、いまになって思うとなぜそう思ったのかわからないと言うのだ。とにかく、わからないことだらけだ。二人の少女が発生させていた魔法陣はミッド式でもベルカ式でもない。つまり、それ以外の系統の魔導師ということになる。さらに、二人とも魔力探知に引っかからないのである。

「ねえ、どう思う。クロノ」

部下であり妹でもあるフェイトの質問にクロノはうーんと首を捻った。

「今の段階では何も言えないな。僕の方でも調べてみるよ。君たちはその二人の魔導師の行方を追ってくれ」

「了解」

「無理はするなよ」

「わかってるよ」

通信はそれで切れたが、探索といってもバルディッシュを修理に出しているフェイトは身動きができないから、ティアナ一人でということになる。

「ごめんね、ティアナ」

「いえ、絶対にあの娘たちを探し出してくれます」

ティアナはビシッと敬礼した。彼女にとっては汚名返上の機会であった。

第5話【思い】？

さくらとルーシーの調査を開始したティアナだったが、さくらのことはすぐにわかった。名前は木崎さくら、小学校5年生の10歳。彼女の自宅も突きとめたが誰もいなかった。

「そりゃそうか……」

さくらは自分の正体を学校のクラスメートたちに知られてしまった。行方をくらましたのも理解できる。いま、この町では女の子が急に蒸発したとかで大騒ぎになっていた。ティアナはさくらが行きそうな場所を尋ねたが、誰も心当たりがないという。さくらはついこないだまで祖父と暮らしていたが、その祖父が死んでしまったことで誰も身寄りがいないという。女の子一人でこれからどうするかとご近所の皆さんが心配していた矢先の今回の蒸発である。これ以上はさくらの行方をつかめる情報は得られないと判断したティアナはもうひとりの少女ルーシーの方をあたることにした。ルーシーに関する手掛かりは彼女と初めて会った場所の近くの別荘のお嬢さんということだ。ところが、その別荘に行ってみると、オーナーも誰もそんな少女は知らないという。ティアナが何回も尋ねても知らないという返事しか返ってこなかった。嘘を言っているようにも見えなかった。

「どうということなの？　それが本当だとしたら、あの娘が嘘をついたことになるけど」

なぜ、そんな嘘をつく必要があるのだろうか。もう少し詳しく調査してみると実際にルーシーがその別荘に暮らしていたと証言する人が現れたのである。その証言によるとルーシーはテラスで優雅にティータイムを満喫していたという。中にはルーシーとオーナーが一緒に別荘にいるところを目撃したという人もいたのだ。

「なに？　どういうこと？　あの二人はグルだってこと？」

ティアナはわけがわからなくなった。今度はオーナーの身边も探ることにした。すると、オーナーが小学校高学年ぐらいの女の子にあの別荘を無償で貸したという証言が得られた。やはり、オーナーとあの少女はつながっていた。そのことをオーナーに追及すると、

「実はそのことで困っているんだ。私がどこの誰だかもわからない女の子にあの別荘を貸したと言う人間が何人かいるんだが、私にはまったく覚えがないんだよ。あそこの別荘には管理人も兼ねている使用人がいるんだが、彼にも覚えがないと言うんでね。何かの間違いだと思うんだが」

と首を捻っていた。やはりその様子から嘘を言っているとは思えない。考えられるのは、ルーシーに別荘を貸していたのは別人だということだ。オーナーの偽物をしたてあげたのだ。

「でも、それはちょっと考えにくいわね。となると、あと考えられるのは……」

オーナーを催眠術か何かで操っていた。ティアナには思い当たる節があった。さくらを拘束していた魔力リングを外す前、ティアナはさくらと目を合わせた。その直後、ティアナはさくらのリングを解除したいと思ってしまったのだ。

「あの二人には人の心を操れる不思議な力がある」

ティアナはそう結論付けようとした。そうとでもしなかったら、さくらの逃亡を幫助した形となっているティアナの立場は非常に悪いものとなる。その推測は当たらずとも遠からずだが、これ以上はルーシーの行方をつかめる手掛かりは得られないと判断したティアナはいったんコテージにもどることにした。

「ただいまもどりました」
もどったティアナをフェイトが出迎えた。

「あ、ティアナ？　ちょうどよかった。ちょっとこっちに来て」
「なんです？」

「シャーリーに頼んで一昨日出会ったディアスを持っていた娘のこ
と管理局にデーターがないか調べてもらったんだけど」

「それでわかったんですか？」

「うん、該当する娘はいたんだ。けど……」
フェイトが言うには身体的特徴がすべて一致した該当者が一人だ
けいたのだが、それが本人なのかどうかは断定できないらしい。

「名前はルーシー・ブランケット。第33管理世界『シュターセン』
出身の魔導師で年齢は11歳」

「シュターセン？　あの20年以上も内戦が続いている世界ですか
？」

ティアナもルーシーの故国であるその世界の惨状は知っていた。
10年ぐらい前に時空管理局が鎮静化に乗り出したものの、自爆攻
撃の連発をくらって尻尾を巻いて逃げてしまっている。

「そう、そのルーシーって娘は反政府グループの構成員だったらし
いんだけど、そのグループは政府の攻撃で壊滅してメンバーもほと
んどが殺害されたみたいなんだ。で、これがそのルーシーの写真」
とフェイトがティアナに手渡した写真に写っている少女は、二人
が出会った少女と瓜二つだった。

「この娘ですよ。間違いありません」

「うん、私もそう思う。ただ……」

「何か引っかけることがあるんですか？」

「実はそのルーシーって娘はミッドチルダの魔導師なんだ」

「えっ？ でも、フェイトさんあの二人の魔法陣はミッド式でもベルカ式でもないって言ってませんでした？」

「確かに違っていた。それに、そのルーシーって娘は管理局のランクでいうとB＋程度の魔導師なんだ」

それまたおかしいことだとティアナは思った。バルディッシュをいとも簡単に破壊した少女と渡り合っていた少女がB＋なんてありえない。

「じゃあ、別人ということですか？」

「多分そうだね。姉妹かなんかだと思うよ」

「それで、そのルーシーって女の子の居場所はわかりますか？ 話でも訊いておいた方が」

「それが生死も不明らしいんだ。他のメンバーと一緒に殺されたか、かろうじて逃げ延びたかもわからないってシャーリーが言っていた」
なにしろ、あまりにも危険だということではボランティアの人道支援もあの世界に入ることができないのだ。報道もほとんど入らずたまに命知らずのフリーカメラマンなどが現地取材を敢行したが、何人かは家族を悲しませる結果となっている。逆にその世界から外部に出る手段も、政府が許可の無い次元航行船の運航をいかなる理由においても禁じているため転送魔法が使える魔導師以外は自由に外の世界に行くことはできない。

「結局、何もわからないってことですか」

「結論から言うとなんかそういうことだね。でも、クロノがユーノに頼んで例の魔法陣について調べてもらっているから多分わかると思うよ。それから、さっきクロノから連絡があって正式に私たちがあの娘たちの調査と捜索と事情聴取を担当することになったから」

「えっ？ でもディアス探索の方は」

「それは継続だよ。一昨日に会った娘がディアスを持っていたことが気になるからね」

「でも、私たちに渡してくれたじゃないですか」

「そうなんだけど、どうも気になるんだ。ディアスのことを知っているのに、あえて手放したそんな気がするんだ」

「まさか、そんな……」

「まあ、とにかくユーノの調査待ちだね」

ところが、そのユーノの調査は一週間が過ぎても何の手掛かりもつかめなかった。過去に存在したあらゆる体系の魔法を調査しても該当するものは見つからなかった。ユーノが司書長を務める無限書庫は全次元世界のあらゆることがわかるとされていた。あまりにも情報量が多いため資料を探すのに時間がかかることがあったが、ユーノが司書長になってからは整理整頓も進み彼自身の優れた検索魔法で大抵のことはその日のうちにわかるようになった。それが、一週間経っても何もわからない。ついに無限書庫のスタッフ総出で調査しても何も得られなかった。

「まさか、無限書庫にも何の資料もないんじゃない……」

どんな事でも探せば必ず見つかるというのが無限書庫だ。しかし、本当にそうなのか。例えば情報が1億あったとする。その中で無限書庫に収められている情報は9999万だとしたら、残り1万は無限書庫には無い情報ということになる。探せばどんなことでも見つかるというが、その全容を把握している人間なんて誰もいないのだ。見つからない情報だってあってもおかしくない。しかし、確実にそうだと断定もできないのでユーノは黙々と調査するしかなかった。

「まったく、クロノは昔から人使いが荒いんだよな」

それはクロノがユーノを信頼している証明でもあった。ユーノもそれはわかっているから悪い気はしない。しかし、結局ユーノの手で真相がわかることはなかった。

第5・5話【思い】？

フェイトやティアナ、ユーノたちによる懸命の調査・搜索にも関わらず二人の謎の魔導師の行方や正体は依然として不明のままだった。あれ以来、時空管理局の介入を警戒してか二人の魔導師は動きを見せていない。Sランクの魔導師を凌駕する力を持つ魔導師同士が戦えば周囲にどんな被害が出るかわからない。いまのところ被害は出ていないが、被害が出てからでは遅いのだ。それと、フェイトには別の思いがあった。

12年前、フェイトも同じように同年代の少女と幾度か戦ったことがあった。あの頃、複雑な家庭の事情でフェイトは周りがよく見えていなかった。しかし、相手の少女が親身に自分に接してくれたため、フェイトは母親の死亡という最悪の事態を迎えても立ち直ることができた。いまでは一番の親友だ。だから、あの二人もきっと仲良くなれるはずだ。ただ、気になるのはあの二人には相手に対する明確な殺意があることだ。特に木崎さくらという黒髪のポニーテールの少女は相手にものすごい憎悪を抱いていた。職業柄、フェイトもいろいろな魔導師と遭遇したが、あんなに憎悪を漲らせている魔導師を見たことがない。しかし、ティアナの調査ではさくらはおとなしい控えめの性格で、怒ったところを見た人間は誰もいなかったとある。

「そんなおとなしい娘がどうして……」

それと、さくらはどうやって魔法の力を手にしたのか。おそらく、外部世界の人間からだろうが、その人間はどういった理由でさくらに魔法の力を与えたのか。何の意味もなしに見ず知らずの少女を魔導師にするとは思えない。何か理由があるはず。もしかしたら、それはあの二人が戦う理由にもつながっているかもしれない。

「このままでは取り返しのつかないことになってしまおう」

あの時、フェイトが割り込んでいなかったらさくらは胸を貫かれていた。お互い、相手を殺すことに何の躊躇いもないようだった。早く見つけて身柄を確保しなければどちらかあるいは両方が命を落とすことになりかねない。しかし、現状では二人の行方すらわかっていないのだ。

「二人ともどうにかして戦わせないようにしたいけど……」

できたらかつての自分のように相手とわかりあって友達同士になってほしいとも願った。そのためには、二人の居場所と二人が戦う理由を突き止めなければならぬ。だが、未だ搜索と調査に何の進展も見られないのが実情であった。関係者が焦る中、ある偶然から真相が明らかとなった。

それは、フェイトの親友である八神はやてが聖王教会のカリム・グラシアに食事を誘われた時である。

「最近、忙しそうね。ちょっと疲れてるんじゃない？ はやて」

「んー、そやなあ、例の組織の捜査がちつとも進んどらんからなー。ああでも、大丈夫やで。心配せんというて」

はやては自分はどうってことないと言うが、彼女が辛いことや苦しいことを我慢して自分の胸におさめてしまう傾向があることを知っているカリムとしては心配せずにはいられなかった。彼女にしたら、はやては可愛い妹分なのだ。自分を心配そうに眺めるカリムにはやては話題を変えることにした。

「それより、そっちの方はどうなん？ 新しい預言とかは出てこおへんか？」

預言とはカリムのレアスキルで、彼女とははやてはそれによって2年前のJS事件で功績を挙げ発言力と影響力を増すと同時に、結果

的にではあるが管理局内の特に地上部隊の自分たちに批判的な勢力の一掃に成功している。はやてとしてはさりげなしに話を振っただけだが、とたんにカリムの顔が変わった。

「えっ、どないしたん？ まさか、何かあるん？」

つい2年前に地上本部の陥落と管理局システムの崩壊という預言があったばかりである。そう何度も大事件が来られても困る。

「実は気になる預言があるの」

「なんや」

「うん、それが……」

「どないしたん？ なんでも言うて。うちは何事にも動じひん女や」
言いにくそうにしているカリムに、はやてはじれったそうに続きを催促するが、言いにくそうにしているのは言いにくい理由があるからで、それは多分とてつもなく厄介なことだろうと推測したはやては心の準備を整えるために紅茶に手をのばした。

「あのね」

カリムは意を決して話すことにした。

「預言にはすべての次元世界が消滅するとあるのよ」

はやてはおもわず口から紅茶を吹き出しそうになった。世界消滅とは穏やかでないどころの騒ぎではない。

「ど、どうゆうことや、それ」

「詳しいことはわからない。ほら、私の預言って難解なうえにいろいろな解釈が成り立っちゃうでしょ。それに、預言の内容も非常にばやけていて確率もそんなに高くないと思うから本局には知らせてなかったんだけど、妙に気にはなっていたの」

確かに預言が事実であれば一大事だ。呑気に食事をしている場合

ではない。しかし、すべての次元世界が消滅するとはどういうことだ？ 過去にいくつかの世界が崩壊したという事件はあったが、すべての世界が崩壊の危機に瀕したことは、少なくともはやてが知る限りでは一度もない。

「で、その預言の内容はどうなってるんや？」

「『月を覆いし者、資格無き者の刃に倒れし時、太陽を喰らいし者、唯一無二の帝王となる。資格無き者、帝王に刃を向けるも、帝王これを一刀のもとに斬り伏せる。その後、あらゆるすべては無に帰し新しき世界が誕生する』これが預言の内容よ」

「うーん」

はやては首は捻った。確かに世界滅亡と思わせる内容ではある。しかし、それは解釈の問題でこの預言が本当に世界滅亡を言っているのかはわからない。すべては無に帰しとあるが、そのすべてとは何を指しているのか、新しき世界の世界とは次元世界を指しているのかそれとも別の意味での世界なのか。

「やっぱりカリムの考えすぎとちゃうか？ すべての世界が消えてまうなんてどう考えてもありえへん」

「私もそう思うんだけど、妙な胸騒ぎがするの」

「カリムは心配性さんやな。うちの方でも調べとくわ。えっと、確か月を覆いし者と資格無き者と太陽を喰らいし者やね。なんやようわからんけど、その人たちを調べたらええわけや。それと帝王についてもやね。ん、帝王？」

帝王というフレーズにはやてはあることを思い出した。数日前にフェイトから聞かされた二人の魔導師のことだ。フェイトによれば、その中の一人が帝王になるのどのと言っていたらしい。その帝王が預言の帝王かどうかはわからないが、はやてはそのことをカリムに話してみた。

「どう思う？ 何か関係あるんやろうか」

「うーん、わからないわね。その二人は何者なの？」

「フェイトちゃんとティアナが懸命に捜査しているんやけど、いっようにその正体がつかめへんのや。ミッド式でもベルカ式でもない魔導師らしいけど」

「ミッド式でもベルカ式でもない？」

「うん、ユーノくんが無限書庫のスタッフ総出で調べているらしいんやけど過去の魔法を調べても該当するのは見つかってないんやっ
て」

「無限書庫にも情報がない魔法体系……」

カリムはあごに手をやって何か深く考え込むようなポーズをした。
はやてが心配そうに顔をのぞきこむ。

「どないしたん？」

「まだ確証は持てないんだけど、それはゼクエスの魔闘士じゃないかしら」

「ゼクエス？」

それははやてが初めて耳にする名前だった。

「私も詳しいことはわからないけど、無限書庫にも情報がないとしたらそれしか考えられないわね」

「なんや？ そのゼクエスって」

「ゼクエスの魔法に関しては一切の文字資料がなくて、口述でのみ伝えられているものなの。だから、さっきも言ったように私も詳しいことはわからない。わかっているのは、ゼクエスの魔法を使う者は何千年かに二人しか現れないってこと。で、その二人はそれぞれ最強の矛と最強の盾を装備し他の魔導師を凌駕する力を持っているんだけど、それでもゼクエスからしたら半人前でその二人が戦って勝った方が真のゼクエスの魔闘士になれるらしいわ」

「それが帝王ってことか？」

「その真のゼクスエスの魔闘士を彼らがどう呼んでいるかはわからないわ。それが帝王と呼ばれていたとしても、預言の示す帝王とは限らないし」

「他にゼクスエスについてなんか知っていることないんか？」

さっきのだけではまるで情報不足だ。しかし、カリムは残念そうに首を横に振った。

「ごめんなさい。私が知っているのはこれだけなの。誰も実物を見たことがなかったし、実在するかどうかさえ疑われていたから」

「わかった。それで十分や。とにかくその二人の身柄をおさえた方が良さそうやね。フェイトちゃんに連絡するわ」

「お願いね。私の杞憂だったら一番いいんだけど」

「もし、杞憂でなかったら最悪どころの騒ぎじゃないね。だから最悪を想定して動く。大丈夫よ。前の預言かて危ないところやったけど何とかなかったんや。今回もきっと大丈夫。世界滅亡なんてうちがさせへん。また、カリムとおいしい食事がしたいからね」

親指を立ててウインクするはやてに、カリムは緊張が解れたように微笑んだ。

その頃、ルーシーは豪華クルーズを楽しんでいた。時空管理局の介入を警戒して活動を控えることにしたルーシーは、その間使い魔に気になっていたことを探らせていた。あの管理局員はディアスを探していた。無論、それも管理局の仕事であることはルーシーも知っていた。しかし、ディアスはその存在をあまり知られておらず、現に管理局はいままで探索してこなかった。

「それがいまになってなぜ……」

ルーシーはプールを浮き輪でぶかぶか浮かびながら（ルーシーは泳げない）考えた。あの局員はかなりの凄腕だ。おそらくはSランクだろう。そんな凄腕が動いているのだ。なんらかの事情があるは

ずだ。

「おかげでせっかく勝てた戦いをものにできなかった」

あのととき、管理局の介入がなかったらルーシーはさくらの胸を貫いて勝利していた。今更、どうのこうの言っても仕方ないが、これ以上邪魔が入らないようにするためにもきっちり状況は把握しておきたかった。

「それにしても遅いわね。何をしているのかしら」

もう2週間以上になる。そろそろなんらかの情報を得られてもいいはずだ。少し苛立っていると、使い魔がもどってきた。

「お帰り。遅かったわね。それで、わかったの？」

使い魔は調査してきたことをルーシーに話した。

「なんですって、あの組織がディアスを集めているというの？」

使い魔が調べたところによると、その組織がディアスを収集していたのを時空管理局が嗅ぎつけたらしい。

「でも、どうして彼らが……」

もう何がなんだかわからなかった。

「どうやら呑気に遊んでいる場合でもなさそうね。で、もう一つの方はどうなの？ 何かいいのあった？」

もう一つのは、時空管理局に邪魔されずにさくらと決着をつけられる場所を探すことである。

「えっ？ レフエンティシエル？ 確か希少種の宝庫で、自然保護隊員以外は人間がいない世界よね」

その保護隊も観測のための人員しかいないから、ほとんど無人と

いっていい世界で多少騒いだところで気付かれる心配もないということだ。

「なるほどね。確かにそこなら思う存分気兼ねなくやれるわね」
ルーシーはプールから上がると思いっきり背筋を伸ばした。

「さてと、だいぶ待たしてしまったから早く彼女のところに行ってあげないと」

楽しい時間もこれまで。夢のような生活だったが、ルーシーは戦士に戻らなければならなかった。カードとリーダーを手にとって、カードをリーダーに読み込ませる。

「変身！」

「Yes, Your Highness」

水着からバリアジャケットに一瞬で着替えが終了したルーシーだが、それを人の目がたくさんある場所でやるものだから当然騒ぎになる。さらに、

「帝王候補、ルーシー・ブランケット。いきます」

といきなり消えるものだから騒ぎが大きくなったのは言うまでもない。

第6話【大草原、血に染めて】？

一方、さくらは各地を転々としていた。親類縁者がいないさくらには行くところがないのだ。ルーシーを探そうにもどこにいいのかわからなければ探しようがなかった。だから、さくらは各地を転々としながら向こうから連絡してくるのを待つしかなかった。現在、さくらがいる場所は彼女が一度も行ったことが無いところである。まあ、いままで移動してきた場所も一度も行ったことがないのだが、さくらはたい焼き屋でたい焼きを2個注文した。

「はいよ、240円ね」

さくらはたい焼きを受け取ったが、代金を出そうとはせず相手の目をジーツと見つめているだけだ。すると、

「ああ、代金はいらねえや。それは俺のおごりだ」

随分と気前のいい親父だ。だが、さくらは礼も言わずに噴水の前のベンチに座った。

（一体、いつになったら現れるの？）

さくらはたい焼きを頬張りながら、いつまでも現れないルーシーに苛立っていた。もしかしたら、あの二人を警戒しているのか？前みたいに水を差されるかもしれないから。

（あの時、殺しておけば……）

もう少しで、金髪の方の女を殺すことができたのに思わぬ邪魔が入ってしまった。一体、あの二人は何者なのか。確か、時空管理局とか言っていたが。

（どこの誰か知らないけど、また邪魔したら今度こそ絶対に殺す）

あの時、学校の連中に変身しているのを見られた瞬間に、さくらは普通の人間ではいられなくなった。いや、もはや人間ですらない。さくらの体には人間ではなく、帝王の血が流れている。ミッド式やベルカ式の魔導師がリンカー・コアによって大気中の魔力を体内に蓄積して魔法を発動するのに対し、ゼクエスの魔闘士はリーガル・コアによって体内の血液が変換させられその血液をバンパイアデバイスに与えることで戦闘を行う。よって、ゼクエスには外部に対する攻撃および回復・治療系の魔法は存在しない。あるのは、移動系・転送系・身体能力強化系・索敵系のみである。前の戦いでルーシーが攻撃魔法を使っているが、それは彼女が元々ミッドチルダの魔導師だったからでゼクエスとミッドの混合ハイブリッド魔導師だからである。

それはさておき、精神的に壊れつつあるさくらは人を殺すことに何の抵抗も感じなくなっていた。幸い、まだ理性が働いているので人を殺したり死を強要したりといったことはないが。しかし、時々いつになったら決着を付けられるかという苛立ちに、つい目に見える物すべてを破壊したい衝動に駆られることもある。

（そうだ、大騒ぎを起こせばひょっとしたら）

このまま向こうから連絡を来るのを待つのではなく、何か騒ぎを起ここして向こうを誘い出す。

（名付けて高千穂作戦）

我ながら良い作戦だと自画自賛していると、それに水を差すかのように横から誰かが話しかけてきた。

「君、こんなところで何しているの？」

町内のボランティアでやっている地域見回り隊みたいなことをしている中年の男性だ。平日の昼間に子供が一人で公園にいてたら不審に思うだろう。

「学校はどうした？ 駄目じゃないかサボったりしたら」
と、腕をつかんだ男をさくらは睨みつけた。すると、男はさくらの腕を放して、

「ごめんごめん、おじさんが悪かったよ。本当、こんなおじさんは社会から抹殺されるべきだね」

何を言い出すのかと思ったら、いきなり服を脱いでパンツ一丁になるとそのまま踊りながら走りだして、近くの小学校に乱入して女子児童の顔を舐めまわしていったのである。最後は全裸になって校門で仁王立ちになっていたところを通報を受けて駆け付けた警察官に取り押さえられた。白昼に起きた事件にあたりは騒然となった。

「村田さん、どうしちゃったのかしら」

「あんなことする人じゃないと思っていたのにねえ」

「なんか日頃たまっていたものがあつたんじゃないの」

「娘さん、来月結婚だっていうのに。大丈夫かしら？」

普段は真面目と評判だった人物の不祥事に近所の主婦たちの間にも衝撃が走ったようだ。だが、さくらはそんな程度の騒ぎでは満足していなかった。

（こんなじゃ駄目だ。もっと大きい騒ぎを起こさないと）

さくらはガソリンスタンドに目をつけた。あれを爆破したらもつと大きな騒ぎになる。そんなことになったら被害も甚大になるのは目に見えているが、いまのさくらにはもう理性すらほとんど残されていないようだ。

「クスッ」

さくらの顔に残忍な笑みが浮かんだ。ちょうど都合よくタンクローリーが信号待ちで停まっていた。あれをガソリンスタンドに突っ

込まればドカーンだ。さくらは車に向かって走り出した。ぐずぐずしていたら、信号が青になってしまふ。が、さくらは走り出してすぐに立ち止まってしまった。

「やっと来たわね」

さくらは赤色のバリアジャケットを身に纏い斧付きの槍を持った少女を憎々しげに睨んだ。さくらにとっては、すべての元凶がこのルーシーなのだ。元凶は魔女の方だが、どこにいるかわからない。一方、ルーシーはそんなさくらを気の毒に思えた。最初会った時は戦いを知らない普通の少女だった。必死に戦いを止めようと自分に訴えかけてきた面影は微塵もなかった。

（私たちは本当は戦わなくても良かったかもしれない存在）

それがこうして殺し合いをしようとしている。ルーシーはさくらの放つ冷たい殺気に背筋が冷たくなった。自分がこの少女をこうまで変貌させてしまったのか。

（いや、もしかしたらこれが本性なのかも）

本当に普通の少女がゼクエスの帝王候補に選ばれるとは思えない。それに、あんな殺気を出せる娘が普通であるはずもない。残忍で知られたルーシーの世界の治安部隊の隊員でさえあんな目をした者はいなかった。

「どちらにせよ、私もあなたももう逃げることはできない。いい場所が見つかったんだ。あそこなら誰にも邪魔されないよ」
ルーシーはさくらに手を差し出した。

「行こう、すべての決着をつけるために」
さくらは黙って頷くとルーシーの手を握った。

「次元転送、目標レフェントイシエル」

ルーシーの足元に魔法陣が発生して二人は別の世界に転送された。

転送された先は広大な大草原だった。「ここは？」と尋ねるさくらにルーシーは説明をしてやった。

「ここはステルファリ草原。この世界で一番広い草原だよ。この世界にはね、人間はほとんどいないんだ。だから、思いつきり戦うことができるんだよ」

それは、ここで死んだら埋葬もされずただ動物のように朽ち果てていくだけという意味でもある。

「もう、この世界にきた以上逃げ場はないよ。どちらかが死ぬまで終わらない文字通りの死闘だ」

「望むところよ」

さくらはブローチを手を取った。

「セッタップ！」

「Yes, My Lord」

変身したさくらはルーシーに刃を向けた。

「木崎さくら。目標を殲滅する！」

「ルーシー・ブランケット、これより戦闘行動に入る」

二人の少女はそれぞれのデバイスに自分の血を与え、互いの命と想いをかけてぶつかった。ルーシーは魔槍を振り回してさくらに迫った。

「くっ」

さくらは魔槍をかわしながらも反撃の機会を伺った。長柄物は懐に入り込まれるとその長さが邪魔になって対処がしづらい。だが、

その弱点は当の本人が一番よく知っていることで、さくらに付け入る隙を与えなかった。

(このままじゃ……)

相手との武器の差にさくらは焦りを感じた。槍というものは突くだけのものではない。足軽が持つ長柄槍はむしろ叩く方に重点が置かれていた。また、槍を振り回せば遠心力で相手の首を兜ごとふっ飛ばすこともできるのだ。ましてや主の血を与えられた魔槍の一撃はアフリカゾウをも一刀両断にできる。ルーシーよりも体格で劣るさくらにいたっては魔剣で受け止めても衝撃でぶっ飛ばされてしまう。

「一か八かやってみるか」

このままでは埒が明かないと、さくらはルーシーから距離をとった。

「飛ぶ斬撃ってやつを見せてやる」

さくらは魔剣に血を与えると、腰を低くして魔剣を横に構えた。

「烈風斬！」

さくらの右薙に放った斬撃はまっすぐにルーシーに飛んで行った。

「！」

ルーシーは魔槍を振りかぶってタイミングを見計らって振り下ろした。さくらの放った斬撃とルーシーの振り下ろした魔槍が交差する。

「ぐっ」

激しい衝撃でルーシーは魔槍を落とした。防御には成功したが、両手が痺れてしまった。

「いつの間にあんな技を……」

ゼクエスの魔闘士は攻撃手段のすべてをデバイスによる打撃に頼る。だが、工夫と鍛錬で離れた敵も攻撃することができるようだ。

（確実に強くなっている……）

下手に実戦経験を積ませすぎたとルーシーは早期に決着をつけられなかったことを悔いた。ただの思いつきと鍛錬であんな技なんのできない。実戦の洗礼を浴びたことが大きかったのだろう。だが、ルーシーにはまだミッド式魔法も使えるというアドバンテージがあった。ルーシーは魔槍を拾うと、右に少し移動して止まった。

「えっ？」

ルーシーの動きにさくらは目を疑った。ルーシーは右に少し移動して止まり、また右に少し移動して止まるのを繰り返したが、立ち止まった箇所にはルーシーが残されているのだ。言うまでもなく、これは幻術魔法の一種でヴァルタンシャドウというものである。

「分身の術？」

魔法について無知のさくらには忍者漫画の忍術に見えるのだろう。呆気にとられているさくらに、6人になったルーシーが襲いかかった。

「チッ」

さくらは何とか本物を見分けようとするが、目で見ただけでは本物と偽物の区別はつかない。振り下ろされる魔槍を魔剣で受け止めようとしたら、そのまますり抜けてしまった。これで、そのルーシーは偽物と判明したが、頻繁に動き回るものだからすぐに分からないようになってしまう。それに、複数で同時に来られると、どうしても全部対処することはできないから、対処できない方のルーシーが本物

だったらさくらは無防備な時を攻撃されてしまう。なんとか、かわして致命傷は避けているが体のあっちこっちを斬りつけられてしまった。

「何とかしないと……」

このままでは追いつめられる一方だ。さくらは必死に打開策を探った。

（あれをやってみるか……）

生前、祖父が言っていたことだが、さくらの曾祖父は戦場で国府軍の放った砲弾の破片で一時的に目が見えなくなった時に、相手の気配だけを頼りに襲いかかる敵兵を銃剣で倒したことがあるという。

「相手の気を読むか……」

さっそくやってみることにした。目を閉じてルーシーの気配を探る。ところが、

「……わかんない」

目を閉じても暗くなるだけで何にもわからない。それも当たり前。話で曾祖父はその時すでにかなりの達人だったからできたことで、いきなりやってすぐにできるものではないのだ。ましてや心を静かにして神経を研ぎ澄まさればいけないのに、いまのさくらにはとても心静かななんて無理だ。しかも、余計なことをしてしまったためにルーシーに背中を斬りつけられた。

「！」

幸い深くはなかったが、さくらは背中に斜めの傷ができてしまった。ガクツと膝を落としたさくらは魔剣を地面に突き立てることで、辛うじて倒れるのを堪えた。だが、自分でも背中から血が流れ出ているのが感触でわかる。それで、さくらはひらめいた。

「そうだ」

さくらは魔剣に何事か話した。

「どう、できるかな？」

「Yes, I can do it」

「よし、やってみる」

さくらは左手で魔剣の刀身部分を握った。

「痛っ」

左手の痛みにさくらは顔をゆがめた。一方、ルーシーはさくらの行動を訝しんだ。

「何をしようとしているんだろう」

さくらの真意を探りかねたルーシーはここで一気に決着をつけることにした。横一列に並ぶルーシー。ブリッツアリガーの態勢で構えて一斉に突進した。迫るルーシーにさくらは血がべっとりついた魔剣を縦に構えた。

「紅沫閃！」

さくらが魔剣を横に振るうと、刀身についたさくらの血がスプレーみたいに噴霧された。

「なっ！」

ルーシーはようやくさくらの意図がわかった。噴霧された血は幻影には通り抜けてしまうが、本物のルーシーには付着してしまう。さくらは自分の血で本物のルーシーを見分けたのだ。

「そこか！」

本物のルーシーを発見したさくらは間髪入れず魔剣を横に構えた。

「烈風斬！」

飛ぶ斬撃がルーシーに放たれた。

「プロテクトディフェンサー！」

ルーシーはミッド式の防御魔法で斬撃を受けた。もちろん、こんなチャチなバリアで完全に食い止められるとは思っていないが威力を削ぐことはできる。さっきみたいに魔槍でかき消そうとしたら、魔槍を落とした隙を今度こそ突かれてしまう。そう判断したからだ、さくらは斬撃を放った後すぐにルーシーに突進していた。さくらの狙いはルーシーを動けなくして渾身の一撃を放つことだった。

「でええええいつ！」

斬撃の威力がまだ残っている時にさくらの一撃がプラスされたことで、ルーシーのバリアは脆くも破壊された。

「うわあああああつ！」

衝撃でルーシーは後方にふっ飛ばされた。しかも、その途中で魔槍を落としてしまったのだ。

「しまった！」

すぐに魔槍を取りに行こうとするが、地面に背中を強打して思うように動けない。

「いまだ」

千載一遇のチャンスにさくらはルーシーに斬りかかった。サッカーでいえばゴールキーパーと1対1になっている状況だ。さくらは初めて自分の勝利を確信した。だが、ルーシーは冷静だった。さくらを十分に引き付けたところで、ルーシーはさっと右手を上にあげて掌を空に向けた。

「サークルスラッシュ！」

ルーシーは掌の上に円盤状の魔力弾を形成すると、それをさくらに向けて放った。激しく回転しながら迫る魔力弾にさくらは完全不意を突かれた。もう防御は間に合わない。

「ちっ！」

さくらは咄嗟に体をそらしてかわそうとしたが遅かった。魔力弾はさくらの左腕を切断した。

「うっ！？ うあああああっ！！！」

激痛にさくらはのたうち回った。敵にトドメを刺す前に油断してしまったのが間違いだった。遠足は家に帰るまでが遠足、戦いは相手を完全に叩き伏せるまでが戦いなのだ。ルーシーはその隙に魔槍を拾って、さくらの体突き刺した。

「ゴフッ」

口から血を吐くさくら。魔槍は今度こそさくらの体を貫いた。

第6. 5話【大草原、血に染めて】？

ルーシーは今度こそ勝利を確信した。魔槍は確実にさくらの腹を貫いている。本当は胸を狙いたかったが、深手であることは間違いない。それに対して、さくらはまだ諦めていないのか右手で魔槍の柄をつかんだ。抜こうとしているのだろうか。

「無駄なことを」

ルーシーは魔槍をさらに深く突き入れた。

「ガハッ」

口からさらに血を吐いたさくらは、両膝を地面についてガクツと項垂れた。魔槍をつかんでいた手にも力が入らなくなりダラーンとなった。

「あなたはよくがんばった。でも、もうここまでだ」

ルーシーが魔槍を抜くと、さくらの腹が大量に出血した。このままでも、出血大量でさくらは放っておいても死にいたる。だが、ルーシーは槍でさくらの胸に狙いを定めた。せめて、苦しませずに眠らせてやりたかったのだ。

「さようなら」

心臓を一突きさえすればすべては終わる。そして、ルーシーがさくらに止めを刺そうとした時、さくらが落ちていた魔剣を拾ってルーシーの顔面に斬りつけた。

「きゃあああああっ!？」

左目を斬りつけられルーシーは悲鳴をあげた。さくらの最後の力を振り絞ったの反撃だった。目を傷つけられたルーシーが怯んでい

る隙に、さくらは背中に羽を発生させて全力でその場から離脱を図った。

「逃がすかつ！」

ルーシーは左目を抑えながらも、空を飛んでいるさくらを射撃魔法で撃墜しようとした。ただ、左目を負傷している状態では狙撃は不可能なので、多数の魔力弾で撃ち落とすことにした。いまのさくらには回避は無理だし、よしんばA I シールドで防いだとしても重傷を負っている状態ではバランスを崩して地面に落下してしまうはずだ。

「フアブリックショット！」

周囲に発生した魔力弾をルーシーは一斉に発射した。無数に迫る魔法弾に気付いたさくらはA I シールドを展開して防いだが、ルーシーが予想した通りバランスを崩して真っ逆さまに落ちて行いった。いくら、ゼクエスの魔闘士でも200mの高さから落ちたらひとたまりもない。ところが、どこからか大きい飛竜が飛来してきて、落下しているさくらを助けたのである。

「アルザスの飛竜？　なぜ、ここに？」

アルザス地方に生息しているというあの飛竜が、この世界にもいるなんて事は聞いてない。よく見ると、飛竜に二人の人間が乗っていることからどちらかが召喚したものだろう。恐らく、後ろで手綱を握っているのが召喚士で、前にいるのが槍タイプのデバイスを持っていることから多分ドラゴン・ナイトだろう。しかし、ドラゴン・ナイトだろうとドラゴンだろうとルーシーには関係なかった。邪魔する者は排除するだけだ。

「おちろ、ストライクイーグル！」

ルーシーは大きめの魔法弾を飛竜に向けて放った。単発の射撃魔

法ではこれがルーシーの最強魔法だ。あの図体なら精密に狙わなくても命中するはずだ。しかし、飛竜はルーシーの放った魔法弾をかわすと全速力で離脱した。

「飛竜にあんな動きをさせるなんて…あの召喚士、ドラゴン・ライダーとしても優秀のようね」

飛竜が飛び去った方向をルーシーは空しく見つめるしかなかった。

その、さくらを救った飛竜に乗っていた二人組だが、二人は辺境自然保護隊のエリオ・モンディアルとキャロ・ル・ルシエで、たまに偶然パトロールの帰りに通りがかったところをさくらがルーシーに撃墜されるのを目撃して急行したのである。希少動物の保護のためこの地域は許可無き人間の出入りを禁止しており、本来なら地上にいたルーシーに事情を訊かなければならないところだが、ルーシーが攻撃してきたこととさくらが一刻も争う重傷だったこともあって、とりあえずさくらを病院に連れていくことを優先した。すでにさくらの意識はない。当然だ。出血がひどすぎる。

「大変、このままじゃ死んじゃう」

治癒魔法でさくらの治療を試みたキャロだが、傷口をふさぐことすらできなかった。バンパイアデバイスによる負傷は治癒魔法では治療することが難しいのだ。

「とにかく急ごう、キャロ」

エリオが声をかけると、キャロは心得ているとばかりに頷いた。

「うん、フリードお願い」

キャロは飛竜のフリードリヒに機動力を上げるブーストアップの魔法をかけた。スピードアップしたフリードリヒは、猛スピードで自然保護隊の支部に急行した。支部にはエリオが事前に連絡してい

たため、フリードリヒが到着した時には医師と看護師が待機していた。

「先生、お願いします」

「患者は？」

女性の医師はキャロに抱きかかえられているさくらの容体を診て急いで医務室に運ぶように指示した。

さくらが目覚めたのはベッドの中だった。

「：ここは？」

頭がボーっとして状況がよくつかめない。

「知らない天井だ……」

さくらはしばらく天井を眺めていたが、やがて左腕の感触がないことに気付いた。

「？」

気になって左腕に目をやったさくらは、自分の左腕が無くなっているのを見た。

「！」

ようやくさくらは自分の身に何が起きたか思い出した。ルーシーとの戦いでさくらは左腕を切断された上に腹を刺し貫かれたのだ。それでも、最後の力を振り絞ってルーシーの左目を斬りつけて空を飛んで逃げようとしたが、ルーシーに撃墜されたのだ。

「でも、なんでここに？ そんなことよりここどこ？」

見た感じ病院の個室みたいな感じだが、どうして自分がこんなところにいるのかさくらは理解できなかった。ここはミッドチルダに

ある病院で、さくらは応急処置を受けたあとこの病院に搬送されたのだ。だが、そんなことはまったく知らないさくらは状況が把握できないだけに不安にかられた。それ以上に、ある事実がさくらの心を痛めつけた。

「私は死ぬところだった」

槍で腹を貫かれた感触がよみがえる。危うく死にかけたことで恐怖にかられたさくらはガタガタと体が震えだした。

「そうだ、グラムは？」

さくらは自分のデバイスを探したが、部屋をどこを探してもブローチは見つからなかった。

「そんな……」

あれがないと、さくらは変身ができない。変身ができないさくらは、ただの小娘にすぎない。自分の身を守る唯一の手段さえも失ったさくらは、病室の中で一人愕然とするしかなかった。

そのさくらがいる病室だが、普通の病室ではない。一般病棟から隔離された特別病室なのだ。なぜ、そんな病室に入れられたかというと、検査でさくらの血液や細胞が人間とは異なっていることがわかったからだ。念のためにさくらの世界で以前の彼女の身体データを調べたが、おかしい点は一切なかった。

「ってことは、どういうことだ？」

特別病棟の待合室でヴィータがフェイトに尋ねた。

「つまり、そのさくらって娘といま病室で寝ている娘は違うということになるかな」

フェイトは自信無さ気に答えた。いままで、彼女は病室で寝ている魔導師の名前を木崎さくらと思っていた。ティアナが入手したさ

くらの写真と瓜二つだからだ。

「でも、違うんだろ？」

ヴィータの言うとおり、検査でさくらは人間でないことが判明した。ゼクエスの帝王候補に推挙された者は人間の上位種に体を作り変えられる。しかし、そのことを知らないフェイト達からしたら別人と認識せざるを得なかった。

「とにかくあの娘が目覚ますのを待つしかないね」

目を覚ましたところで素直に事情聴取に応じるかフェイトには確信が持てなかった。エリオから知らせを受けて駆け付けたものの、想定外の事実が判明したことでどうしていいかわからなくなってしまった。ちなみにヴィータはたまたま時間があつたので様子を見にきただけだ。彼女もフェイトから二人の魔導師のことを聞かされていたのだ。フェイトがやけにその二人にこだわっているのも気になるが、同時にはやてから聞いたカリムの預言のことも気になっていた。預言にある帝王とさくらが口にした帝王は同一なのか。そうだとしたら、帝王とはいかなる存在なのか。さくらが目覚ましたらそのことも訊かなければならない。

「あ、そうだ。なあフェイト、その娘が持っていたデバイスの解析はどうだったんだ？」

「シャーリーにやってもらってる。もうそろそろ結果が出ると思うけど、ちょっと呼んでみる」

フェイトはシャリオを呼び出した。空間モニターにシャリオの顔が映し出される。

「はい、こちらシャーリー。あ、フェイトさん？」

「ごめん、シャーリー、頼んでおいたデバイスの解析どうだった？」

「ああ、それがですね…」

「駄目だったの？」

「すみません。時間がかかりますね、あれは」

「そう：ありがとう。ごめんね面倒なことさせて」

「いいんですよ。好きですからこういうの。そうだ、いまからそっちに持って行きましょうか？」

「えっ？」

「もうそろそろ、このデバイスの主という娘も目覚めるんでしょう？
本人に訊いてみたらどうかなって」

「どうする？」

フェイトはヴィータに意見を求めた。

「いいんじゃないか。あたしもそのデバイスに興味があるかな」

「じゃあ、お願いできる？」

「はい、すぐに行きますからね」

30分後、シャリオが到着した。ちょうどタイミングよくさくらが目を覚ましたと看護師から知らせがあった。早速、話を訊くことになったが、フェイトはさくらが素直に応じるか不安だった。さくらが自分たちを敵視していることを知っているからだ。特に戦闘で負けて重傷を負った直後だけに、精神的に不安定になっているだろう。

一方、さくらはベッドの上で膝を抱えてガタガタ震えていた。気がついたら、見知らぬ天井があってどこかわからないところに監禁されている。窓は無いしドアは外側からカギがかけられていて開かない。完全な密室だ。変身すれば簡単に壁を破壊して脱出できるが、ブローチがどこにもない。

「一体なんなの？」

さくらは状況がまったくわからなかった。自分はなぜこんなところにいるんだろう。ルーシーはどうしたんだろう。ルーシーが自分をここに閉じ込めたとは考えられない。そうする理由が無いからだ。

それとも、ここがあの世とやらだろうか。試しにさくらは自分の頬をつねってみた。

「痛い」

痛覚があるなら肉体は生きている。まだ、死んではいない。なら、ここはどこなんだ。

「とにかくグラムを探さないと」

いまの状態でルーシーに襲われたら、今度こそ間違いなく殺されてしまう。いや、変身したとしても左腕が無い状態ではルーシーとまともに戦うことはできない。その事実気付いたさくらは愕然とするしかなかった。そこへ、ドアの外から足音が聞こえていた。

「！」

さくらは隠れる場所を探したが、生憎とそんな場所はなかった。やがて、足音が消えてドアをノックする音が聞こえて鍵をあける音がした。さくらは警戒しながら、ドアを開けて入ってくる人間を見た。入ってきたのは4人。フェイトとヴィータとシャリオと担当の医師だ。

「あの人…確か……」

さくらはフェイトのことを思い出した。学校でルーシーと戦ったときに邪魔した魔導師だ。あとの自分と同じ年ぐらいの赤毛の目のするどい少女とメガネをかけた女性と医者らしき女性は初めて見る顔だ。と、その時、さくらはメガネをかけた女性シャリオがブローチを手に見ているのを見た。

「返して！」

シャリオに飛びかかろうとするさくらだったが、ヴィータに阻まれてしまった。

「おっと、返してほしかったらこっちの質問に答えるんだな」

さくらはヴィータを睨みつけるが、ヴィータはまったく動じない。

（通じない？）

自分と年齢的にそんなに変わらないくせにと思いつながら、さくらは今度はシャリオに視線を合わせた。シャリオもさくらの視線に合わせた。すると、シャリオが前に出てきた。

「シャーリー？」

横にいたフェイトが不審に思って声をかけるが、シャリオはそれを見無視してブローチをさくらの方に投げた。

「なっ？」

ヴィータが驚きの声をあげた。さくらを变身させてしまったら取り押さえるのも苦勞する。それがわかっているから、さくらからブローチを取り上げたのだ。

「何のつもりだ!？」

ヴィータはシャリオを怒鳴るも、もう遅い。さくらはブローチをキャッチすると变身した。

「セツタップ!」

「Yes, My Lord」

变身を終えたさくらは、魔剣に血を与えていとも簡単に壁を破壊して外に脱出した。

「逃がすかつ!」

ヴィータも变身してさくらを追いかけて外に飛び出した。だが、フェイトは錯乱しているシャリオが気がかりで一緒に行けなかった。

「なんで私あんなこと……」

シャリオは自分でもなぜあんな行動したのかわからないようだった。フェイトが問い詰めるも、シャリオ自身がわからないのではどうしようもなかった。

（これってティアナの時と同じだ）

初めて、さくらと遭遇した時にせっかく捕縛したさくらをティアナが勝手に拘束を解除した上に、逃げるさくらをフェイトが追いかけるのを妨害したのだ。あの時も、ティアナはなぜあんなことをしたのかわからないと言っている。ティアナは催眠術のようなものをかけられたのではと言っていたが、シャリオも同じように催眠術をかけられたのだろうか。

「落ち着いてシャリー、あなたのせいじゃないから」

そうシャリオを慰めるフェイトだが、さくらを追いかけて行ったヴィータも心配だった。

「先生、シャリーを頼みます」

まだ気持ちが落ち着いていないシャリオを医師に任せて、フェイトもさくらを追いかけることにした。

「いくよ、バルディッシュ」

「set up」

変身して外に飛び出したフェイトは、さくらとヴィータのところに向かった。二人は病棟からそんなに離れていないところで対峙していた。

「遅れてごめん」

謝罪するフェイトにヴィータはさくらから目をそらさずに言った。

「ああ、シャーリーの様子はどうか？」

「先生に任せてきた。本人は自分でもよくわからないようだったけど」

「そうか、つてことはあいつが何かしたということになるか」

「多分、でも証拠がない」

「だったら、とっとこ捕まえて吐かせようぜ」

「うん……」

威勢の良いヴィータに対し、フェイトはさくらと交戦経験があるのでどうしても自信無さ気になってしまう。いとも簡単にバルディッシュを破壊されたのだから無理もない。そんなフェイトの気持ちを察してヴィータが励ました。

「大丈夫だ。あたしもついている。前みたいなことにはならねーよ」

「うん、そうだね」

フェイトは力強く頷いた。いまは、目の前の少女の身柄を確保することに集中しなきゃならない。聞きたいことは山ほどある。だが、さっきまで俯いていたさくらが顔を上げた時、フェイトとヴィータは息を吞んだ。冷たい殺気に満ちた目。ヴィータですら背筋が凍るのを感じるくらいの鋭い目。それだけではない。さくらの両方の瞳孔が赤く光っていたのである。

第6. 5話【大草原、血に染めて】？（後書き）

寂しかった。怖かった。どうしていいかわからなかった。だから、戦ってきた。いまの私は戦うしかないと思っていたから。でも、優しい人たちと出会えたことで私は大切なものを思い出せる気がしてきた。次回、魔法少女リリカルなのはT w o g i r l s 第7話【動き出した策謀】

第7話【動き出した策謀】？

ゼクエスの帝王候補は帝王になることを前提としている。帝王になる＝ライバルの帝王候補が死亡するという状況を成立させることで、それを達成する手段の一つとして相手を殺害するというのがある。そのため、帝王候補は本来は闘争本能むき出しの戦闘マシンみたいなもののだが、普段は当人の理性で抑制されている。しかし、理性が完全に失われると瞳の色が変わって目に入るものすべてを破壊しようとするのだ。

なぜ、さくらがそのような状態になったのか。そもそも、さくらはすでに精神が壊れかけていた。それが、実際に死にかけたことや全然知らない場所で脱出経路もわからない状況におかれて完全に精神がこわれてしまったのだ。

「どうする？　ありや投降を呼びかけても素直に聞きそうにねーぞ」
ヴィータの言葉にフェイトは唇をかんだ。できることなら、無抵抗で保護したいところだが、そうもいかないみたいだ。それでも、フェイトは説得を試みた。

「武器を置いて。私たちは君の敵じゃない」
だが、さくらは聞く耳持たずといった風に魔剣をフェイトに向けた。

「どうやら言ってもわかんねーようだな」
ヴィータはため息混じりに言った。だが、ここでは戦えない。病院の敷地内だ。

「どうする？」
再度、ヴィータが問いかける。

「なんとか説得に応じてほしいけど……」

だが、その前にさくらが向かってきた。さくらは、フェイトに魔剣を突きいれてくる。フェイトはそれをバリアで防ごうとするが、魔剣はバリアをいとも簡単に破壊した。

「くっ」

フェイトの脳裏に前の戦いでバルディッシュが破壊された光景がよぎる。

「これが最強の武器……」

カリムが言っていたというゼクエスの魔闘士は、最強の矛（さくらは剣だが）と最強の盾を持っているという。確かに、カートリッジシステムも無しにあれだけの威力があるのだから最強であるのは間違いない。フェイトはさくらから距離を取ろうとするが、さくらは執拗にフェイトに突きいれてくる。その戦闘スタイルが以前と違うことにフェイトは気付いた。前は斬撃主体だったのが、いまは刺突主体で攻めてきているのだ。

「そうか、左腕がないから」

片腕だけでは斬撃は威力を発揮しにくい。だから、さくらは刺突中心で攻撃するしかないのだ。いくら、バンパイアデバイスが強力とはいえやはり持ち主自身の力も無視できない。だが、斬撃よりかは扱いやすいといっても、右腕だけで魔剣を扱わなければならないことは年齢の割に体格の小さいさくらには、かなりの負担となるはずである。しかも、さくらの腹の傷はまだ完全には癒えていない。無理をすれば傷口が開いてしまうかもしれない。

「とにかく、落ち着いて。君はまだ安静にしてないと駄目なんだ」
必死に呼びかけるも、さくらの攻撃が止むことはない。さくらは

完全に相手を倒すことしか頭になかった。彼女には武器を持つ者すべてが敵に見えるのだ。フェイトの説得を聞き入れずに攻撃してくるさくらだが、急にフェイトから離れた。直後、鉄球がフェイトの前を斜めに横切った。

「ヴィータ？」

鉄球が飛んできた方に目をやる。さっきの鉄球はヴィータがグラーフアイゼンで打ち出したものだ。さらに、ヴィータは8発の鉄球を4発ずつ打ち出した。さくらはそれを簡単に回避するも、鉄球には誘導機能も付与されているため、向きを変えてさくらに迫った。

「！」

回避が間に合わないと判断したさくらはAIシールドでガードした。

「なにっ!？」

ヴィータは驚きを隠せなかった。鉄球にはバリア貫通の効果も付与してある。それが一発も貫通できなかったのだ。

「あれが、最強の盾か。確かに最強の魔導師だな。面白い」

ヴィータはグラーフアイゼンに指示を出した。

「アイゼン、フォルムツヴァイ！」

「Raketenform」

グラーフアイゼンの形態が切り替わると、ヴィータはそれでさくらを攻撃した。

「ラケーテンハンマー！」

グラーフアイゼンからの魔力噴射で加速したヴィータは一気にさくらとの距離を詰めた。だが、この攻撃もAIシールドを破ること

はできなかった。

「ぐっ」

ヴィータはグラーフアイゼンに力を込めるが、A I シールドはビクともしない。

「なんて固えんだ」

何度打ちつけてもA I シールドを破ることはできない。もう、ヴィータは意地になっていた。

「アイゼン！」

「G i g a n t f o r m」

ヴィータはグラーフアイゼンをギガントフォームに切り替えて渾身の力を込めて打ちつけた。

「ギガントハンマー！」

これなら防御を破ってさくらをぶっ飛ばせると思っていたが、A I シールドの固い防御を破ることはできなかった。

「そんな……」

どんなに固い防御魔法でも、このぐらいの攻撃を受けたら術者に衝撃なり振動がかかるはずである。しかし、さくらは何事もないかのようにすました顔をしてヴィータを見ていた。愕然とするヴィータに魔剣を向けると、さくらはゆっくりとそれを後ろに引いた。次の瞬間、さくらは魔剣を目にも止まらぬ速さで突きだした。

「！」

ヴィータには何があったのかわからなかった。気付いた時には、魔剣が自分の胸に突き刺さっていたのである。さくらが魔剣を抜くと、ヴィータは地上へと落下した。

「ヴィータ！」

フェイトが落下するヴィータをキャッチするも、すでにヴィータは戦闘不能になっていた。

「しっかりして！」

「だ、駄目だ。あいつは強すぎる…手も…足も出…ねえ…。あ、あれで半人前…かよ……」

さくらがカリムのいうゼクエスの魔闘士なら、いまのさくらはまだ真のゼクエスの魔闘士になりきれしていない半人前ということになる。それでも、ヴィータをいとも簡単に撃破したということは、一人前のつまり真のゼクエスの魔闘士になったらその強さは如何ほどになるか想像もつかない。

「な、なんとしてでも、奴を捕えねーと、た…大変なことに…なっちゃまう。あたしの…ことは…いいから…奴を止…めて…くれ」

苦しい息の下で、さくらを止めるように訴えるヴィータだが、重傷を負っている彼女を放置するなんてフェイトにはできなかった。そこへ、シャリオと医師が駆けつけてきた。

「フェイトさん」

「シャリー」

タイミング良く来てくれたことにフェイトは安堵の表情を浮かべた。

「ヴィータをお願い」

「はい」

ヴィータをシャリオ達に託したフェイトは、バルディッシュをフルドライブのライオットブレードにして、空に浮かんでいるさくらを見上げた。

「フェイトさん……」

シャリオは心配そうにフェイトの後ろ姿を見た。さくらに何か得体のしれないものを感じていたからだ。事実、ヴィータを撃破しているのだから只者ではない。一方、女性医師の方は興味深げにさくらを見上げていた。だが、二人にはゆっくりとしている時間はない。重傷のヴィータを一刻も早く治療しなければならない。

「ドクター、早く」

「ええ」

シャリオに急かされて病院にもどる女性医師だったが、未練があるのか何度もさくらの方を振り返った。その様子を上から眺めていたさくらだったが、特にそれに対して興味を持つというようなことはなかった。彼女にとって、武器を持たないシャリオたちやすでに撃破したヴィータは眼中になかった。さくらが関心を持つのはフェイトとの再戦である。今度こそ叩きのめす。そう決意を持って、さくらは地上に降り立った。武器を構えて対峙する二人。先に仕掛けたのはさくらだった。フェンシングのように魔剣を突きまくる。フェイトはそれをバルディッシュの魔力刃で受ける。フルドライブで出力されたバルディッシュの魔力刃は、さくらの魔剣を受け止めることができた。

「悪いけど、手加減はしないよ」

フェイトは反撃に出た。フェイトの斬撃を必死に防戦するさくらだが、右腕だけで魔剣を扱っている状況では明らかに不利だった。バルディッシュと斬り結ぶ度に、さくらは魔剣を落としそうになる。フェイトの横薙ぎの攻撃をジャンプしてかわしたさくらは、フェイトから距離をとって魔剣を右薙ぎに振るった。さくらから放たれた飛ぶ斬撃はフェイトに向かってくるが、それを回避することは容易であった。しかし、フェイトの後方にはシャリオたちがいる。

「ぐっ」

バルディッシュで飛ぶ斬撃を受け止めたフェイトだが、そのせいでその場から動けなくなってしまう。そこを狙ってさくらが突進する。このままでは、やられると判断したフェイトは奥の手を出すことにした。バルディッシュをリミットブレイク状態にして一気に飛ぶ斬撃をかき消したフェイトは、二刀流になっていたバルディッシュを連結させて左に薙いだ。左に薙ぐということは、さくらの無防備や左側を狙うことになる。だが、さくらはA Iシールドで防御した。

「くっ」

常識外れとも思えるA Iシールドの頑丈さにフェイトは舌を巻いた。それと、さくらの子供とは思えない戦闘センスにも。左腕が無いというアンバランスの状態だから戦えているが、もしさくらが両腕で戦えていたらフェイトは苦戦を免れなかっただろう。だが、フェイトはバルディッシュを連結させずに二刀流のまま左右から攻撃していれば勝っていたかもしれない。なぜなら、A Iシールドには一方向からの攻撃しか防御できない弱点があるからだ。そして、歴戦の勇士でもあるフェイトはそのことに気付いた。フェイトは連結を解除して二刀流でさくらに迫った。初めて戦う二刀流に分が悪いと思ったのか、さくらは後ろに下がろうとした。だが、すぐにフェイトが距離を詰める。さっきみたい、飛ぶ斬撃なんてものをさせないためだ。フェイトはすぐに発射することができない飛ぶ斬撃の弱点も見抜いていたのだ。

「……！」

さくらは予想外に強いフェイトに怒りと同時に焦りも感じていた。最強であるはずのゼクエスの帝王候補が同じ帝王候補にならまだしも、それ以外の魔導師に負けるわけにはいかないのだ。ゼクエス本

来の闘争心に心を支配されているさくらには目の前の敵に勝つことしか頭になかった。左腕が無いという言い訳は通用しない。いかなる状況においても勝ち続けること、それがすなわち最強なのだ。意地でも勝たなければならぬのだが、それはさくら本人の意思ではない。すでに木崎さくらとしての意思はなくなっている。いまのさくらはゼクスエスの魔闘士としての闘争本能のみで動いているのだ。戦闘に関して言えば、それは理想的な形ではあった。なにしろ、戦闘以外のことを一切考えずただ敵を倒すことのみを求めるからだ。だが、それは戦闘以外のことをまったく考慮しないということでは、勝つためにはどんな無理でもやってしまう危うさがあった。例えば、さくらは右腕だけで魔剣を持っているが、ただでさえ小柄なさくらが持つには少し大きい魔剣を片腕で振るったりしていたら右腕にかかる負担は相当なものである。それを、激しくフェイトと打ち合っただけ一回も魔剣を落とすようになったりしないのは、魔剣を落とす戦闘に負けることなので絶対に落とさないように右腕に力を入れているからだ。当然、さくらの右腕は負担がかかり続けるわけだからこのままでは右腕の機能が破壊されてしまう危険もあった。それを回避するには右腕に負担がかかりすぎないようにするしかないが、自分の体よりも敵に勝つことを優先させてしまっているいまのさくらには無理だ。ルーシーは事前に神官から警告を受けていたから、どんな時でも決して暴走状態にならないように注意していたが、さくらは魔女から暴走の話なんて聞かされていなかった。温厚なさくらなら暴走することはないと思っていたからかどうかはわからないが、さくらの体の問題は右腕だけではなかった。

「？」

フェイトはさくらの様子がおかしいことに気付いた。苦しそうに息を切らしている。理由はすぐにわかった。さくらのバリアジャケットの腹のところが赤く染まっていたのである。

「傷口が開いたんだ」

そりゃあれだけ打ち合っていたら傷口が開くのは当たり前で、血はポタポタと地面に落ちていた。普通なら右腕で傷口を抑えるものだが、魔剣を持っているので抑えることができない。

「もう止めるんだ。このままだと君は本当に死んでしまう」

フェイトは必死に呼びかけたが、いまのさくらには誰の声も耳に入らなかった。さくらが苦しそうにしているのは腹からの出血だけではなかった。彼女の右腕もう限界が近づいていた。魔剣を持つ手にも力が入りにくくなっている。恐らく、あと数回打ち合えばさくらの右腕は使い物にならなくなってしまうだろう。そんな危険を無視してでもさくらは戦うことを止めようとしなかった。さくらを止めるには戦闘不能の状態に追い込むしかない。少なくとも武器を持っている間は戦うのを止めないだろう。

「一か八かやってみるしかない」

フェイトにしてもリミットブレイク状態なので長時間の戦闘は体への負担が大きすぎる。ここで一気にケリをつけることにした。うまくいくかどうか自信はないが。さくらが振り下ろした魔剣を一刀流にしたバルディッシュで受け止めたフェイトは、バルディッシュを時計回りに回した。

「！」

さくらは啞然とするしかなかった。自分の手から魔剣が離れて地面に落ちたのである。彼女がまだ一回しか見たことのない巻き上げをフェイトは見事に極めたのだ。攻撃魔法が存在しないゼクスは、攻撃力のほぼすべてをバンパイアデバイスに依存している。そのバンパイアデバイスを手元から離してしまったさくらは戦闘力を喪失してしまった。

「……」

魔剣が無いというのに不思議とさくらは恐怖や不安を感じなかった。実は、さくらが見たという巻き上げは母がやってみせたものだった。そのことで、さくらはフェイトと自分の母親を重ねたのである。フェイトに母の面影を見たさくらは、ようやく目の前の人間が自分に害を及ぼす存在ではないことに気付いた。そして、心の落ち着きを取り戻したことで、さくらを支配していたゼクスエスの闘争本能も小さくなって、彼女の暴走状態もおさまった。緊張が解けたさくらはフラッと倒れそうになった。フェイトがあわてて彼女を支える。

「しっかりして」

フェイトは声かけをするが、返事はない。腹の傷を見てみると、かなり出血していた。

「早く処置をしないと」

そこにシャリオと女性医師が駆けつけた。

「ドクター、お願いします」

「はい」

女性医師はスタッフを呼んでさくらを運ばせた。さくらが女性医師たちによって搬送されていくのを見届けると、シャリオは心配そうにフェイトに尋ねた。

「フェイトさん大丈夫ですか？ どこか怪我でも」

「大丈夫だよシャリー。それより、ヴィータはどう？」

「あ、大丈夫です。命は取り留めるそうです」

それを聞いてフェイトは安堵した。しかし、シャリオが気になることを言いだした。

「フェイトさん、ちょっと気になることがあるんですが」

「なに？」

「あの先生、ゼクエスのことを知っているんじゃないでしょうか」

「えっ、どういうこと？」

「私がゼクエスのことを言ったら、驚いて『本当に存在したの？』って」

はやてに聞いたところによれば、ゼクエスのことを知っている人はほとんどいないらしい。文字資料が皆無だからだ。だからといって、女性医師がゼクエスのことを知る機会がないとは言い切れないが、フェイトはなんだか嫌な予感がした。

「心配はいらないと思うけど……」

それはフェイトの願望でもあった。

その夜、女性医師は誰もいない部屋で誰かと連絡を取り合っていた。

「サラ？ シャロンだけど、ボスに伝えて。ゼクエスの帝王候補がいるって。そう、実在したのよ。えっ？ 間違いないわよ。ちゃんと体も調べたんだから。伝説の最強の魔導師。こっちの言いなりにしたらかなりの戦力になると思わない？　じゃ、ちゃんと伝えたいよ」

連絡を切ると、女性医師は楽しげにつぶやく。

「ディアスとゼクエスの帝王…この二つがあれば全世界を私たちの思うままにすることも夢ではないわね」

第7・3話【動き出した策謀】？

さくらが意識を取り戻すと、フェイトは事情を訊いてみた。初めはフェイトを警戒して何も喋ろうとはしなかったさくらだったが、親身に接してくれるフェイトに徐々に心を開いていくようになった。そして、さくらは自分のことを話し始めた。

「私の名は木崎さくらといいます。市立かるがも第二小学校五年生です」

そう名乗ったさくらだったが、フェイトはそれに対し疑問を挟まざるを得ない。

「君は本当に木崎さくらさん？」

「えっ？」

おかしいことを訊く人だなというような顔で見るさくらに、フェイトはそのわけを言った。

「実は君の体を検査をしたんだ」
それで、さくらにはわかった。

「私の体が人間じゃないことがわかったんですね」

悲しげに呟くさくら。それを見てフェイトはさくらと初めて会った時のことを思い出した。あの時、さくらはクラスメートに自分の正体が知られてひどく動揺していた。さくらにとって、それまでの日常から切り離されたことはそんなにショックなことだったのか。ましてや人間ですらなくなったことは本人には大変辛いことなのか。もしれない。ならば、なぜさくらはゼクススの魔闘士になったのか。それを訊きたいフェイトだったが、さくらが膝を抱えてしまったので無理強いはいしないことにした。

「今日はここまでにしよう」

「すみません」

「いいんだよ。言いたくない時は言わなくても」

さくらとていろいろあったのだ。言いたくないこともあるのだろう。フェイトはさくらが自分から話してくれるのを待つことにした。

「話してくれる気になったら言って。私は外にいるから」

フェイトからしたら自分がいたら、さくらが落ち着かないのでは
と思って外に出ようとしたのだが、さくらは焦った感じでフェイト
を呼びとめた。

「あ、あの」

「なに？」

フェイトが振り向くと、さくらは俯いてしまった。

「…すみません。なんでもないです……」

言いたいことがあるのに言えないもどかしさ。とても、さっきま
で自分やヴィータを苦戦させた少女とはフェイトは思えなかった。
しかし、前にティアナが調べたさくらは滅多に怒らない控えめな性
格とのことなのでこれが本当のさくらなのだろう。そして、さくら
が何を言いたいのかわかったフェイトは再び椅子に座った。さくら
はちよつと驚いた様子でフェイトを見た。どうして自分が思ってい
ることをこの人はわかるのだろう。魔法で心の中でも覗いたのか。
訊いてみたいさくらだったが、口から言葉が出てこなかった。軽々
しく口をきいて良いのかという不安があったからだ。なにしろ、さ
くらはフェイトに刃を向けて彼女の仲間に重傷を負わせているのだ。
そう、いまのさくらは相手から話しかけられた時は返答するが、自
分から相手に話しかけることができない控えめにもほどがあるだろ
うという状態になっていた。さくらの様子から、そのことに気付いた

フェイトはこのままではいけないと論ずことにした。

「言いたくないことは言わなくてもいいけど、言いたいことは言うた方がいいよ。そうでなかったら、お互いのことわからないと思うよ」

「はい……」

さくらだってその事はわかっていた。わかってはいたが、さくらが他人に対して何かを求めたり訴えたりしたことはほとんどなかった。せいぜい、ルーシーに戦いを止めるよう訴えたぐらいだ。それも、命の危険にさらされての事だ。だが、必死に訴えてもルーシーは聞き入れてはくれなかった。そのせいもあって、さくらは余計と他人に自分の気持ちを伝えることに消極的になっていた。だが、フェイトの言うように会話が無ければわかりあうこともできないってことも理解している。では、話が通じなかったらどうするべきか。さくらは訊いてみることにした。

「あの…ハラオウンさん？」

「フェイトでいいよ」

「えっ」

意外な申し出に思わず驚きの声が出てしまった。名前で呼んでいってことは、さくらを親しい関係にある者と認定したということだ。二人の間にそんなに親しくなれるような事象は起きていない。当たり前だ。戦いしかしていないのだから。にも関わらず、自分から私とあなたは親しい関係ですと言ってくるようなフェイトにさくらは警戒心を抱いた。

（もしかしたら、私を油断させて利用する気かも）

だが、そう思ってみてもさくらには逃げることもできなかった。無理に体を動かせばまた傷口が開く恐れがあるし、右腕も酷使しすぎたせいで自由に動かせないのだ。ブローチも取り上げられている。

あれが無かったらA Iシールドで身を守ることもしかない。いまの状態でルーシーに襲われたら自分ではどうすることもできない。死にたくなければフェイトにすぎるしかないのだ。

「じゃ、フェイトさん。話し合おうとしても相手が応じてくれない場合はどうすればいいんですか？」

「それは、君がどれだけ相手の事を考えるかによるよ」

「相手を思う？」

フェイトにはそれができるのだろうか。だから、自分の一人にしないでほしいという気持ちを察してくれたのだろうか。しかし、そんなに他人のことを思えるのだろうか。ましてや、さくらはフェイトとその仲間に攻撃を仕掛けているのだ。さくらは訊いてみた。

「どうしてフェイトさんは私に優しくしてくれるんです？ あんなにひどいことしたのに」

さくらの疑念ももつともだ。さくらにはそこまで親切にされる覚えはない。いわれもなき親切は受けない方が賢明だ。まあ、うれしくないと言ったらウソになるが。でも、本当にフェイトを信じるにはその真意を知るべきだろう。フェイトは答えた。

「似ているから」

「えっ？」

「実は私も小さい時に同じ年くらいの女の子と戦ったことがあってね。その娘は君と同じ世界の人間で、それ以前は魔法のことなんて何も知らなかったけど、ふとしたきっかけで魔導師になったんだ」
(私と同じだ……)

その相手って誰だろうとさくらは思った。会ったことある人だろうか。年齢的からいってあの赤い魔導師は違うだろうか。

「私とその娘はジュエルシードというロストログア……ってわからない

いか。まあ、危険物と思ってくれたらいいよ。それを回収している時に出会ったんだ」

フェイトが言うには、最初はその少女は話し合おうと言っていたが、その時のフェイトはジュエルシードを集めることしか頭になくて、その少女の説得にもまったく耳を貸さなかったらしい。

「それでもその娘は私に何度も話しかけてくれた。私にひどいことだってされたのにね。そして、いつしか私もその娘に心を開くようになった」

「どうして、その娘はそこまでフェイトさんのことを気にかけていたんですか？」

「困っている人を見過ごせない性格だからって本人は言っていたけどね。あの娘が魔導師になってジュエルシードを回収するようになったのも、困っている人を助けるためだったから」

（そんな人がいるんだ）

さくらだって困っている人を見たら何とかしてあげたい気にはなる。しかし、相手に拒否されてなおかつ攻撃されてもなお、その相手のことを思いやれることなんて誰にだってできるものではない。

「その娘にはずいぶん助けられた。私がひどく落ち込んだ時も彼女のおかげで立ち直ることができた。いまでは一番の親友さ」

（まるで不良漫画の喧嘩ね）

ふと、そんな事を感じながらも、さくらはフェイトが何を言いたいかだいたいの見当がついた。フェイトとその少女と同じように、さくらとルーシーもいずれはお互いの事を理解し合って仲良くなれるはずだと。

「フェイトさんの仰られたことはわかります。私たちも同じように仲良くなれるかもしれないってことでしょ？ それは多分無理だと思います」

「どうして？」

「私たちの戦いはどちらかが死ぬまで終わらないからです。少なくとも彼女は私を殺すまで戦いを止めないでしょう」

「そのもう一人の娘は、もしかして名前はルーシー・ブランケット？」

「知っているんですか？」

「いや、君たちのことを調べていたら、その名前が出てきたからね」「そうですか」

さくらは少しガツカリした。もし、フェイトとルーシーが知り合っていたら、ルーシーの事を訊かせてもらえと思ったからだ。しかし、調べたというのなら経歴ぐらいは知っているだろう。さくらは訊いてみることにした。

「あの、彼女のこと教えてくれませんか？ 私、彼女の事あまり知らないんです。名前と私と同じゼクエスの帝王候補だってことしか」ゼクエスと聞いてフェイトはやはりと思った。そうではないかと疑いはあったが確証はなかった。ゼクエスについて詳しく教えてほしいところだが、いまはさくらの質問に答える時だ。フェイトは、さくらにルーシーの生年月日と幼い頃に両親をなくしたこと、反政府組織に拾われて以後はその組織と行動を共にしていたことなどおまかな経歴を教えた。

「反政府組織ですか……」

さくらは反政府組織というのがどんなものかは知らないが、秘密結社か何かをイメージした。その反政府組織はいまは壊滅して、生き残っているのはいまのところルーシーだけらしい。

「彼女だけが生き残った……」

自分と同じだとさくらは思った。まあ、天涯孤独が帝王候補の条件なので当然といえば当然だ。そして、さくらはルーシーがいた世

界がどうなっているかも聞かされた。長期の内戦で、子供も戦場に駆り出されて、いまでも多くの人命が失われていると。

「そうだったんですか」

初めて知る相手の過去。さくらは複雑な気分になった。彼女の方が自分よりも悲しい目に遭っているのだ。可哀想だとは思う。しかし、さくらとルーシーは殺し合いをしている間柄なのだ。同情をすることはできない。向こうもそう考えているだろう。

「ありがとうございます」

さくらはフェイトに礼を言った。すると、今度はフェイトが質問してきた。

「ちょっとこっちも訊きたいことがあるんだけど、いいかな？」

さくらは少し考えて、

「はい、いいですよ」

フェイトはゼクスについて尋ねた。さくらはこれまでの事を話した。その結果、わかったのはさくらもそんなにゼクスのことを知っているわけではないことだった。さくらからの情報でわかったのは、さくらが長い緑色の髪少女に帝王候補に選ばれたこと、帝王候補になるには天涯孤独でなければならぬこと、帝王候補になった者は体内にリーガル・コアを形成されること、帝王になるにはもう一人の帝王候補を死なせること、さくらがそのことを知らされたのは帝王候補になった後ということだ。さくらはそのつもりはなかったが、向こうから攻撃をしてきて止むを得ず応戦していくうちに相手に対する憎悪が芽生え、殺意まで抱くようになった。それが、暴走状態につながったわけだが、いまでは自分が相手を殺そうとしていたことが信じられないとフェイトに話した。

「私は戦いたくなんてなかった。だから話し合おうって彼女に言ったのに全然聞いてくれなくて……」

さくらは完全に戦意を無くしていた。しかし、ルーシーはそうではないだろう。むしろ、顔を傷つけられたことでさくらに恨みを抱いているはずだ。今度襲われたら間違いなく殺されてしまう。そして、さくらは死ぬまでルーシーの影におびえ続けることになる。

「……」

あまりにも救いが無い現実にはさくらは気持ち沈んでしまった。それから解放されるにはルーシーが死ぬ以外にない。

「それで君はこれからどうする？」

どうすると言われても、さくらは首を横に振ることしかできない。もう戦いたくもないし、死にたくもない。かといって一生逃げ回るのも嫌だ。もうこうなったら、フェイトに保護してもらうしかなさそうだが、どうしてもあと一步が踏み出せない。一言、助けてと言えば何かしらの手助けはしてくれそうだが。答えられないさくらにフェイトは質問を変えた。

「じゃ、君はどうしたいの？」

「えっ？ 私がしたいことですか？」

「そう、何も考えず君が思うこと言っただけなんじゃない？」

さくらは自分が何をしたいか思い浮かべた。

「私は……昔に戻りたいです。でも、もう無理ですね。私は人間じゃなくなったら、皆に変身しているところを見られたから帰る場所もない。ゼクエスの帝王になれたら何とかなるかもしれませんが、もうこんな体じゃそれも望めません」

いまのさくらは左腕が無いうえに右腕も痛めている。

「あの時、ゼクスエスの帝王にならないかって誘いに乗らなかったらこんなことにならなかったのかもしれませんが、そうしたら私はずっと一人のまま。いまでも一人ぼっちですけどね」

さくらは自嘲気味に笑った。全然知らない世界でただ一人。こんな状況でこれから何をしたいと言われても困る。だから願望を口にするしかなかった。それが叶えられることはないと知りつつも。

「ルーシーが何でゼクスエスの帝王になりたいか心当たりはない？」

「無いです。というより、そんなに話してませんから」

「そう……」

ルーシーがゼクスエスの帝王になりたいという理由がわかれば、それを糸口にして二人を和解させることも可能かとも思ったのだが。

「ねえ、もう一度ルーシーと話しあうつもりはない？」

しかし、さくらは首を横に振る。

「もう話しあいの余地はありません。私は絶対に彼女を許さない」
さくらはきっぱりと答えた。

「でも、話をしないと何も解決しないよ」

「それは詭弁です。話をする前に殺されてしまいます」

「さくら……」

「フェイトさんは私たちが昔の自分たちに似ていると言っていました
が、フェイトさんは相手の方を殺したいって思ったことありましたか？
相手の方に殺されそうになったことってありましたか？ 私
は出会ったその時から殺されそうになったんです」

話しあえる余地があったら、怯えていたりなんかしない。そこにはルーシーに対する恐怖心とともに反発いや憎悪があった。さくらに他者を憎む心が残っていることに気付いたフェイトは、もう少し様子を見ることにした。自分がまだ完全に信用されているわけでは

ないことも知っているの、時間をかけてさくらの不信感や警戒心を解いていくことにしたのだ。管理局に連れていくのはその後だ。さくらに管理局に行くのは逮捕されるためでなく、さくらを保護するためだということをわかってもらうのにも時間が必要だろうからだ。

ミッドチルダ中央部、首都クラナガンにある新興宗教団体レッドコメントの本部があるビル。そこにある礼拝堂では奇跡の男として有名な教祖ギルバート・ミハイルが信者たちに奇跡を見せていた。ミハイルの起こす奇跡とは、どんな名医でも治せないような病気や怪我を手をかざして念を込めるだけで治癒してしまうというものだった。実際にそんなことがあり得るのだろうか。いま、ミハイルは一人の老人の目に手をかざしている。この老人は視力を完全に失っていて、医者からも一生目が見えることはないと宣告されていた。そこで、藁をもつかむ思いでここに來たのだ。

「ミハイル様、本当に私の目が見えるようになるんでしょうか」
不安げな面持ちの老人にミハイルは安心するように諭す。

「大丈夫だ。あなたが見えるようになりたいと強く願えば必ず見えるようになる」

「は…はい」

そして、ミハイルがかざしている方の手に念を込めると手がぼんやりと光った。数秒して光が消えたら治療が終わったということになる。はたして、老人の目は再び見えるようになるのか。信者たちは固唾をのんで見守った。

「さあ、ゆっくりと目を開けてみるんだ」

ミハイルに指示された老人は目をパツと開いた。すると、老人は

椅子から立ち上がって周りを見回した。

「み、見えるぞ。信じられん。もう見えないと諦めていたのに」
喜びで体が震える老人。老人はミハイルの手を握り感謝した。

「ありがとうございます。すべてミハイル様のおかげです」
老人は涙を流して何度も感謝するが、もし彼がミハイルの表情を見ることができたら言葉を詰まらせていただろう。しかし、ミハイルの表情は銀色の仮面に隠されていて読むことはできない。

「いや、あなたのもう一度目が見えるようになりたいという強い思いが奇跡を起こしたのだ。私はその手助けをしたにすぎん」
老人の肩をたたくミハイルの隣にいた側近の男が信者たちに教祖の偉大さを強調する。

「皆さん、奇跡です。奇跡が起きたのです。ミハイル様を信じさえすればこのとおり救われるのです」

一斉に歓声がわき起こった。涙を流してミハイルを拝む者もいた。ミハイルはこうして信者を増やしていったのだが、それだけではない。さまざまな慈善事業にも積極的に取り組んでいて幅広く支持を得ているのだ。だが、彼の裏の素顔を知る者はこの場にはほとんどいない。礼拝堂を後にしたミハイルは苛々しげに喚いた。

「なんだ、あのジジイは！ 目を開くのが早すぎる。あんなジジイはもういらん。殺せ！」

「はっ」

命令を受けた先ほどの側近が、頭を下げて出ていく。実は、老人はサクラでさっきの奇跡はヤラセだった。ミハイルには奇跡を起こす力などない。信者を効率よく集めるための手段として奇跡を起こす男を演じているにすぎなかった。こうして、集めた信者の中から

兵士の適性がある者を洗脳して死を恐れない兵士とするのが目的だ。彼らはこうして育てた兵士を傭兵として各世界の武装勢力に提供しているのだ。

「随分と不機嫌なようで」

後ろから冷やかす声がしたのでミハイルが振りかえると、黒い牧師のような服を着た若い男が壁にもたれていた。

「貴様か、デュオ」

「なんだい？ 急に呼びだしたりしてよ」

デュオ・サウザーは面倒くさそうに尋ねる。

「貴様にやってほしいことがある」

「誰を殺れて？」

「誰も殺せとは言っていない。さらってくるんだ」

「はっ？」

「殺さずに生かしたまま連れてくるんだ」

ミハイルの命令にデュオは冗談はよしてくれとばかりのリアクションをした。

「おいおい、俺に誘拐犯になれって？ 他の奴にやらせろよ。俺がやるまでもないだろ」

「馬鹿者、相手が只者でないから貴様にやってもらうんだろうが」

「誰だよ。その相手って」

「貴様、ゼクスを知っているか？」

「うんにゃ、初めて聞いた」

ミハイルはゼクスについてデュオに説明した。

「ふーん、そのゼクなんとかの帝王ってやつの候補が現代に現れたからそれをさらって来いってことか」

「そうだ。言っておくが、さらうのはもう一人の方だ」

「どうしてだよ？ 居場所分かっている方がすぐにやれていいだろうが」

「そいつは管理局の連中が張り付いている。それに負け犬には用はない」

「まあ、やれって言われたらやるけどよ。そのゼクなんとかって」「ゼクエスだ」

「そのゼクエスってあんまりよくわかんないんだろ？ そんなに必要なのかい？」

ゼクエスについてはミハイルもすべてを知っているわけではない。昔、小耳にはさんだ程度でただの神話の類にしか思っていなかった。それが、最近実在したとの情報を入手したのだ。

「そうだ。それから行く時は兵士を100人連れて行け」

「100人？」

デュオは驚きの声をあげた。たかが一人に100人は多すぎる。

「おいおい、そりゃいくらなんでも大げさすぎるぜ」

「甘くみるなよ。ゼクエスの帝王は世界を滅ぼす力があると言われているんだ。候補とはいえ侮れんぞ」

だが、そう言われると余計やる気が出るのがデュオだ。

「心配はいらねえよ。フォーサイズの黒い死神デュオ・サウザー様に安心して任せてくれ」

自信たっぷりに胸を叩くデュオにミハイルの叱責が飛ぶ。

「馬鹿者、ここでその名を出すなどってあるだろ。誰が聞いているかわからんのだぞ」

「そーいや、管理局のスパイがあんたの信者に紛れこんでいたらしいな」

「ああ、奴らも遊んでばかりではないからな。前からここに目を付けていたようだ。だが、奴らは迂闊には手を出せない。俺は市民の支持を得ているからな」

「その市民の人気者の教祖様の裏の顔が悪党だってんだからな」
やや呆れ気味にデュオが言う。そのデュオにミハイルはさつさと行けと手で促す。

「いいから早く行ってこい」

「へいへい」

デュオは両腕を頭の後ろにまわして部屋を出た。デュオの姿が見えなくなると、ミハイルは疲れたようにため息をついた。

「つたく、気楽な奴だ」

だが、部下の中では一番使える奴でもある。奴ならゼクエスの帝王候補を捕えることができるだろう。

「行動を起こす時も近いようだな」
すべては野望の成就のために。

【用語解説】

バンパイアデバイス

ゼクエスの帝王候補が使うデバイス。その特徴は使用主の血を刀身に受けることで絶大な攻撃力を発揮することで、それはカートリッジシステムを採用してなくても他タイプのデバイスを凌駕する。

リーガル・コア

ミッドやベルカ系の魔導師の魔導の源となるのがリンカー・コアなら、ゼクエスの魔闘士の力の源となるのがリーガル・コアである。このリーガル・コアによって体内の血液や細胞が帝王候補へと作り変えられる。また、リーガル・コアは帝王候補にとって心臓になるため、これを奪われると死にいたる。

ゼクエスの帝王

5000年に一度現れるとされている最強の魔導師。文献などによる資料が絶無であるため実在すら疑問視されていた。

帝王候補

ゼクエスの帝王となる権利を持つ者。それぞれ最強の矛であるバンパイアデバイスと最強の盾であるA Iシールドを持つ候補が戦って生き残った方が帝王となる。相手の死は絶対条件だが、必ずしも直接手を下す必要はなく、他の誰かに殺された、事故や病気で亡くなったとかでもよい。とにかく、自分が生きていて相手が死亡している状況が成立した時点で戦いが終結する。

A Iシールド

ゼクエスの魔闘士のみが展開できる最強の盾。主の血を浴びたバンパイアデバイス以外のあらゆる物理的・魔法的攻撃を一切防ぐ絶

対不可侵の防御。ただし、一方向にしか展開できないため死角が生じるため全周囲防御には他系統の防御魔法を習得する必要がある。

ゼクエスの魔力

ゼクエスの帝王候補のみが使える視線を合わせるだけで他者の何かを絶対的に支配できる魔法。その何かとは候補によって異なり、たとえばルーシー・ブランケットは他者の記憶を自由に書き換えることができる。ただし、同じ帝王候補や強い魔力を持つ魔導師には通用しない。

レッドコメート

ミッドチルダに本部がある新興宗教団体。各種の慈善事業で市民から高い支持を得ている。教祖は銀色の仮面をつけたギルバート・ミハイル。触れただけでどんな怪我や難病も治癒してしまうことから『奇跡の男』と評判。

フォーサイズ

各世界の武装勢力に兵を提供している武装宗教団体。リーダーのダニエル・ジャツカルの正体はギルバート・ミハイル。現在はロストロギアのディアスの回収に全力を尽くしていて各地で時空管理局と衝突している。

第7・7話【動き出した策謀】？

さくらを少しでも人に慣れさせようとフェイトはいろいろな人間を病室に連れてきた。だが、さくらはフェイト以外とは喋ろうとはしなかった。それどころか、明らかに警戒している目で相手を見る始末でフェイトはフォローするのにも一苦労だった。ヴィータが病室を訪ねてきた時は顔面蒼白になっていた。仕返しに来たと思ったのだ。しかし、ヴィータがその件について不問にすると、目つきの悪い子供だと思っていたさくらは意外に寛大なのに驚いた。さらに、驚いたのは自分と同年代か年下と思っていたヴィータがフェイトと同世代と知った時だった。

さて、フェイトにしてもいつまでもさくらに付きっきりというわけにはいかなかった。しかし、さくらの不安げな顔を見ると、とても一人にしておけなかった。だが、いつまでもというのはさくらのためにもならず、フェイトはこの日ちょうど非番だったエリオとキヤロに来てもらうことにした。年が近い二人となら、さくらも少しは気を許せるだろうと思ったからだ。コンコンとドアをノックする音がして、フェイトがどうぞと声をかける。

「失礼します」

入ってきたのはエリオとキヤロだ。

「ごめんね二人とも。お休みなのに来てもらって」

「いいえ、特にすることなかったですし。それに僕もキヤロもある娘のことが気になってましたから」

エリオは見舞いの果物を置いてさくらの様子を伺った。

「どう？ 調子は」

さくらは答えずにフェイトの方に目をやった。

「この二人は私と一緒に暮らしているエリオとキャロだよ」

「エリオ・モンディアルです」

「キャロ・ル・ルシエです」

自己紹介されたので、さくらも挨拶することにした。

「初めまして、木崎さくらです」

さくらにはこの二人に助けられた記憶がなかった。だから、初対面の人と思ったのだ。見た目は自分とそんなに年は離れていないようだが、ヴィータの例もある。フェイトに敬語を使っているから、彼女より年下だろうが、自分よりはだいぶ年上かもしれない。観察するように二人を見るさくらに、フェイトはさらに二人についての紹介をつけくわえた。

「さくら、この二人が君を助けてくれたんだよ」

「えっ？」

さくらはフェイトの方を向き、また二人の方に向きなおした。そういや、ルーシーに撃墜されて落下中に何かに助けられたという記憶がかすかにある。ぼんやりとした記憶だったので夢だったのか現実だったのかわからなかった。現実だったとしたら、この二人は命の恩人となる。

「そうだったんですか。すいません、助けていただいたのにお礼も言わなくて」

「いいよ。お礼なんて」

そんな大層なことじゃないという感じに言うエリオだが、ルーシーから助けてくれたということはかなり危険な目に遭っているはずである。さくらにそれ相応の見返りを要求してもよさそうなものだ。もっとも、子供のさくらに見返りなんて期待できないのもあるだろうが。

「どうして、私を助けてくれたんですか？」
見ず知らずの人間を危険も顧みずに。

「どうしてって、そうしたいと思ったからさ」

極めて簡潔で反論の余地もない答えである。エリオにしてもキャロにしても、さくらに対して何の敵意も見せていない。さくらは彼らにとって敵少なくとも友好的な関係ではなかったはずだ。時空管理局という組織が警察みたいなものだというのはさくらにもわかってきた。しかし、正義感だけによるものではない。さくらには他にも何かが彼らを動かしているように思えた。

（優しさか……）

フェイトもエリオもキャロも、口や目つきは悪いがヴィータもさくらに対して優しかった。さくらは他人にそんな優しさを向けられたことはいなかった。いや、優しくしてくれた人はいた。さくらがそれを受け付けなかったのだ。なぜか。それはさくらが優しさは人を弱くすると思いついてしまったからだ。母のような強い剣士になりたいと思っているさくらにとって、身内以外の優しさは不必要だった。しかし、ルーシーに負けて自分の強さに懐疑的になった時、フェイト達の優しさは心身ともに傷ついた少女に癒しをもたらすものだった。だが、武道に生きる者にとって敗北して他者から受ける優しさは憐れみであり、それは屈辱以外の何物でもなかった。さくらは迷った。優しさに甘えるか否か。一旦それに甘えてしまったら、二度と武道家として再起できない気もする。とはいえ、左腕が無い以上はどっちにしても再起は不可能であり、だからこそさくらも一度はフェイトの優しさに甘えようとしていた。人見知りのさくらにとっても、フェイトは思い切って甘えられそうな女性であり、フェイトもそれを拒みはしないだろう。だが、普通の小学校5年生の女の子としての通常モードのさくらならフェイトの優しさを受け入れ

ることもできたが、いまの剣士モードのさくらにはどうしても前述した理由で受け入れることができない。剣士としての矜持か、それとも安息か。弱音も見せた。自分のおかれている状況に対する不満もぶつけた。差し出された手に自分の手を添えるだけで、さくらは孤独という不安や寂しさから解放される。それはとても魅力的なこと。だが……。

（やっぱりできない）

さくらはその手を拒むことにした。一度は極度に弱気になったせいもあって、フェイトにすがろうとしたさくらだったが、冷静さを取り戻すとそれはフェイト達を自分たちの戦いに巻き込むことになると気付いたのだ。さくらはルーシーがむやみに人を殺したりするような人間ではないと思っているが、絶対安全とは言いきれない。考え込むさくらを心配そうに見つめる3人。心底、さくらのことを氣遣っているのがわかる。さくらは決めた。関係の無い人を巻き込むべきではないと。

「すみませんフェイトさん、お願いがあるんですが」

もう迷いはなかった。さくらの真剣な表情にフェイトは彼女がなにか重要なことを決意したと悟った。

「グラムを私に返してください」

「えっ？」

フェイトは困惑した。魔剣のブローチを預かっていることを告げた時も、さくらは返却を要求しなかった。それで、てっきりフェイトはさくらが戦う意思を捨てたとばかり思っていた。前に、さくらがルーシーを許さないって言った時も、戦うまでは言わなかった。

「お願いします。フェイトさんたちとは戦わないって約束しますから」

さくらは懸命に訴えた。自分と一緒にいれば否応無しに巻き込むことになる。まだ、怪我は完治していないが動くことはできる。だが、フェイトは首を横に振った。フェイトはさくらの真剣な表情から、彼女がルーシーと決着をつけるつもりだと見抜いていた。しかし、さくらの現状ではそれは自殺行為に他ならなかった。

「それはできないよ。だって、君はルーシーと戦うつもりでしょ？」
「……」

さくらは返答しなかった。彼女にも勝ち目はないことぐらいわかっていて。だが、勝ち負けが問題ではなかった。敗北して重傷を負った直後とはいえ、極端に弱気になって誰かにすがろうとかばかり考えてしまっていた。落ち着きを取り戻すにつれ、それまでの反動がさくらに逃げちゃ駄目だとの意識を植え付けてしまった。ただ、それはルーシーを許せないからではなく、武道家としての意地からだった。真剣の眼差しを向けるさくらだが、フェイトは頑としてさくらの願いを受け付けない。魔剣のブローチはさくらのものだから返すのが筋だが、フェイトには危険物と判断された物を押収する権限が与えられている。カートリッジ無しでも既存のデバイスを大きく上回る攻撃力のバンパイアデバイスは、十分危険物に指定されてもおかしくない。

「どうしても返してくれないんですか？ それならそれでいいです。グラム無しでも私は戦います」

さくらはきっぱりと言った。その固い決意にフェイトは困った顔になった。エリオとキャロも同様で互いの顔を見合わせている。武器も無しにルーシーの前に出たら殺してくれと言っているようなものだ。さくらを強制的に管理局に連行することもできたが、フェイトはできるならさくらを説得して任意で同行させるようにしたかった。管理局に対して協力的ならさくらに対する処分も緩和されるからだ。また、さくらを管理局で保護すれば、いくら最強の魔導師と

言えども容易にさくらを襲うことはできないだろうという計算もあった。

「デバイスも持たずにどうするの？　いま戦っても勝てないことぐらい君にもわかるはずだよ」

「わかってます。もう、私は彼女には勝つことができない。こんな体だし、それに……」

途中まで言いかけて、さくらは言葉を切った。たとえ五体満足だったとしても、相手に対する恐怖心が先に立ってしまつて無意識に逃げ腰になってしまうだろうなんて言いたくなかったからだ。かといって、逃げ回るにしても逃げおおせる保証はなく、無関係な人たちを巻き込んでしまう恐れもある。フェイトはさくらを守ると言っている。その言葉に嘘はないとさくらは確信している。他人にそこまで親身になれる人は初めてだった。だからこそ、そんな優しい人たちを自分のために危険な目に遭わせたくなかった。

「……すみません。フェイトさんの言うとおりですね。我儘言つてごめんなさい」

「さくら？」

急にさくらの態度が変わったことにフェイトは訝しんだ。

「グラムはそちらにお預けします。私もおとなしくしています」

そうしてくれるとフェイトにしても助かる。だが、フェイトは引つかかるものを感じていた。

「本当にそれでいいんだね？」

フェイトの念押しにさくらはコクツと頷いた。

「すみません。ちょっと疲れしました。しばらく一人にしてくださいませんか？　エリオさんとキャロさんも今日はどうもありがとうございました」

した」

そう礼を言って頭を下げると、さくらはベッドに横になった。それは早く出て行ってくれとの意思表示に思えた。それがふてくされてのことだったらいが、フェイトはさくらが案外早く諦めたことに不安を抱いた。さくらがこのまま大人しくしているとはどうしても思えないのだ。だが、この病室は前のは違って病棟の真ん中ぐらいにあるため窓が無く、入口も当然一つしかないためその入口さえ見張っていれば脱出は不可能に近い。とりあえず、外に出て様子を見ることにした。

「エリオ、キャロ」

フェイトに声をかけられてエリオとキャロも外に出ることにした。キャロは心配そうにさくらを見ていたが、エリオに促されて後に続いた。誰もいなくなつたのを確認すると、さくらは換気口に目を向けた。

「なんとか、あそこに届かないかな」

さくらは台になりそうな物を探したが、小柄なさくらを天井まで上げてくれそうな物はなかった。それに下手に動かして音を立ててしまえばフェイト達に気付かれてしまう恐れがあった。さくらは時計を見た。そろそろ、昼食の時間だ。

「やっぱり、あの手しかないか」

所詮、人は一人では生きてはいけない。さくらは他人の力を借りることにした。少しして、看護師が昼食を運んできた。その看護師に声をかける。

「すみません」

「ん、なに？」

振り向いた看護師はさくらと目があつた。そして、何も言わずに

換気口の下に立った。

「ギリギリいけるかな」

さくらは看護師の肩の上にあがって、天井に手を伸ばした。換気口の蓋を外して音をたてないようにベッドの上にそっと投げた。蓋が布団の上に落ちたのを確認すると、さくらは看護師の肩の上からジャンプした。

「よっ」

換気口の中に入ったさくらは天井から病室のドアに目を向けた。ドアの向こう側には多分フェイト達がいるはずだ。彼女たちを欺いて脱走することに後ろめたい気持ちはある。

「さようなら、優しい人たち」

顔も合わせず一方的に別れの言葉を告げたさくらは、ふとある事に気づいて顔を緩ませた。

「そっか、私って人と話せるんだ」

他人といや身内とさえ自分の思いをぶつけて話したことはなかった。他人に対し積極的にアプローチできる剣道の稽古や試合の時もこれといって会話することは皆無だった。いまのさくらは、ルーシーと出会って以来ほとんど自意識を剣道している時の剣士タイプにしているの、他人に対する控えめな気分が少なくなっていた。普段の剣士タイプのさくらは、相手を倒すための攻撃性や冷酷性が表面に出ていたが、それが長時間続いたことで普段の生活をしている時の通常タイプの時の穏やかさがプラスされて、いつしか二つの性格がミックスされた形の第3の性格が形成されていたのだ。

そのさくらが予想したとおり、病室の外の廊下ではエリオとキャロが交代で見張っていた。仕事で本局に戻らなければならないフェイトに頼まれたのだ。病室から出てきた看護師にエリオは何か変わ

ったことはないか尋ねた。

「いいえ、特に何もありませんでしたよ」

看護師はそう答えて去って行った。嘘をついている様子もなかった。エリオは病室の中を確認しなかった。それから、少ししてキャラが袋をぶら下げて戻ってきた。

「あれ、もう交代の時間？」

「ううん、お昼を3人で食べようと思って売店で買ってきたの」と笑顔で言うキャラにエリオも頬を緩ませた。レフエントイシエルの草原で救出して以来、キャラはずっとさくらを気にかけていたのだ。かくいうエリオも気にならないこともない。というわけでドアをノック。反応なし。再度ノック。やはり反応なし。さすがに不審に思ったエリオがドアを開けると、そこには誰もいなかった。

「いない、なんで？」

「エリオくん、あそこ！」

キャラが天井の換気口を指差す。状況から判断するにあそこから脱走したのは明らかだ。しかし、先ほど部屋に入った看護師は何も異常はないと言っていた。

「とにかく探すんだ。僕は換気口の中を捜すから、キャラはフェイトさんに連絡してから外を探して」

「うん、わかった」

エリオが換気口の中に入って行くのを見届けると、キャラはフェイトに連絡をした。

「こちら、フェイト。どうしたのキャラ？」

「すみません、フェイトさん。あの娘に逃げられました」

キャラの報告にフェイトは耳を疑った。しかし、詳細を聞くにつ

れフェイトは自分がミスを犯したことに気付いた。エリオとキャロにさくらが人の心を操る能力を持っているかもしれないことを伝えてなかったのだ。

「ごめん、すぐに戻るからそれまでがんばって」

「はい」

通信が切れると、フェイトは車をＵターンさせて病院に急行した。手遅れにならないことを祈りながら。一方、さくらは換気口から出て他の者に見つからないように注意しながら病院の外に出た。だが、出たまではよかったが、その後どこに行けばいいかわからなかった。なにしろ、文字通り右も左もわからないからだ。

「とにかく、ここから離れないと」

さくらはタクシーやバスみたいなものがあるはずだ。だが、皆出払っているのか一台も見つからなかった。ぐずぐずしていると、自分が病室を抜け出したことが露見してしまう。いや、すでにバレているかもしれない。

「とりあえず病院の外に出よう」

外に出れば車の一台や二台は走っているはずだ。病院の服のまま外に出るのはちよつと抵抗があるがしょうがない。そこに、背後から声かけられた。

「待って！」

振り返ると病院の玄関にキャロが立っていた。思っていたよりも早く見つかったことにさくらは内心舌打ちしたが、キャロはあまり運動が得意そうに見えないから振り切って逃げることも可能かもしれない。が、キャロも魔導師なので油断はできない。

「どうして？ おとなしくするって言ったじゃない」

「あれは嘘です。すみません。でも、私は行かなければなりません。これは私たちの問題です」

だから他人は口も手も出さな。さくらはそう言っているのだが、キャロはもちろんそれで引き下がりはいしない。

「駄目だよ。絶対に駄目。だって、あなた死ぬつもりなんですよ？ そんなのは絶対に駄目！」

「心配しないでください。私だって死ぬのは嫌ですから。ただ、決着をつけに行くだけです」

その結果がどうなるか考えるまでもない。それでも、さくらは行く気でいた。優しい人たちを自分のために巻き添えになるのを防ぐために。

「皆さんには感謝しています。フェイトさんに伝えてください。ありがとうございます、そしてさようならと」

そう言って、さくらはキャロに背を向けた。キャロは追いかけてうとしたが、

「来ないで！」

さくらに一喝されてビクツとなって止まった。

「あなたとエリオさんには術を使いたくないんです。だから、動かないでください」

二人はさくらにとって命の恩人だ。だから、二人の心を侵すということはしたくなかった。

「ごめんなさい」

そう言い残して走り去るさくらを、キャロはただ眺めることしかできなかった。

登場人物2

特定危険組織対策特務部隊ストライカーズ

高町なのは

時空管理局のトップ・オブ・エースの空戦魔導師。教官をしていたが、ストライカーズの隊長に着任した八神はやての招集を受けて同部隊の前線指揮官となる。

フェイト・テストロッサ・ハラウン

管理局の腕利きの執務官。ロストログア・ディアスの探索を行っていたときに、さくらとルーシーに出会う。二人に過去の自分を重ねあわせて戦いを止めさせたいと思っている。なのはと同じくはやてに招かれてストライカーズの前線指揮官となる。

ティアナ・ランスター

フェイトと一緒にディアスの探索をしていた。なのはが新編されたストライカーズに入ったことを聞いて自らも志願して入った。

八神はやて

JS事件を解決したことで局内での評価が一変した有能な指揮官。その手腕を買われて特務部隊の指揮官を任される。その際に身内であるヴォルケンリッターと知己のなのはらを招集する。

アーサー・ヴァルスター

はやての副官。19歳。

ネイル・ストライク

前線メンバーの一人。狙撃を得意とする。デバイスはライフル型

のヴィット。魔導師ランクはA A A一。29歳。

マリア・バーク

前線メンバーの一人。接近戦を得意とする。デバイスはフォース。魔導師ランクはA A十。17歳。

ルナ・バーク

前線メンバーの一人。砲撃魔法を得意とする。デバイスはオルトロス。魔導師ランクはA A。17歳。

リン・アーク&メイ・アーク

通信スタッフで双子の姉妹。姉のリンは髪をストレートに、妹のメイはツインテールにしている。16歳。

メイ・サルサミル

整備担当。14歳。

武装宗教団体フォーサイズ（とりあえず名前だけ）

デュオ・サウザー

シャロン・グラデイス

サラ

第8話【虜囚の少女】？

さくらがいなくなって数日が経過した。フェイト達は懸命に搜索したが、その行方はつかめずにいた。さくらの安否を気遣いながら本局の通路を歩いていたフェイトは背後から呼びかけられても気付かなかった。

「フェイトちゃん！」

再度、呼びかけられてフェイトが振り向くと、親友の高町なのはが心配そうな顔で立っていた。

「どうしたの？ さっきからボーっとして」

「うん、ごめん。ちよっと考え事をしてたんだ」

「例のさくらって娘のこと？」

なのはもフェイトからさくらの事を聞かされていた。

「うん……」

さくらがいつルーシーと戦うかフェイトは気が気でなかった。本当なら、ここにこうしているよりもさくらを探しに行きたかった。さくらとルーシーの身柄の確保が任務なのだからそうすべきであったのだが、ついさっき違う任務に就くよう通達を受けたばかりだ。なのはもそのためにここに来ていたのである。いずれも管理局でも5本の指に入るとされる実力者である二人が、期間限定とはいえ同じチームに所属するということはそれだけ重要な任務ということだ。

「大丈夫だよ。きっと」

なのははそうフェイトを励ますが、そう判断できる根拠は何もない。だが、そう思い祈ることしかできないことも事実だった。こんなことなら、せめてデバイスを持たせてあげるべきだっただろうか。

よかれと思ったことが、ただの自分の考えを一方的に押し通したただけではなかったのか。もっと、さくらのことをわかってやるべきだったかもしれない。そうフェイトは自分を責めるしかなかった。

「フェイトちゃん」

そんなフェイトの肩に手をおいたなのは、フェイトが振り向くと首を横に振った。

「なのは……」

フェイトもなのはが言いたいことはわかっていた。これから重要な任務が待っているのに最初からしよげているわけにはいかない。フェイトは努めて笑顔で頷いた。しかし、それが無理してのことなのは誰が見ても明らかであった。

「行こ。はやてちゃんが待っているよ」

フェイトのことを誰よりもわかっているなのはそう促して二人で集合場所に向かった。はやてが指揮官に任命され、なのはやフェイトといった優秀な局員が集められた部隊その名もストライカーズは、現時点でもっとも凶悪な犯罪組織フォーサイズの実態把握と同一組織の壊滅を任務とする精鋭部隊である。部屋に入ると、すでにティアナが来ていた。

「ティアナ、もう来てたんだ」

「ええ、ひさしぶりになのはさんと同じチームになると聞いてはりきって来ちゃいました」

かつての部下であり教え子であるティアナはなのにとって心強い仲間だった。

「フェイトちゃんから聞いてるよ。がんばってるって」

「いえ、フェイトさんにはいつもご迷惑をおかけしています」

そのフェイトが元気が無い理由もティアナは知っていた。

「大丈夫ですよフェイトさん。あの娘は強いですから」

後輩に励まされてフェイトは少し自分が恥ずかしくなった。今回新たに編成された特定危険組織対策特務部隊ストライカーズの前線指揮官の一人になることが決まっている自分が、いつまでも落ち込んでいたら士気に関わる。搜索願いは出してあるし、クロノもユーノもエリオもキャロも捜すのに協力してくれている。何も心配することはない。

「そうだね。ごめん、ティアナにまで心配かけて」

「いえ、お気持ちはわかります。私もあの娘のこと心配ですから」

ティアナも小さい時に家族を失っているの、同じく家族を失ったさくらのことが気になっていたのだ。それはフェイトも一緒だった。だが、フェイトには新しい家族がいるし、ティアナも家族がいないものの、信頼できる上司や頼れる親友といった仲間がいるが、さくらには新しい家族も仲間も親友もないのだ。しかも、まったく知らない世界でたった一人でいることを思うとやはり心配にはなってくる。それと、例の預言。あの預言にさくらとルーシーが関係するかどうか、それと資格無き者とは誰を指しているのか、預言の『あらゆるすべては無に帰し新しき世界が誕生する』はいまのこの世界の消滅を意味しているのか、わからないことが多すぎる。しかし、いまは別のことを考える時だ。ドアが開いてヴィータとシグナムとシャルが入ってきて、それからやや遅れてはやてとリインフォースも入室した。

「皆、集まっとるか？」

はやては一同を見まわした。欠けているメンバーがいないことを確認すると、はやては自分の自己紹介と今回の任務について説明した。新部隊の任務それは武装宗教団体フォーサイズの壊滅である。

元々は傭兵を各世界の戦場に派遣していた団体だったのが、いつしか神の名のもとにという名目で破壊活動を繰り返すようになり、数ヶ月前からロストロギアのディアスの収集に乗り出した。当然、ロストロギアをめぐる時空管理局と頻繁に衝突することになり、いままでに多数の局員が死傷している。無論、あちらの損害も大きいのだが、どういうわけか数日前から彼らの動きがピタッと止まってしまったのだ。このまま大人しくしている連中ではないだけに、何かでかいことを企んでいると見た管理局は専門の精鋭部隊を新編することにしたのである。そのメンバーは、

部隊長…八神はやて二等陸佐

前線指揮官…高町なのは一等空尉

前線指揮官…フェイト・T・ハラオウン一尉（扱い）

前線指揮官補佐…シグナム二等空尉

前線指揮官補佐…ヴィータ三等空尉

前線メンバー…ネイル・ストライク三等陸尉

前線メンバー…ティアナ・ランスター三尉（扱い）

前線メンバー…マリア・バーク空曹長

前線メンバー…ルナ・バーク陸曹長

副官…アーサー・ヴァルスター三等陸尉

部隊長補佐…リインフォース？空曹長

通信スタッフ…リン・アーク陸曹

通信スタッフ…メイ・アーク陸曹

整備担当…メイ・サルサミル一等陸士

医療主任…シャマル医務官

特に役職なし…ザフィーラ

だいたいこの15+1名が基幹メンバーとなる。また、部隊の性質上、隊長らにかけられるリミッターは免除されている。

「皆も知っと思うけど、フォーサイズってのはけっこうな難敵

や。神さんのためなら死をも厭わないっちゅう連中やからな。氣引き締めていかなあかで！」

はやての檄に一同が「はい」と答えた。

「ええ、お返事や。そやけど、あんまり気張りすぎると体に悪いかな。無茶だけはしたらあかんよ。とりあえず、私からは以上や。あとは、副官の方からこれまでにわかっていることを言ってもらから。じゃ、アーサー頼むな」

「はい」

アーサー・ヴァルスターは頷くと、これまでにフォーサイズについて判明していることを説明した。

「先ほど部隊長の方から説明がありましたように、フォーサイズについてはその実態はほとんど掴めていませんでした。しかし、これまでの調査である新興の宗教団体が関係しているという疑惑が浮上しました。その団体の名はレッドコメート、教祖はこの男です」

モニターに銀色の仮面をつけた男が映し出される。

「この男の名はギルバート・ミハイル。生年月日、出身世界、家族、教祖になるまでの経歴が一切謎の男です。なぜ、仮面をつけるようになったかもわかりません。正体を隠すため、顔にひどい傷を負ったから、ただの衣装の一つにすぎない、いろいろ説はありますが。ギルバート・ミハイルという名前も恐らく本名ではないでしょう。次はこれをご覧ください」

今度はレッドコメートの本部があるビルがモニターに出た。アーサーは、この教団には局員が何人か潜入して内情を探っていたが、現在その誰とも連絡がつかず中には明らかに他殺とわかる状態で発見された者もいることを説明した。状況からして捜査対象の犯行であることはほぼ確実だ。

「だったら、さっさとその教団つてのに踏み込んで教祖とやらを捕まえたらいじゃねーか」

ヴィータが挙手して発言した。

「それが前に強制捜査をした時に何も出てこなかったことでそれ以降手が出しにくくなってしまったんです。この教団は慈善事業に力を入れてましてそれで市民の支持を集めているんですよ。メディアにも金を回しているようで迂闊には手を出せない状態になっています」

アーサーの説明によればレッドコメートについてはお手上げということだ。場がざわめく。なのはがざわめきを静めて質問する。

「何か手掛かりはないの？」

「あります。最新の情報なんですが、どうも彼らはゼクスというものを探しているようです」

「！」

フェイトがピクつと反応した。無論、アーサーはそれに気付かない。

「このゼクスについても詳細は一切不明です。現在、判明しているのはゼクスと呼ばれる存在はこの二人」

モニターにさくらとルーシーの映像が出る。

「木崎さくらとルーシー・ブランケットだけということです。フォーサイズがなぜこの二人の少女を探しているのかは今のところわかりませんが、他に有力な手掛かりがない現状では我々もこの二人の捜索に全力をあげたいと思います」

それを聞いてフェイトははやての方に顔を向けた。それに気付いたはやてはニコツと頷いた。はやてはフェイトがさくらを気兼ねなしに探せるようにしてくれたのだ。

「ありがとう、はやて」

親友の気遣いにフェイトは感謝した。だが、喜んでばかりもいられない。いまのさくらは普通の女の子にすぎない。フォーサイズに捕まる前に何としてでも保護しなければならない。逸るフェイトの気持ちを知ってか、再びはやてが前に出て隊員たちに檄を飛ばして締めくくった。

「ええか、これだけは覚えといて。私らは軍隊やない。味方は勿論、敵にも決して死人は出したらあかんよ。私からは以上や。解散」
はやての敬礼に隊員たちが一斉に返礼して解散となった。フェイトはさくらを探しにすぐにでも飛び出して行きたかったが、その前にシャリオから通信が入った。

「フェイトさん、大変です！」
モニターのシャリオはひどくあわてていた。

「どうしたの？ シャーリー」
何かあったらしい。フェイトは嫌な予感がした。なのはやティアナたちも不安げな顔をしている。

「さくらが見つかりました！」
それは喜ぶべき情報だった。だが、フェイトがホッとするのも束の間、シャリオはさくらが重傷を負っていることを告げた。意識不明だという。

「そんな……」
フェイトはガクツと両膝を床についた。そのまま前に倒れそうになるのをなのはが支えた。

「大丈夫？ フェイトちゃん」

「うん、大丈夫だよ」

そう答えるものの、やはりショックは大きかった。間に合わなかったという自責の念。だが、まださくらが死んだわけではない。まだ、間に合うかもしれない。はやてが指示を飛ばす。

「フェイト隊長はすぐに行って、その娘の安全を確保してんか。事情はようわからんけど、もしフォーサイズに襲われたとしたらまた狙われるかもしれへん。ヴィータとティアナも一緒に行ったってくれへんか？」

「ああ、任せてくれ」「はい」

「他の前線メンバーはもう一人のルーシーって娘の搜索や。結構な強敵らしいからな、十分に注意せやあかんで！」

隊員たちは一斉に「はい」と返答した。

第8・5話【虜囚の少女】？

薄暗い部屋の中。ルーシーは椅子に縛り付けられていた。身動きできないルーシーを取り囲む者たち。彼らはフォーサイズのメンバーだ。

（ゼクエスの力さえ使えたら……）

悔しがるルーシーだが、前の戦いでさくらに左目を斬りつけられたため相手の記憶を自由に書き換えられる能力を失ってしまったのだ。いまのルーシーの左目には海賊がするような眼帯があった。左側の視野が狭まったルーシーはその隙を突かれてこうした不覚を取る羽目になったのだ。

「私をどうする気？」

ルーシーは黒い牧師風の服を着た男デュオに尋ねた。このデュオが部下をルーシーに戦わせている隙に彼女の死角から攻撃して捕獲したのだ。もし、左目が機能していたら今頃はデュオも首か胴体を両断された屍をさらしていたはずだ。そのことをデュオは知らない。つい最近までゼクエスを知らなかったデュオにとってルーシーはこれらの少女と変わりなかった。さすがに100人連れていた部下が半分以上も殺されたのには声を失ったが。

「そいつは俺が知った事じゃねーな。俺は命令されてお前さんを捕まえただけだからな」

「なぜ私を？」

「それは後から来る奴に聞いてくれ。もう来ると思うんだけどな。あ、来た来た」

少しして銀色の仮面をつけた人間が姿を現した。ルーシーはその人間に見覚えがあった。確か、雑誌に載っていた新興宗教の教祖だ。

なぜ、そんな男が？ その疑問に当人が答えた。

「その顔を見ると俺のことを知っているようだな。だが、いまの俺はお前が知っている俺ではない。レッドコメートの教祖というのは仮の姿だからな」

「じゃ、いまのあなたは何者なの？」

「いまの俺か？ お前はフォーサイズのことを知っていたようだが、そのリーダーのことは知るまい。俺がフォーサイズのリーダー、ダニエル・ジャッカルだ」
「えっ？」

相手が自分の正体をあっさりと明かしたことにルーシーは正直戸惑った。フォーサイズのリーダーは外部の人間には決して姿を見せないことを知っていたからだ。訝しげに見るルーシーにジャッカルはなぜ彼女をここに連れてきたかを説明した。

「ゼクエスの帝王候補であるお前には是非ともフォーサイズのメンバーになってほしくてな。多少、手荒な真似をしてしまったが来てもらったというわけだ」

「なんですって？」

「最強の魔導師といわれるゼクエスの帝王が味方になれば世界は我々の支配下になったも同然だからな」

それを聞いてルーシーは内心呆れてしまった。いまどき、世界征服とは何とも大時代的な…。

「あなた、いくらゼクエスの帝王が世界最強だからってそれで世界を征服できるって本気で思っているの？」

「何にも知らんのはお前の方だ。ゼクエスの帝王にはすべての次元世界を滅ぼす力があると言い伝えられているのだ」

「まさか、そんな…」

ルーシーは本気にしなかった。だが、ジャッカルの言っているこ

とが本当であつても嘘であつてもルーシーには彼らの仲間になるつもりは全くなかった。

（ハルバードさえ手元にあつたら……）

簡単に脱出できるのに。部屋にいるのは全部で14人。魔槍の一振りで簡単に薙ぎ払える。14人のうち、まともなのはジャッカルとデュオのみで、あとはまともな思考能力を持たない動く人形のようなものだ。彼らも元々は普通の人間だった。それを薬物や催眠術などで命令を忠実に遂行する兵士に仕立て上げたのだ。

（人間をこんな風にするなんて）

ルーシーは前にフォーサイズの兵士と戦ったことがあった。2年前だ。感情を持たない彼らは銃を捨て投降の意思を示した者や何の関係もない非戦闘員を容赦なく殺戮していった。あの時の彼らの顔をルーシーは忘れたことはなかった。だから、彼らに襲われているさくらを助けた時にすぐにフォーサイズとわかったのだ。

「悪いけど、あなたたちの仲間になるつもりはないわ」

「嫌でもなつてもらうつもりだがこっちは」

「無駄よ。あなたがどうやって人間を洗脳しているか知らないけど私には通用しないわよ」

「それはどうかな？」

そう余裕こいてジャッカルが取りだしたのはディアスだった。どうやら、それでルーシーを洗脳するつもりらしい。自分の能力で駄目ならロストロギアということか。普通の人間なら確実に落とせるだろうが、ルーシーにはそうはいかない。

「そんなので私の心を射止められるとも思っているの？」

ちゃんちゃらおかしいとばかりに吐き捨てるルーシーだが、そんなことはジャッカルも承知の上だ。しかし、1個では駄目でもたく

さんならどうだろうか。ディアスが1個ずつ床に置かれて行くにつれ、ルーシーの表情も徐々に強張っていった。彼らがディアスを集めていたことは知っていたが、よくぞここまで集めたものだ。全部で25個。短期間でしかも管理・管理外問わずあっちこっちの次元世界に散らばってしまっているディアスを半分以上も集めたことは並大抵の努力ではなかったろう。ルーシーの反応を見て満足げな笑みを浮かべたジャッカルは、床に並べたディアスを一ヶ所に重ねていった。

「まさか……」

ジャッカルがこれからやろうとしていることに気付いたルーシーは息を呑んだ。その予想通りジャッカルが呪文を唱えると何とディアスが一つに合わさったのだ。元々、ディアス是一つだったのが49個に分けられたもので、それらが合わさっていくのは何の不思議もない。しかし、

「あなた、わかっているの？ ディアスを1回でも合体させたらもう二度と完全な形にはならないのよ」

ルーシーが指摘したように、ディアスを元の一つの形に修復するには破片を全部集めてから合わせていく作業にとりかからなければならぬ。なぜ、全部集めてからだと言うと、ディアスは1回合体してしまってもう他の破片とは合わさないので。例えば、いまジャッカルが一つにまとめたディアスはもう他のディアスとは絶対に合体できないのである。当然、そのことはジャッカルも知っている。

「そんなことぐらいは言われなくてもわかっている。俺も初めはディアスを全部集めるつもりだった。だが、いままでは比較的大きな破片だったから発見するのも容易かったが、豆粒みたいな破片もあるようだしな。そんなのを探しまわって拾い集めるのにいったい何年かかると思う？」

海の真ん中に落とした指輪を探すぐらいの労苦と年月は必要になるだろう。運が良ければすぐに見つけることもできるだろうが、運が悪ければ次の世代にということにもなりかねない。どっちかといえば短気の部類に入るジャッカルはそんな悠長な事を言うつもりはなかった。そんな時に、ゼクエスの魔闘士が実在するという情報が飛び込んできた。

「俺も神話の類でしか聞いたことがなかったから、実在するなんて考えもしなかったさ。だが、こうしてお前がいる以上、もうディアスなど必要ない」

「どうということ？」

「お前はどうかやらゼクエスのことを何も知らんようだな。ゼクエスの帝王には二つの大きな力があると言われている。すべてを滅ぼす力とすべてを支配する力。そんなとんでもない奴をこのディアスで意のままにしたら俺が世界の支配者になるのだ」

「そんなこと……」

強がりを言いたいルーシーだが、25個分のディアスによる洗脳に耐えられるかどうか自分でもわからなかった。しかし、絶対に奴らの思うがままにだけはできない。だが、ひとつにまとまったディアスは見ているだけで心を奪われそうになる。ルーシーは顔を背けるが、ジャッカルはそれを許さない。

「おい」

部下に命じてルーシーの頭を抑えさせ目を閉じないようにさせる。

「無駄な抵抗はよすんだな。お前には俺の操り人形になるしか道はない」

ジャッカルは勝ち誇るが、ルーシーは驚異的な粘りを見せた。ディアスの破片1個だけでも人は簡単に魅了されてしまうというのに、ディアスには人間を魅了する性質があるのだ。それをうまくこと工

夫すること魅了された人間を意のままにすることができるのである。とはいえ、ルーシーは見た目こそ人間だが、体内の細胞や血液は人間のものではない。ジャッカルもゼクススの魔闘士にディアスは通用しないのではという危惧を抱いていた。そこで、悩んだ末にいままで苦勞して（実際に汗を流したのは部下だが）集めたディアスをひとつにまとめてパワーをアップさせたのである。さすがのルーシーも25個分のディアスに心を奪われそうになるが、必死になって耐え続けた。

「ちっ、しぶとい小娘だ」

ルーシーの粘りにジャッカルは舌打ちした。だが、まだ余裕のよっちゃんだった。ルーシーはかなりきつそうだし、よしんば耐え抜いたとしてもジャッカルはそれを想定した手をちゃんと考えていた。一方、ルーシーにはただひたすら耐えるしか手はなかった。

（少しでも気を抜いたら落ちてしまう……）

ディアスの輝きの美しさに心を奪われそうになるのを必死に抑えつける。ただそれだけなら誰にでもできる。問題はいつまで耐えられるかである。5分も耐えられたらよくやった方だと言えるだろう。だが、ルーシーは1時間以上も耐え続けたのである。それがゼクススの帝王候補だからなのか、それともルーシーの持って生まれたものなのかはわからないが、恐るべき精神力だ。しかし、ルーシーにとっては地獄だった。いつまで耐えたらいいのかわからないからだ。ディアスも永遠ではない。輝きが消える時は絶対に来る。それがいつなのかかわからないのが辛いところだ。

「へー、結構がんばるもんだねえ」

デュオが感心したように言う。ルーシーが汗だくで息も絶え絶えになって耐えているのを面白がって見ているのだ。

「まったくだ。俺もまさかここまで耐えるとは思っていなかった」
ルーシーの粘りに二人は感心しきりだ。このままではルーシーよりもディアスの方が限界に達してしまうかもしれない。万が一にもそうなってしまうたら、もう取り返しはつかない。そうは滅多に有り得ないから万が一なのだが、決してゼロではない。なので、ジャッカルは万が一を想定した手も考えていた。そして、ついにその万が一が起きてしまった。ディアスの輝きが失せてパリーンと割れてしまったのだ。

「やった……」

耐えきったことにルーシーは安堵した。ゼクエスの帝王候補を魅了するにはパワー不足だったようだ。しかし、ジャッカルは余裕の笑みを浮かべていた。ルーシーはそれに気付かない。かなり精神的に疲弊しているからだ。実は先ほどのジャッカルとデュオの会話も聞こえてなかったりする。

「さすがだな。まさかディアスを使って心を操れぬ奴がいたとはないやいやお手上げだ」

とジャッカルは余裕顔で言う。なんで、そんなに余裕をかませるのか疑問に思うところだが、いまのルーシーには素直に敗北宣言と受け取ることができた。それはルーシーが完全に気を抜いているからだ。もうディアスは消滅したと思いついでいるのがジャッカルを狙いだった。実は、ジャッカルはまだディアスを二つ持っていたのである。その二つを一つに合体させる。ルーシーは俯いていてそれに気付かない。完全に油断している状態である。

（全部、俺の思惑どおりだな）

最初からディアスを全部ぶつけてしまうのもありとも思ったが、さっきの状況から鑑みるに二つぐらい加えたところで結果は同じだっただろう。また、ルーシーが余裕ある状態で耐えてしまっても困

る。一回目でルーシーが落ちててもよし、耐えきっても精神が極度に疲弊していたらそれでもよし。ジャツカルはディアスをルーシーの顔の前に持っていた。輝きだしたディアスに目をむけたルーシーはそれがさっきまで自分を苦しめたのと同じ物であることに一瞬気付かなかった。

「……！」

気付いた時にはもう遅かった。ルーシーは完全に不意を突かれた。

「くっ……」

ディアスの輝きに惹かれそうになるのを懸命に堪えようとするルーシーだが、疲弊しているうえに不意を突かれては些細な抵抗でしかなかった。どんなに強固な堤防も時にはほんの小さな亀裂が原因で決壊する。ルーシーは自分がディアスの光に吸い寄せられていくかのような感覚に襲われた。

「い、いやよ……いや……」

ルーシーは必死に自分を引き戻そうとするが、どんなに泣き叫んでも結局は注射されてしまう子供のように無駄な足掻きだった。徐々に抵抗する意力も失せてルーシーはうっとりとしてディアスに見惚れるようになった。こうなっては、もうルーシーに抵抗する術はなかった。自分の頭を抑えつけていた手が離されても、ルーシーはディアスから目をそらすことができなくなった。

「きれい……」

すっかりディアスに心を奪われてしまったルーシーに、ジャツカルは笑いを堪えることができなかった。

「ふふふふふっ、ついにゼクエスの帝王候補を手中におさめることができた。これで、もう一人の小娘を殺してこいつが帝王になっ

たら世界は俺の思うがままになるということだ」

そう思うと笑いがおさえられないのも無理はない。ジャツカルはデュオの方を向き、

「おい、もう一人の方は管理局が保護したんだな？」

「ああ、シャロンが側にいるらしい」

幹部のシャロンからさくらが管理局の地上本部に保護されている情報が入ったのはついさっきだった。

「よし、ついでに邪魔な管理局も潰しておくとするか。全員を集める。明後日に地上本部に総攻撃をかけるぞ」

地上本部が崩壊した時が自分が世界の支配者となる時である。そう思うと、また笑いが抑えきれなくなるのだった。

第9話【ゼクエスの脅威】？

さくらは逃げ回っていた。無数の人間の首が飛びまわってさくらに襲いかかってくるのだ。必死に逃げ回るが、それらは執拗に追いかけてくる。そして、ついにさくらは取り囲まれてしまった。眼前に迫る首にさくらの顔はひきつる。それらが大きく口を開けてさくらに噛みつきこうとした時、さくらは目を覚ました。

「ハア、ハア……」

さくらが最初に目にしたのは天井だった。さっきのが悪い夢だったことに安堵したさくらは気分が落ち着くとポツリとつぶやいた。

「また：知らない天井だ……」

この世界に来て以来、知っている天井など一つもないのだが。

「どこだろう、ここ……」

見た感じ病室みたいだが、なんでこんなところにいるのだろう。いまのさくらは包帯とガーゼだらけの怪我人だ。怪我人が病院にいるのは不自然ではない。しかし、一体だれがさくらを病院に運んだのか。いきなり、わけわかんない連中に襲われて、必死に応戦するも多勢に無勢で立てないぐらいに痛めつけられてしまったところにルーシーが現れたのだ。

「どうして、彼女が……」

前の病院に入院していた時から、さくらはルーシーが同じ世界にいるような気がしていた。それはやがて確信へと変わったが、ならばなぜルーシーは攻撃してこないのか。自分の近くにフェイト達がいるからと判断したさくらはルーシーと決着をつけるために病院を飛び出したのだ。ところが、一人になったというのに、いつになっ

てもルーシーが現れない。なかなか現れないので、ルーシーがこの世界にいるのは単なる思いすごしではとさくらは心配になってきた。今更、フェイト達のところへは戻れない。途方に暮れていたところをわけわからん連中に襲われたというわけだ。そこにルーシーが現れたのだが、どういうわけかルーシーはさくらではなく、正体不明の連中と戦い出したのだ。その時の光景はまさに凄惨を極めていた。謎の連中は何十人もいたが、ルーシーの敵ではなかった。次々とルーシーの魔槍によって首を刎ねられたり、胸を斬られて大量に血が噴き出したり、腹を裂かれて内臓が地面にこぼれ落ちたりしたのである。そうして飛ばされた首が自分のところに転がりこんできたのを目の当たりにして、さくらは氣を失ったというわけだ。さっきの悪夢の原因がそれなのだ。それはさておき、ルーシーがなぜあの状況で現れたのか、さくらにはわからなかった。よっぽどあの連中が嫌いなのか。そもそも、あの連中とどういう関係があるのか。誰が自分を病院に運んでくれたのか。ってか、どうして自分は生きているのか。どっちかが勝っても、さくらは勝った方に殺されているはずである。

「わかんない：何がどうなっているのか」

さくらは不安でしやうがなかった。自分がいまいる場所もわからない。病室みたいな部屋だが、もしかしたら何かの研究施設かもしれない。数千年に一度しか現れないゼクエスの帝王候補は格好の研究対象だ。最悪、解剖されてホルマリン漬けにされるかもしれない。

「ど、どうしよう……」

逃げようにも右手にギプスがしてあってドアノブを回すことができない。右目に眼帯がしてあるからゼクエスの術も使えない。左腕はとつくに無くなっているから、転んでしまっても容易に立ち上がることもしできない。逃げることにすら叶わぬ現状に余計不安になったさくらは不意にドアがコンコンされたことでビクツとなってしまっ

た。ゆっくりと開くドアを固唾を吞んで見ていたさくらは、現れた人物を確認すると拍子抜けしたような声を出した。

「先生？」

入ってきたのは前の病院でさくらを担当していた女医だった。

「気がついたようね」

頭が混乱しているさくらは女医は穏やかにほほ笑んだ。反対にさくらは笑っていらなかった。

「どうして先生がここに？　ここって……」

「ここは管理局地上本部の医務室よ。あなたは最初はうちの病院に運ばれたんだけど、あそこじゃ危険だっていうことで、ここに移送したのよ」

で、女医は前にさくらを診たことがあるということで特別に来てもらったということだ。なにしろ、ゼクススの帝王候補の体を診たことがあるのは彼女だけなのだ。それに人見知りするさくらには知っている人の方がいいというフェイトの判断もあった。

「あの、誰が私を助けてくれたんですか？」

ルーシーやあの連中からさくらを助けるにはかなりの危険があったはずだ。誰も巻き込みたくないと思っていたのに。しかし、女医が教えてくれた事実にはさくらは耳を疑った。

「あなたは、うちの病院の近くの住宅街にある公園の前の道路で倒れていたのを通行人に発見されたのよ」

「えっ？」

それはありえないことだ。なぜなら、さくらは襲われた時あの病院から遠く離れた場所にいたからだ。一体何がどうなっているのか、ますますわからなくなってくる。そんなさくらに女医は少し落ち着

くように言う。

「もう安全なんだから安心なさい。あ、それからテストロッサ執務官が事情をお聞きになりたいそうだけどどうする？ 体調がすぐれないなら後にしてもらう？」

「フェイトさんが？ いえ、私は構いません」

「そう、じゃ入ってもらおうね」

女医が合図すると、フェイトが病室に入ってきた。それと入れ替わりに女医は外に出た。

「どう？ 体の具合は」

「大丈夫です。すみません、心配をおかけして……」

さくらはフェイトに怒られると思って項垂れた。勝手にいなくなっってしまったからだ。

「本当、心配したんだよ。でも、無事でよかった」

「フェイトさん……」

怒られると思っていたさくらは逆に優しくされたことに、余計にフェイトに悪いことしたと反省した。

「ごめんなさい……私……」

「もういい。あなたが無事ならそれでいい。でも、これだけは約束して。もう、勝手にいなくならないって」

「……はい」

さくらが頷くのを見てフェイトは安心した。よほど怖い目にあっただろう。さくらはすっかり戦意を失っているように見えた。

「一体、何があったの？」

「私にもわかりません。いきなり知らない人たちに襲われて……」

さくらは自分が襲われた状況をフェイトに伝えた。

「ねえさくら、その襲ってきた人たちにこんなマークついてなかった？」

話の内容でさくらを襲ったのはフォーサイズと判断したフェイトはさくらにフォーサイズのマークを見せた。

「はい、ありました」

「そう、やっぱり」

「やっぱりって、フェイトさんはあの人たちが誰か知っているんですか？」

自分を襲ったあの奇妙な連中。さくらはそれがフォーサイズという組織のメンバーで、理由は不明だがゼクエスの帝王候補を狙っていることを聞かされた。

「ゼクエスわたしたちの帝王候補を？」

自分たちが狙われていると知ったさくらは、ルーシーの事が心配になってきた。ルーシーなら心配ないと思うが、何か嫌な予感がしてきた。

（どうしよう、ブランケットさんのこと言った方がいいかな？）

さくらはルーシーの事をフェイトには伝えていない。話がややこしくなりそうだから、あえて伏せておいたのだが、さくらはルーシーのことをフェイトに言うか迷った。言うなら早いうちがいい。

「あ、あの……」

ルーシーのことを伝えようとしたさくらだったが、ふと良からぬ考えが浮かんた。

（もし、フォーサイズっていう人たちに彼女が殺されたら……）
そうなれば、その時点でさくらがゼクエスの帝王となる。さくら

は自分が帝王になる可能性は無くなったと思っていた。だが、もしルーシーが他の誰かに殺されることにでもなれば……。ゼクススの帝王はなんでも思いのまま。さくらは魔女からそう聞かされた。

（そうだ。別に言わなくたって、どうせあの子も敵なんだし……）
さくらは言わないことにした。敵同士が勝手につぶし合ってくれるのだ。敵……。

（待って、どうして彼女はあの時出てきたの）
あの時、黙ってみていたらさくらはフォーサイズに殺されていた。ルーシーがわざわざ出てくる必要はまったく無かったはずだ。しかも、ルーシーはさくらには攻撃してこなかった。

（どうして……）
さくらの中にある仮説が浮上した。

（ひょっとして、私を助けに来てくれた？）
そう考えたら、さっきの疑問も解ける。そうなら、さくらを前の病院の近くに転送させたのもルーシーだろう。

（でも、どうして……）
ルーシーの意図を図りかねぬさくらだったが、もし本当に自分を助けてくれたとしたら放っておくわけにはいかなかった。さくらはルーシーのことをフェイトに伝えた。

「ルーシーが？」
「わかりません。私を助けてくれたかどうかは」
さくらは今一つ確信が持てなかった。ルーシーが敵であるさくらを助ける理由がわからないからだ。ルーシーは左目に海賊がしているような黒い眼帯をしていたが、その左目を斬りつけたのはさくら

である。自分の顔を傷つけたさくらを助ける道理などあるのだろうか。ましてや、さくらが死なないかぎりルーシーはゼクスエスの帝王にはなれないのだ。

「とにかくルーシーを探さない」と

ルーシーがそう簡単にやられるとはフェイトも思っていないが、フォーサイズは得体のしれない組織である。さくらに何の異常も見られないということは、ルーシーがまだ生きているという証であり、もしフォーサイズに捕まっているとしたら早急に救出しなければならぬ。

「さくらはここにいて。いい？ 絶対に抜けだしたりしたら駄目だよ」

「はい……」

別に言い聞かせなくても、さくらは動くこともままならない。幸い、足には大きな怪我はないものの腰から上は散々に痛めつけられてしまった。出血もかなりひどく、普通なら死んでいたところだったが、さくらはリーガル・コアから絶えず血液を供給されており、供給量を超えるような出血をしないかぎり出血多量で死ぬことは無い。しかし、肉体へのダメージを低減させるまでの効果はなく、さくらは嫌でもベッドで大人しくしているしかなかった。それは、襲われた時に逃げることもできないということだ。

「……」

さくらは不安げな顔でフェイトを見た。ルーシーのことも気がかりだが、さくらにはフェイトしか頼れる人はいなかった。その子犬のような目で自分を見るさくらにフェイトは母性本能をくすぐられるが、彼女は行かなければならなかった。

「大丈夫だよ、さくら。ここにいたら皆が君を守ってくれるから。」

何かあったら私もすぐに戻るから」

「フェイトさん……」

さくらもフェイトがいつまでも自分に構っているわけにはいかな
いことぐらい理解していた。

「わかりました。私は大丈夫です。行ってください」

「いい子だね」

フェイトはさくらの頭をなでると外に出た。病室の外にはヴィー
タとティアナとシャリオが待っていた。フェイトは3人に指示を出
した。

「ヴィータは私についてきて。ティアナとシャリーはここに残っ
て、さくらをお願い」

「わかった」「はい」「はい」

3人は同時に返事した。フェイトはヴィータといったん指揮所に
もどることにしたが、それをシャリオが呼び止めた。

「すみません、フェイトさん。あの娘のデバイスはどうします？

ここに持ってきておいた方がいいですかね」

さくらのデバイスは管理局が厳重に保管してある。もし、フォー
サイズがここを襲撃してきた場合、さくらの安全のためにも最低限
己が身を守る装備を持たせるべきではないだろうか。しかし、フ
ェイトは首を横に振った。

「いまのさくらに戦闘は無理だよシャリー。それに、さくらには
もう戦ってほしくないんだ」

それはフェイトの切な願いだった。シャリオもその気持ちはわか
るからそれ以上は何も言わなかった。

「じゃ、お願いね」

フェイトとヴィータは指揮所に戻ったが、残ったティアナとシャリオには厄介な問題があった。未だにさくらの人見知りが直っていないのだ。ティアナにもシャリオにも会ったことがあるというのに、まだ態度に硬さがあった。それならと、シャリオはエリオとキャロに来てもらうことにした。自分とほぼ同世代が相手ならさくらも話しやすいだろうからだ。エリオたちが来たのはちょうど正午を過ぎた頃だった。

「はい、あーん」

キャロがスープの入ったスプーンをさくらの口に持っていく。さくらは右手にギプスがしてあるため、一人では食事ができない。いまは、昼食の時間で部屋にいるのはさくらとエリオとキャロの3人だけである。

「すみません」

さくらは申し訳なさそうにスプーンを口に入れた。さくらがすまなさそうにしているのは、食べ物をお口に運んでくれているからだけではない。前の病院から逃げ出したことで、キャロとエリオに多大な迷惑をかけていると思ったからだ。

（それなのにこの人たちは私に優しくしてくれている）

この人たちに優しくされる資格は無いのにと思いながら、さくらはキャロがスプーンやフォークで運んでくれる食べ物を口に入れていった。食事中は会話をほとんどしないさくらは、もくもくと食べ続けていたが、ピーマンが運ばれてくると口を閉じた。

「どうしたの？」

「私、ピーマン嫌いです」

「あ、ごめんね」

キャロはフォークを戻そうとしたが、エリオがそれを制止した。

「駄目だよ。ちゃんと食べないと」

エリオに注意され、さくらは渋々ピーマンを口に入れた。本当は嫌なのだが、この二人には迷惑をかけたという負い目があるから逆らいにくかった。いままでは、祖父がさくらに甘かったこともあり嫌いな物を口にすることはなかった。同年齢の子供に比べて小柄なものもそれが原因だろう。それでも、どうにかさくらは嫌いな物も含めて出された昼食を食べることができた。手は使えないから他人に口まで食べ物を持って行ってもらうのは、まるで餌付けみたいだなど思うわけだがそれはしょうがないことだった。

「じゃ、僕は食器を持っていくから」

「すみません。ありがとうございます」

空になった食器を持っていくエリオに礼を言うさくらに、キャロは前から気になっていたことを訊いた。

「さくらさんはどうして私とエリオ君にそんなに敬語なの？」

年齢はさほど違うはずである。しかし、さくらはヴィータの例もあり、見た目で相手の年齢を判断しないことにしていた。それに、さくらがいた世界では自然保護隊員に子供がなることはなかった。故に、さくらはエリオとキャロを自分よりも少なくとも7年以上と判断していた。だから、キャロがなぜそんなこと訊いてくるのかわからなかった。

「目上の人に敬語を使うのは当然だと思いますが？」

エリオやキャロだってフェイトに対して敬語ではないか。だが、キャロはさくらが自分とエリオをかなり年上と誤解していることに気付いてなかった。もつとも、キャロもさくらの年齢を知るまでは実年齢よりも年少と誤解していた。

「んー、まあ、そうだけど……」

目上と言っても1、2歳ぐらいしか違わない。それでも、キャラロの方が先輩であることに違いはない。しかし、キャラロはさくらと人生の先輩・後輩という関係よりも友達という間柄でいたかった。

（友達になりたい）

キャラロにとって友達は自然にできてきた。自分から相手に友達になつてと言ったことはほとんどなかった。自然と仲良くなって、いつの間にか友達という関係になつていた。出会った当初は敵だった相手とも、交流を重ねて友達となった。だから、さくらとも友達になれると思っていた。だが、さくらは周囲と明らかに一線を引いていた。他人と親しくなるのを避けているという印象をキャラロは受けていた。その反面、フェイトにすがろうとする一面もある。なぜ、フェイトなのだろうか。確かに、強くてやさしい女性ではある。だが、キャラロはそれだけではないように思えた。

「ねえ……」

もつと、さくらのことを知りたい。そう思い、キャラロが話しかけようとした時だった。いきなり、爆発音が響いて建物が大きく揺れた。

「うっ」

揺れでさくらの体に痛みが走った。

「だ、大丈夫？」

キャラロは声をかけるが、さくらの傷はまだ完全にふさがっていない。下手すれば、傷口が開く恐れがあった。そこへ、ティアナから通信が入った。

「エリオ、キャラロ、聞こえる？」

「はい」

「はい、聞こえます。ティアナさん。何があったんですか？」

「まだ、わからないけど、外部から魔法攻撃を受けたのは確実ね。多分、フォーサイズだと思う。あんたたちは大至急、さくらを連れてフェイトさんたちと合流して。ここは、私が防ぐから」

「で、でも…」

エリオは躊躇した。ティアナ一人でフォーサイズを相手にするのは厳しいだろう。自分も残って援護すべきではないだろうか。

「私は大丈夫。奴らの狙いがさくらなら、絶対に渡すわけにはいかない。いいから行きなさい」

「でも、ティアナさん一人じゃ…」

「ここをどこだと思っているの。私以外にも戦える局員はいっぱいいるんだから。私のことは心配しなくていいから。それとも、私のことを見くびっているわけ？」

「いえ、わかりました。さくらを連れてフェイトさんと合流します」

「頼んだわよ」

通信が切れた。

「エリオくん……」

キャロが心配そうにエリオを見る。キャロもフォーサイズがかなり危険な集団であることは知っていた。

「大丈夫だよ。僕たちは早くさくらを連れてフェイトさんと合流するんだ」

「うん……」

ティアナのことも心配だが、いまはさくらの身の安全を確保するのが先決だ。だが、さくらは迂闊に動かせない状態だ。ベッドのまま移動するしかない。そこへ、女医が現れた。

「大丈夫？　ここは危険よ。早く移動しないと」

さくらが心配で来てくれたみたいだ。彼女がいてくれたら、さくらの体に異変があった時に速やかに対処してくれるのでエリオとキヤロも安心できる。二人は前の病院でこの女医と会っているのだから安心して。それで、無警戒に背中を見せてしまっていた。油断していたのは、さくらも一緒だった。ルーシーと死闘を繰り広げていた頃のさくらなら、女医に対して警戒を解くこともなかっただろう。この時点で3人とも、女医に対して無警戒であり、無防備であった。

（やるならいまね）

女医は3人が完全に自分を警戒していないと見るや、速やかにエリオとキヤロを背後から攻撃して気絶させた。二人が急にベッドに倒れこんだことに、さくらは何が起こったか瞬時に理解できなかった。

「何が……？」

あったのかと考えられるのは一つしかない。

「先生……」

状況からして、女医が二人を気絶させたとか考えられない。

「どうして……」

「こんなことをするかと訊かれたら、こう答えるしかないわね。これが私の任務よ」

「任務？」

「そう、私と一緒に来てもらうわよ」

女医は怯えているさくらの頬にそっと手をあてた。

「あなたは……」

「私の本当の名はシャロン・グラデイス。フォーサイズの幹部の一

人よ」

「なっ？」

主治医として何ら疑いを持たなかった人間が、自分を襲った一味の幹部だったことにさくらは動揺した。

「あなたを待っている人があるの。行きたくなくても来てもらおうわよ。黒の帝王^{おひめさま}候補？」

さくらには抵抗する術がなかった。

第9・3話【ゼクエスの脅威】？

突如、襲撃を受けた地上本部は大混乱に陥った。見た目はJS事件による損害から復旧した地上本部だったが、その実態は早期警戒システムなどが未だ機能を回復していなかった。これはゲイズ派の失脚による管理局内における地上部隊の地位の低下も影響しているとされる。。それでも、不意打ちこそ許したものの素早く迎撃態勢を整えることには成功した。だが、攻撃してくるフォーサイズの兵は多く、地上本部の守備隊は苦戦を強いられた。

地上部隊が苦戦しているのは敵の数が多いからだけではなかった。管理局はあくまで治安組織にすぎないので対象を生きて捕縛しようとする。そのため、対象を気絶させる以上のダメージを負わせる攻撃は原則としてしない。だが、フォーサイズの兵は気絶しても体に装着した機器からの電気ショックで目を覚まして立ち上がってくるのである。彼らを止めるには完全に息の根を止めるしかないが、相手の命を奪うことを前提とした戦闘訓練を管理局は長い間してこなかった。倒れても起き上がって攻撃してくるフォーサイズの兵に薄気味悪さを感じていた地上部隊の隊員たちは、次第に浮足立ちはじめた。逃げ腰になる隊員たちを叱咤しながらティアナはなんとか防衛線を維持しようとした。

「足を狙って！」

ティアナは指示を出しながら自らもクロスミラーージュで敵の足を狙い撃ちした。立てなくしてしまえばとりあえず進攻は阻止できる。他の隊員たちも足を狙い始めたが、フォーサイズ兵は痛めた足でなおも立ち上がってきた。彼らは足が完全に機能を失うまで立ち上がり続け、立てなくなると這って前に進もうとした。

「クレイジーどころじゃないわね。なんなのよ、こいつら」

悪態つきながらもティアナはクロスミラージュを撃ちまくった。相手は避けようもしないのだから簡単に狙った箇所には弾をあてることはできる。だが、それでは埒があかなかった。彼らを指揮している幹部を倒さないかぎり戦闘はエンドレスに続く。

（どこに指揮官がいる？）

それらしき人間を探すも、後方にいるようで姿は確認できない。ティアナは焦っていた。先ほどからエリオたちと連絡がとれないのだ。何度も呼びかけているのに一向に応答がない。何かあったと考えるのは容易ですが、でも向かいたところだが、いつの間にかティアナはこの臨時指揮官みたいなのになっていて現場を離れるわけにはいなくなっていた。

「まっずいわね」

こんなことになるなら、襲撃を受けた時に真っ先にさくらのところに向かうべきだった。エリオとキャロなら多少のことがあっても大丈夫と思っていたが、どうやら多少どころではないことが起きてしまったらしい。シャリオに様子を見に行ってもらっているが、崩れた瓦礫に邪魔されてもう少し時間がかかるようだ。そして、ようやくシャリオから連絡が来た。

「えっ？ あの手先生が？」

シャリオからの連絡によると、エリオたちはさくらを連れて脱出しようとした時にさくらの主治医の女医が現れて、その直後にエリオとキャロは背後から攻撃されて気絶し、シャリオが駆けつけた時にはさくらと女医の姿はなかった。状況から判断して、女医がさくらを連れ去ったと見て間違いは無いだろう。

「でも、どうして……？」

ティアナには女医がそんなことする理由が思い浮かばなかった。

だが、シャリオには思い当たる節があった。あの女医には前からゼクエスのことを知っていたと思われる言動があったのだ。

「ちょっとでも彼女を警戒していたら……」

今更悔しがっても後の祭りである。しかし、まださくらを取り戻す機会があった。もし、あの女医がフォーサイズに関係していたら連中と合流するはずである。つまり、注意して見ていればティアナが女医を発見するのはそう難しいことではない。だが、フォーサイズの方が一枚上手だった。彼らはティアナたちが戦っている場所の反対側にも部隊を展開したのである。

「しまった、図られた！」

恐らくティアナ達が戦っている部隊は陽動だろう。

「こんな単純な手に引っかかるなんて……」

すぐにでも反対側に行つてさくらを取り戻したいティアナだが、いま彼女がこの場を離れたら防衛線は瓦解してしまうだろう。エリオとキャロを向かわせようにも、気絶している間に女医に何かされたらしく体が自由に動かないようだ。

（どうする？）

そう自分に問いかけるも、良い考えは浮かばない。なのはやフェイト達が急行してくれているだろうが、ここに到着するのにはまだ時間がかかるはずだ。この局員がもう少し頼りがいのある連中なら、彼らにここを任せてさくらの救出に向かえるのに。何もできないことに焦るティアナに念話で話しかけてくる者があった。

『スバル？』

思いがけない人物にティアナは少し驚いた。

『どうしたのよ、あんた？』

『ん、ちよっとね。用事で近くにいたんだ。話はシャーリーさんから聞いた。さくらって娘のことは私に任せて』

『頼んだわよ』

かつての相棒の救援にティアナはさっきまでの焦燥感が消えうせた。まだ、希望は残っている。ティアナは気を引き締め直した。

その頃、さくらはフォーサイズの別働隊に連れていかれていた。その中に、さくらは前に自分を襲った連中のリーダーらしき男がいるのを見つけた。

「よう、久しぶり」

まるで知り合いに気安く声をかけるようなノリのデュオにさくらはきつい眼差しを向ける。

「おいおい、そんな怖い顔してくれるな。もう、俺はお前さんには手を出さないんだからよ」

「……彼女をどうしたんですか？」

「彼女？ ああ、あのお嬢さんか。会いたいなら会わせてやるよ。こっちもそのつもりだからな」

「どういことですか？」

「こういうことさ」

バチンとデュオが指を鳴らすと、彼の後ろに並んでいた兵士が道をあけてその後ろからルーシーが姿を現した。それを見て、さくらは驚きの声を上げた。

「ブランケットさん！？」

さくらは目の前の少女がルーシーとは信じられなかった。彼女がフォーサイズと一緒にいるはずがなかったからだ。だが、命のやり取りをした相手を見間違うはずはなかった。

「どういうこと？　なぜ、あなたがこの人たちと一緒にいるの？」
ルーシーに質問をぶつけるさくらだが、ルーシーは何も答えず代わりにデュオが彼女の肩に手を置いて答えた。

「それは、俺たちとこのお嬢さんが仲間だからさ」

「嘘……」

そう否定したいところだが、目の前の現実デュオの言葉を肯定しているように見えた。だが、さくらはルーシーの顔を見ていて何かおかしいことに気付いた。それが何かはわからないが。

「ま、久しぶりの対面でもう少し話をしたいだろうが、こっちにも都合があるんでな。悪いがこのお嬢さんに殺されてやってくれ」

さらりとんでもないことを言うデュオにさくらは唇を噛みしめた。所詮、さくらとルーシーは殺し合う間柄でしかないということか。とは言っても、さくらは動くこともままならない状態だ。殺し合うどころか一方的に殺されるのは目に見えていた。魔槍を振り上げるルーシーを見上げるさくら。魔槍が振り下ろされた時がさくらの命が失われる時となる。普通の少女なら目を背けるところだが、さくらは自分の命を奪おうとする武器とその主から目をそらそうとはしなかった。たとえ、何も抵抗できずに死ぬとしても、心だけは最後まで屈したくはなかった。そして、魔槍は振り下ろされた。ルーシーにとっては3度目の正直になるはずだった。1回目はフェイトに、2回目はエリオとキャロに邪魔されて、さくらを倒すことができなかった。もう、邪魔は入らないだろうと思いきや、2度あることは3度あるとはよく言ったもので、間一髪さくらは横から来た人物に助けられた。

「大丈夫？」

「は、はい……」

さくらは自分を助けてくれた女性をきょとんと見つめた。魔槍の斧の刃が自分に迫った時、急に目の前の光景が変わったと思ったら、さくらはブルーのショートカットの女性に抱きかかえられていたのだ。

「あ、あの……」

「話した後。今は逃げるのが先決だから。あ、それから私はスバル・ナカジマ。よろしくね」

スバルと名乗った女性は気さくにさくらに話しかけた。初対面でこうも気さくな人は初めてなので、さくらはいささか戸惑いを見せた。しかし、悪い人間ではないことだけはわかった。

「ちょっと飛ばすけど、いい？」

「はい」

さくらが頷くと、スバルは彼女の体をしっかりと抱きしめた。さくらの体に痛みが走る。

「うっ」

さくらの呻く声を聞いて、スバルはさくらを抱きしめていた力を緩めた。

「ごめん、痛かった？」

「いえ、大丈夫です」

本当は大丈夫ではない。スバルにもさくらがやせ我慢をしているぐらいわかる。スバルはさくらの痛々しい姿に心を痛めた。さくらには左腕が無い。ルーシーとの戦いで失われたことはスバルも聞かされている。

（どうして、こんな小さい娘たちが傷つけあわなければならないんだろ）

一方のルーシーには左目がない。これは、さくらによるものだった。年端もいかぬ少女が互いを傷つけあうという理不尽にスバルはやるせなさを感じた。だが、いまはさくらを安全な場所に運ぶのが先決だ。

「ごめんね、ちょっとの間だけ我慢して」

スバルはマツハキャリバーの走行速度をアップさせた。後ろからはルーシーがものすごいスピードで追いかけてきている。だが、スピードにはスバルも自信があった。フルスピードならルーシーを一気に引き離すことができるはずだ。問題はその加速にさくらが耐えられるかだ。

（無理だ……）

いまのスピードでもさくらは苦しそうにしているのだ。とても、フルスピードによる加速に耐えられそうにはなかった。しかし、このままではルーシーから逃げ切ることはできない。どうするべきかと悩むスバルにさくらは自分のことは気にしないよう言った。

「私は大丈夫です。ちょっとやそつとでは死にませんから」

「でも……」

とても大丈夫そうには見えない。かといって、ルーシーは戦って勝てる相手ではないことはスバルにもわかっていた。逡巡するスバルに、ルーシーは魔法弾を放った。

「ストライクボルト！」

矢状の魔法弾がスバルの腕をかすめた。大した怪我ではないが、この攻撃はスバルに決断を迫った。戦うか、逃げるか。さくらの状態を考えるなら答えは決まっていた。動きを止めたスバルをさくらは訝しんだ。

「ナカジマさん？」

「ちよっとごめん。少しここで横になっていて」

そう言うのと、スバルはさくらを地面に寝かせた。

「待って下さい。戦うつもりですか？」

「それしか方法はないみたいだからね」

「そんな無茶です…うっ」

さくらはスバルを制止しようとするが、体に痛みが走って思うように話すことができない。さっきのスピードアップによる加速で怪我が悪化したようだ。早く治療を受けさせなければ命に関わる。そのためには、ルーシーを一時的にも追撃不可能にしておく必要がある。だが、それなら倒すよりも難易度が低い。

「行くよ、相棒」

かけがえのないパートナーであるマツハキヤリバーに語りかけ、スバルは最強の魔導師に戦いを挑むのだった。

さくらとルーシーの設定

木崎さくら S a k u r a K i z a k i H e i g h t 1 3 0 . 9

c m w e i g h t 2 7 . 2 k g

保有デバイス…グラム

バリアジャケット…さくらは黒のスリーブレスのバリアジャケットを着用している。黒は黒き太陽すなわち日食を表している。バリアによる防護機能は低い、飛行速度をアップさせる機能がある。なお、さくらはバリアジャケット装着時は髪型がポニーテールとなる。

誕生日…6月21日

出身地…第97管理外世界

使用魔法

飛行魔法

身体強化魔法

さくらはゼクエスの魔法や術のみ。

日食の日に生まれ、祖父が死んだことで天涯孤独となったためにゼクエスの帝王候補となる。普段は目立たない大人しい性格だが、剣道の稽古や試合では相手を容赦なく叩きふせる攻撃的な性格となる。以前は、その相反する性格は完全な住み分けがされていたが、ルーシーとの戦いが始まってからは剣道をしている時の攻撃的な性格が常に表に出るようになる。一時は精神が不安定になって暴走状態に陥ったこともあるが、フェイト達が親身に接したことで落ち着きを取り戻した。その際に、他人とも交友できる第3の性格を手に入れている。ルーシーの事は、許せないと思う一方で悪い人間ではないとも思っている。ルーシーとの戦いで左腕を失い、フォーサイズに襲われた時に右目を負傷したことで一時的にゼクエスの術が使えない状態となっている。

江戸時代からの剣道家の家系で、さくらも母の影響で幼少の頃から

ら剣道を習うようになる。さくらは母親を慕っていて、母親のような剣道家になりたいと思っている。しかし、さくらが小学校に上がる前に母親が亡くなったため、さくらは強い剣道家としての母しか見ることができなかった。そのため、強くなることが母親のような剣道家になれると思って、ただひたすら強くなること、相手に勝利することのみを考えるようになった。小学校高学年になる頃には、大人ですら太刀打ちできないまでに強くなっている。

剣道にのめりこんでいたため、友達は皆無でクラスでは孤立していた。しかし、周りから避けられているとか嫌われているわけではなく、さくらはクラスメートのことは嫌いではない。だが、変身している姿を見られたことによって自分が普通の人間ではなくなったことが発覚してしまい、それがさくらの精神が不安定になる原因となった。

ルーシー・ブランケット Lucy Blanket Height
t140・3cm weight34・5kg

保有デバイス…ハルバード

バリアジャケット…ルーシーは薄い赤色のジャケットを着用している。赤は赤き月すなわち月食を表している。さくらのバリアジャケットと違って自らの機動性を上げることができないが、バリアによる防護機能が高く、そのためさくらのように重傷を負うことはなかった。

誕生日…1月10日

出身地…第33管理世界

使用魔法

飛行魔法

身体強化魔法

ストライクボルト

ストライクイーグル

ストライクインパルス

フアブリックショット

サークルスラッシュ

プロテクトディフェンサー

ベハンドリング

次元転送

ルーシーは元はミッド式の魔導師だったため、ミッド系の魔法も使える。

内戦で国土が荒廃した世界で生まれ、その日が月食だったこととさくらと同じく天涯孤独の身の上だったため、ゼクエスの帝王候補となった。反政府武装組織に育てられたが、リーダーの意向で自衛以外の戦闘行為はしておらず、人を殺害したことは帝王候補になる前は一度もない。ただそれは結果論であり、ルーシーはいざという時には相手の殺害も辞さない覚悟だけは持ち合わせている。一方のさくらは、人を殺したことも殺したいと思ったことも当然なく、それが実力的にはほぼ互角でありながら常にルーシーに遅れを取っている原因となっていた。また、ルーシーにはゼクエスの帝王になって、その力で故郷のみならずすべての次元世界から戦争を無くすという確固たる目標と、そのためにはライバルとなるもう一人の帝王候補の殺害も躊躇しない断固たる決意があり、それらがそうしたものがないさくらとの力の差なっている。だが、目的のために他人を犠牲にすることへの疑問は常に持ち合わせており、さくらに左目を斬りつけられて左の視力を永遠に失ったことで、いままでの自分の行為が正しかったかどうか自信が持たなくなってしまった。フォーサイズに襲われているさくらを助けたのは、一度じっくりと話をしてみたいと思ったからだ。だが、さくらを安全な場所に転送したままではよかったものの、左目を失ったことで生じた死角をデュオに突かれて囚われの身となってしまう、人の魅了すると言われるロストログアのディアスによってフォーサイズの操り人形となってしまう。

ゼクエスの帝王候補には、それぞれ一つずつ他者と目を合わせることでその者の意識や価値観などを自由に支配する術が使え、ルーシーは相手の記憶を自由に書き換える術が使える。しかし、さくらとの戦いで左目を失ったことで術が使えなくなってしまった。

第9・7話【ゼクエスの脅威】？

まともにやりあっても勝ち目が無いことはスバルにもわかっていた。だから、ルーシーを倒そうとは思っていない。ただちよつとの間だけでもルーシーを追撃不能にできればそれで良かった。対峙するスバルとルーシーを離れた場所から見ていたデュオは隣のシャロンに尋ねた。

「なあ、あの女誰なんだ？」

「管理局特別救助隊のスバル・ナカジマ防災士長。2年前は機動六課にいてたそうよ」

「ほう、そりゃすげえな」

「でも、かのじよゼクエスの帝王候補の敵ではないわ」
シャロンは自信ありげに言った。

「そうか？ 機動六課ってのは結構すごいところだったんだろ？」

「馬鹿ね。人間が神様に勝てると思って？」

神様という言葉にデュオは耳を疑った。

「おいおい、マジで言っているのか？」

冗談がやめてくれとばかりにデュオは肩をすくめた。

「あら、あなた神様を否定するの？ そんなんでよくウチの幹部が務まるわね」

フォーサイズという組織は自分たちが行う活動を神の名のもとに主張している。元々、母体となっているのが宗教団体なのだから当然の事だが、メンバーの中にはデュオのように神様に興味ない者もいる。いや、神の存在を信じる者でも、年端もいかぬ少女を神様と言われて「はい、そうですか」とはならないだろう。

「まあ、正確には神様になろうとしているってことね。ゼクエスの帝王というのはそういう存在なのよ」

「……」

シャロンの言葉をデュオは少し引き気味に聞いていた。あまり真剣に神様を語られても困る。デュオにはどうしてもあの少女が神様候補には思えなかった。確かに強いのは認めるが、それが世界を滅ぼす力を持つ存在になるかなんて眉唾だ。もし、それが事実だとしたら、その神様になるかもしれない少女を意のままに操る自分たちは神をも超える存在ということになる。

（こんな話シスターにしてやったらどんな顔するかな）

デュオはふと昔世話になった教会のシスターを思い出した。シスターも熱心に神のことをデュオに説いていた。ただ、シスターが説いていた神は人々を救済してくれる存在だった。どっちの神が本当かはデュオにはどうでもいいことだった。これまでにデュオが学んだことは神という存在は人間が勝手に創り上げた偶像にすぎないということだった。だから、彼はジャッカルのこととただのペテン師としか見ていない。ジャッカルがギルバート・ミハイルとして信者にみせている奇跡がやらせやトリックでしかないことを知っているからだ。いや、ジャッカルも神の存在を信じているか怪しいものだ。

（まっ、いまは神様になるかもしれない奴の実力を見せてもらおうとするか）

シャロンは力はルーシーが上と言うが、戦いは単に力の差だけで勝敗が決まるものではないことをデュオは知っていた。戦いの経験というのも重要なのだ。場数を踏めば踏むほど戦い方を学ぶようになる。実戦経験という点ではルーシーも劣ってはいないが、いまのルーシーは命令に従うだけの人形で策を講じるようなことは不可能だった。

（さて、どうなるかな）

デュオはルーシーとスバルの戦いをゆっくり見物することにした。戦いはやはりと言うべきか、ルーシーが優勢だった。まず、ルーシーが魔槍を振り上げて迫ったが、スピードが速くてスバルは対応が遅れてしまった。マツハキヤリバーが咄嗟にウイングロードを発生させて後方に逃げていなかったら、スバルは振り下ろされた魔槍の餌食になっていただろう。

「なんて威力…」

スバルは魔槍の衝撃でできた地面の穴に息を呑んだ。まともにくらえばタダではすまなかっただろう。ゼクスエスの魔闘士が持つバンパイアデバイスは、他のデバイスと違って相手を殺すためにある。攻撃力においては間違いなく最強なのだ。

「まいったな……」

どうやら接近戦はスバルに不利のようだ。接近戦にほぼ特化してしまっているスバルにとってそれは打つ手なしを意味していた。だが、それは最初から想定済みのことだ。相手はヴィータに重傷を負わせたさくらを後一步まで追いつめた実力の持ち主だ。最初からスバルに勝ち目はなかった。

（なんとか話をしてみたいけど……）

できれば戦闘は避けたいところだ。だが、ルーシーは聞く耳持たずの問答無用で攻撃してきた。魔槍を自在に振り回すルーシーにスバルは回避するのに精いっぱいだった。だが、長物による攻撃はどうしても大振りになってしまうため隙がしやすい。スバルは攻撃をかわしながらルーシーの隙を窺った。そして、ルーシーの右薙ぎの攻撃をしゃがんで回避したスバルはわずかにできた隙を見逃さなかった。

(見えた)

スバルはリボルバーナックルに魔力を圧縮させてパンチを繰り出した。もし、これがヒットしたらルーシーはかなりのダメージを受けるはずだ。しかし、スバルのナックルダスターはルーシーが発生させたAIシールドに阻止されてしまった。

「これが噂の最強の盾……」

ヴィータですら破ることができなかった鉄壁の防壁。

「でも、振動破碎なら」

戦闘機人の先天固有技能である振動破碎は本来は生身の人間には使用しない。だが、シールドを破壊するだけなら遠慮なく使える。戦闘機人モードとなったスバルは、振動破碎による振動エネルギーを右拳に集中させた。

「はあああああっ!!」

渾身の一撃を叩きこむ。格闘戦での打撃力は恐らく最強クラスだろう。しかし、それでもAIシールドの前には無力だった。AIシールドとは絶対不可侵の盾という意味で、単なる防御シールドではない。唯一無二の支配者であるゼクスエスの帝王にとって周りには下僕でしかない。その下僕が帝王に直接接触するなど絶対にあってはならない。AIシールドは敵の攻撃から主を守るのではなく、帝王とその他の者との間の絶対には越えられない身分の壁としてあるのだ。だから、いくらスバルが足掻いたところでAIシールドを破ってルーシーに接触するなど不可能なのである。

「こんな事って……」

愕然と立ち尽くすスバル。とっておきの奥の手も不発となった。そんなスバルにルーシーは魔槍で突いてきた。スバルはバリアで防

こうとしたが、魔槍はいとも簡単にバリアを破壊した。

「くっ」

スバルは後ろに逃げようとするが、その時魔槍の穂先に魔力が集中しているのが見えた。ルーシーが射撃魔法をしかけようとしているのだ。

「ストライクイーグル！」

回避も防御もできなかった。スバルはほぼゼロ距離でルーシーの射撃魔法をくらってしまった。大きく吹き飛ばされたスバルは、地面に大きくバウンドしてさくらの前に転がった。

「ナカジマさん！」

さくらが声をかけるが、スバルはすでに意識を失っていた。

「そんな…私のために」

自分のために無関係の人たちが傷ついていく。

「どうしてこんなことに……」

元々、二人だけの戦いだったはずだ。それが、いつの間にかたくさんの人が関わるようになってしまった。

「なんで？ どうして関係ない人も巻き込むの？ 襲うなら私だけにすればいいじゃない。あの人たちと組んで、ここの人たちを傷つけたりして。そんなの間違ってる！」

人のことを言えないのはさくらにもわかる。さくらだってフェイトを殺そうとし、ヴィータに重傷を負わせた。だが、いまではそれが間違いだったと反省している。どんな理由があろうと自分の都合のために人を傷つけるのは間違っている。本当の強さとは誰かを傷つけるためでなく、誰かを守るためにあるもの。さくらには守りた

いものは何もないが、ルーシーには何かは知らないが守りたいものがあるように思えた。すべてを失ったはずのゼクエスの帝王候補に守りたいものがあるのかは知らないが、さくらにはそのようにしか思えなかった。だが、そのために他の人を傷つけるのは絶対に間違っている。さくらはそのことを訴えたかったのだが、ルーシーは何も返答しないし表情も変えない。

「？」

何も反応を返さないルーシーにさくらは違和感を感じた。いや、違和感はさっきから感じていた。さっき、ルーシーはスバルの攻撃をA Iシールドで防いでいた。ルーシーならA Iシールドに頼らなくても攻撃を回避できたはずだ。それと、さっきの訴えにも何も返さない事にも引かかかる。前ならたとえ聞きいれようとしなくても、何らかの返答をしていた。しかし、いまは黙ったままだ。そもそも、フォーサイズの連中と行動を共にしている事からしてルーシーらしからぬ行為なのだ。

「一体なにがあったの？」

さくらはルーシーに問いかけるも、ルーシーは何も答えない。代わりに魔槍の穂先をさくらに向けた。さくらは自分では動けないし、スバルは気を失っている。いまここで射撃魔法でも撃たれたら回避のしようがない。

「変身さえできたら……」

自分の非力さにさくらは拳を握りしめた。自分の身を守ることも、自分のために傷ついた人を守ることもできない。たとえ変身できたとしても、いまのさくらの体では戦闘は満足にできないだろう。いまの彼女にできるのはスバルの上に覆いかぶさって少しでもルーシーの攻撃からスバルを守ることだけだった。そのさくらとスバルに向けられた魔槍の穂先に魔力弾が生成された。さくらは今度こそ駄

目だと観念した。その時、地中から腕が現れてさくらとスバルをつかんだ。

「えっ？」

驚くさくらに、今度は人間の頭が浮かび上がってきた。

「驚かしてごめんよ。私はセインって言うんだ。お前を助けに来たんだ」

セインと名乗った水色の髪の女性は、さくらとスバルの体を抱き寄せると再び地中に潜り始めた。すると、一緒にさくらとスバルも沈み始めた。

「えっ、ちょっ……」

「大丈夫、心配いらなくて」

心配ないと笑顔で言われても土の中に引きずり込まれようとすれば誰だって動揺する。セインは無言を言わずさくらとスバルを地中に引きずり込んだ。その直後、3人がいた場所に魔力弾が着弾した。

「おいおい、土の中に潜っちゃったぞ。あんなの有りか？」

デュオが納得いかないような声で言った。地中に逃げ込まれたら追いかけるようがない。

「どうする？　いくら神様候補でもモグラの真似まではできねーだろ」

しかし、隣のシャロンは余裕だった。

「大丈夫よ。あくまで地中に潜っただけなんだから。消えたわけではないでしょ」

「でも、どうやって追いかけるんだ？」

「まあ、見てなさい」

シャロンがそう言うので、デュオは黙って見ていることにした。何も同じように地中に潜行しなくても、逃げ道を使えなくすればいいだけのことだ。ルーシーは、魔槍の斧の刃を指でなぞって魔槍に血を与えると、それを両手で回転させた後に地面に振り下ろした。直後、ものすごい地響きとともに地面が大きく抉られた。

「とんでもねえお嬢さんだな」

ルーシーの一撃で生じた大きなクレーターに、デュオは驚く以上に呆れてしまった。クレーターの底には気を失っている3人の姿があった。バリアジャケットにすら守られていないさくらが気を失っただけですんだのは、咄嗟にセインがさくらの盾になったからである。ルーシーは底に下りると、さくらの上に覆いかぶさっているセインを足でどかした。さくらとルーシーの間には何も阻むものはない。魔槍の穂先がさくらの心臓を狙う。今度こそ、さくらの命はないと思われたが、彼女たちを助けに来たのはセインだけではなかった。

その頃、ティアナは守備隊の隊員を指揮しながらフォーサイズの別働隊と交戦を続けていた。一刻も早く、さくらのところに向かいたいところだが、防衛線は崩壊寸前で先頭に立って指揮する人間がいなければどうの昔に総崩れになっていたのは確実で、ティアナは現場から離れることができずにいた。そんな時に、さっきの地響きがティアナのところにも伝わってきた。

「な、なに？」

驚いたティアナが後ろを振り返ると、土ぼこりが舞い上がっているのが見えた。

「スバル、何があったの？ スバル！」

ティアナはスバルに呼びかけるが、応答が来ない。何かあったのは間違いなく、ティアナは判断に迷った。急いで駆け付けるべきか否か。

「どうすりゃいいの？」

判断に迷うも悩んでいる時間はない。ティアナは土ぼこりが舞った場所に向かうことにした。フォーサイズの目的を考えたら優先すべきことはさくらを守ることだ。しかし、それはこの場にいる局員たちを見捨てるということになる。ティアナは意を決して局員たちにこの場を離れることを告げた。局員たちは一瞬、動揺するがすぐにきりつとした表情で答えた。

「行って下さい執務官。ここは我々だけで守ります」

他の局員たちも同様に答えた。誰もが奇襲のショックから立ち直っていた。彼らもティアナの説明でさくらを保護することが最優先であることを理解したのだ。

「お願い」

この場は大丈夫と判断したティアナは、急いでさくらの元に向かうとした。だが、そこを数発の魔力弾が飛んできてティアナの足を止めた。

「誰？」

ティアナが弾が飛んできた方を振り向くと、銃の形をしたデバイスでティアナに向けた赤い髪の少女が立っていた。

「動かないでください。私はサラ、フォーサイズの幹部です」

どうやらさくらのところに行くには、このサラを倒さなければならないようだ。

「…やるしかないようね」

ティアナはクロスミラージュを構えた。それを見てサラはため息をもらす。

「私たちの目的は木崎さくらさんの命とこの施設の破壊です。抵抗さえしなければ命までは取りませんよ」

それは暗に降伏を促していた。当然、ティアナにその意思はない。サラにクロスミラージュの銃口を向けてその意を示す。

「そうですか。仕方ありませんね」

サラは残念そうにため息をついた。

「手加減はしませんよ。覚悟はいいですね？」

「そっちなこそ」

二人は同時に引き金を引いた。

スバルが地上本部の異変を察知して駆け付ける際、彼女はセインの他にも応援を頼んでいた。セインが最初にやってきたのはたまたまで、他の連中もセインが撃破された直後によりやく到着した。

「ん……」

気がついたさくらは頭を上げて状況を確認した。まず、すぐ隣に大きな穴があった。先ほど、ルーシーが掘った大穴だ。そして、傍らでまだ意識が回復していないスバルとセイン。倒れているのは彼女たちだけではない。他に二人、さくらが知らない女性が倒れていた。そして、ルーシーと対峙している長髪の女性がいるが、すでに傷だらけで立っているのもやっという感じだった。それと、もう一人。ドサツという音がしたので、さくらがその方向に顔を向けると銀髪の小柄な女性がデュオの前に俯せで倒れていた。

「手こずらせやがって」

デュオは吐き捨てるように言うと、その女性チンクの背中を踏みつけた。

「まっ、相手が悪かったということだな」

ルーシーがさくらにトドメを刺そうとした時、この4人が現れたのだ。さすがに、4対1は分が悪いと判断したデュオはルーシーを手助けすることにした。その結果、チンクとノーヴェはデュオに、ウエンディはルーシーに倒された。残るもう一人も倒されるのは時間の問題だろう。当然、さくらはその女性の名前を知らないが、後ろからその女性のものと思われる名前を呼ぶ声がした。

「ギ…ギン姉^{ねえ}」

さくらが後ろを振り向くと、スバルが起き上がろうとしていた。

「ギン姉を助けなきゃ」

だが、スバルはストライクイーグルをゼロ距離でくらったダメーシで体が満足に動く状態ではなかった。それでも、スバルは姉のギンガを助けようと傷ついた体で前に進もうとした。何としてでも姉を助けたいというスバルの気迫が伝わる。その様子を見て、さくらは二人が仲の良い姉妹であることを理解した。妹がこんなに姉思いなら、姉もきっと妹思いの優しい女性なのだろう。その、優しい女性^性がまた傷つこうとしている。

「もう、誰も傷つかせない」

それは、さくらが初めて他人を守るために戦おうと決意した瞬間だった。そして、そのための力をさくらに与える異変が空で起きつつあった。

第9・7話【ゼクエスの脅威】？（後書き）

とある世界の小学校。一年生の新一はクラスメートのゲコ太※あだ名です。と一樹、由美から今度の日曜日に宝探しに行かないかと誘われた。

「宝探しだあ？」

新一はまたいつもの事が始まったと思った。この3人は何かあるとすぐに宝と結びつける悪い癖があった。

「こないだ、親戚の家に遊びに行った時によ、洞窟をみつけたんだ。おじさんに聞いたら結構奥が深くて誰も奥まで行ったことがないんだとよ。でも、その洞窟には大昔に何かが隠されたって伝説があるって言ってたんだ」

「その何かが宝だったのか？」

新一はその話を信じなかった。その手の話は珍しくもなんともないからだ。だが、3人はすでに宝探しに気が行っていた。宝を見つけたらどうしようかと議論している。もう、こうなったら止めることは不可能で新一は3人に押し切られてついていくのがいつものパターンとなっていた。

（まっ、ピクニックでも思えばいいか）

新一は呆れながらもついていくことにした。

第10話【黒き太陽輝く刻】？

ルーシーは魔槍を振り上げた。ギンガは避けようとも受け止めようともしない。彼女の意識はすでになかった。

「ギン姉、逃げてっ！！」

スバルの叫びにもギンガは反応しない。このままではギンガは魔槍に斬り裂かれてしまう。

（もう誰も傷つかせない）

さくらはそう心に決めて動かない体を無理にでも動かそうとした。ところが、ここで思わぬことが起きてしまった。さっきまで動く痛みが走ったのに、いまはその痛みが和らいでいるのだ。

「なんで？」

一体、何が起きたというのか。痛みが軽減されただけでなく、体の奥から力が湧き上がってくるような感覚がするのだ。

（胸の中が熱い？）

リーガル・コアが熱を帯びているのか。原因がわからず不安になったさくらは、ここでようやく辺りが昼なのに少し暗いことに気付いた。気絶する前はこんなに暗くはなかった。その理由はすぐにわかった。さくらが空を見上げると、太陽が月に覆い隠されようとしていたのだ。

「日食だ」

前に魔女に聞いたことがあった。日食の日に生まれた帝王候補であるさくらは、日食の時に力が増すのだ。何というタイミングの良さ。いままでで一番力を欲している時に、それを実現する現象が起

きている。さくらはこの時ほど神の存在を信じたくなったことはなかった。それまで自分では満足に動けなかったさくらが立ち上がっていることに誰もが驚きを持って見ていた。ルーシーも魔槍を振り上げたままさくらを注視している。全員の注目を集めたさくらはゆっくりと手を上にあげた。

ちょうどその頃、対フォーサイズ専属捜査班の本部ではリインフォース？と整備担当のメイ・サルサミルが急に光り出したさくらのデバイスを茫然と見ていた。このデバイスが回収されて以来、いろいろと調べようとしたのだが拒否されてしまっているのだ。メイからしたら初めて見るバンパイア・デバイスを解析してみたい衝動に駆られるわけだが、部隊長のはやての指示でデバイスの同意なしの解析はしないことになっていた。そのはやては、地上本部を救援するため空戦魔導師部隊を率いて出撃するところであり、リインフォース？ははやてに同行するために向かう途中で、メイの驚いた声を聞いて駆け付けたのだ。

「どうしたですか？」

リインフォース？が駆けつけてみると、さくらのデバイスが光輝いていて急のことで驚いたメイが腰を抜かしていた。

「こりは一体？」

「わ、わかりません。いきなり光っちゃって」

二人はしばらく茫然と見ていたが、リインフォース？はハツという顔になって、

「と、とにかく、はやてちゃんに知らせないと」

急に光り出すには理由があるはず。さくらがいる地上本部が攻撃を受けている時だけに、さくらに何かあったのかもしれない。リインフォース？は、はやてに知らせようと急いで外に出ようとした。

「リイン曹長、あれを！」

メイが叫ぶのを聞いたリインフォース？はデバイスの方を振り向いた。すると、さくらのデバイスが宙に浮かんでいるのだ。そして、次の瞬間、さくらのデバイスは猛スピードで飛び去った。その際に、運悪く服が引っかかってしまったリインフォース？も一緒に。

「ひえええええっ！！！」

リインフォース？は引っかかっている服を外そうとがんばるが、猛スピードで飛行しているため思うようにはいかない。さくらのデバイスは壁や天井を突き破って飛び去ったから、異変はすぐにはやてたちの知るところとなった。駆け付けたはやてたちにメイが何があったかを伝えた。

「なんやて？」

さくらのデバイスが急に光り出したと思ったらいきなり飛び去ったと聞かされて、はやては俄かには信じられなかった。デバイスが勝手に飛んでいくなんて聞いたことがなかったからだ。しかし、メイが嘘を言っているようには見えないし、現にさくらのデバイスが無くなっていて壁に穴が開いている。

「これは嫌でも信じんとあかんみたいやね」

厄介なことになりそうだとはやては思った。現在、通信妨害のため地上本部との連絡は不通で、はやてたちは現地の状況を知ることができずにいた。気がかりなのは日食だ。今日、日食があることは知られていたことで、はやてたちも忙しい職務の合間を縫って見てみるつもりだった。前にフェイトがさくらに聞いた話では、ゼクスの帝王候補は日食の日に生まれた者と月食の日に生まれた者が選ばれて、さくらは日食の日に生まれたから黒き太陽の魔闘士として帝王候補になったという。いま、ちょうど太陽が月に食べられてい

る時だ。カリムの預言にあった太陽を喰らいし者とはさくらのことではないだろうか。日食が起きている時に、さくらのデバイスが飛んでいったのは決して偶然ではないだろう。そうすると、月を覆いし者とはルーシーの事で間違いないだろうが、では資格無き者とは一体誰のことを指しているのだろうか。

「なんや嫌な予感がするわ。とにかく、地上本部に急行や。リインの事も心配やしな。マリアは私についてきてんか。シャマルとザフイーラはここに残って本部の守りや。外に出かけているメンバーには直接現地向こうしてもらうことにするわ」
はやての指示に一同は「はい」と答えた。

さくらが右手を上にあげて数十秒が経過した時だった。遠い彼方からすごい勢いでさくらのデバイスが飛んできて、主の手の上に（といってもギプスの上だが）止まったのだ。もっとも、止まったのはリングとヘビのあまり趣味のよろしくないブローチだけではなかった。

「ふひーっ、死ぬかと思ったです」

右手を下ろしたさくらは飛んできたのが自分の趣味の悪いブローチだけでないのに気付いた。ちっちゃい女の子だ。

「妖精さん？」

羽こそ生えていなものの、ちっちゃくてかわいらしいリインフォース？はさくらには妖精に見えた。

「妖精ではないですよ」

一息ついたリインフォース？は、きょんとしているさくらの顔を見上げた。

「あなたが木崎さくらさんですね。初めましてリインフォース？といます。リインって呼んでくださいね」

明るく自己紹介するリインフォース？だが、さくらはきよとんとしたままだった。

「どうしたですか？」

「いえ、知っている人に声が似ていたから」

似ているどころか、瓜二つである。まるで同じ声優さんが演じているようだった。

（声は同じだけど性格は違うみたい）

さくらは緑色の髪 of 魔女の顔を思い浮かべた。無愛想な魔女だが、かといって、

「さくらが殺^やるつもりはなくても、向こうはさくらを殺るつもりでくるですよ。だから、殺られる前に殺っちまえますよ」

などと明るく言われても困る。それに、現状はとても明るくお話できるものではなかった。リインフォース？も想像以上の惨状に表情を曇らせる。セイン・チンク・ノーヴェ・ウェンディが倒れていて、立っているスバルとギンガもひどいダメージを受けているのがわかる。

「ティアナはどうしたですか？」

ティアナが見当たらないことに気付いたリインフォース？はスバルに尋ねた。スバルが状況を説明すると、リインフォース？はこのままでは救援が到着するまで保たないと悟らざるを得なかった。ともに戦える者は誰もいない。ゼクエスの魔闘士の強さは聞いてはいたが、まさかこれほどまでとは思ひもなかった。はやてやヴィータがいたら融合して戦うこともできるのだが。リインフォース？が対応策を考えていると、さくらが前へと歩き出した。スバルがあ

わてて制止する。

「駄目だよ。前に出ちゃ」

さくらは左腕が無いうえに右手もギプスがしてあってとても戦闘ができる状態ではない。

「大丈夫ですよ。言ったでしょ。私はちょっとやそつとじゃ死なな
いって。それに、もう嫌なんですよ。誰かが傷つくって。特に優し
い人たちが、ね」

縁もゆかりも会って話したこともない自分のために傷つき倒れて
いった人たち。今度は自分がこの人たちのために戦う番だ。そんな
決意をこめて、さくらは変身の魔法を詠唱する。

「我、選ばれし者なり。風よ、水よ、火よ、土よ、黒き太陽の下に
生まれし魔闘士に力を与えたまえ。敵を殲滅する強さはこの手に、
困難に打ち勝つ勇氣はこの胸に。魔剣グラム、セッタープ！」

「Yes, My Lord」

実に久しぶりの変身だ。変身と同時に右手のギプスが砕かれ、右
目の眼帯も外れてどっかに飛んで行った。

「ナカジマさん」

「えっ、なに？」

「お姉さんを安全なところへ」

「そ、そうか」

スバルはギンガのところへ行って姉の頬を叩いた。

「ギン姉、しっかりして」

「ん？ うーん……。あ、スバル……。？」

「ギン姉……」

ギンガが目を覚ましたことにスバルは安堵した。一人では歩けな

い様子のギンガに肩を貸して後ろに下がる。これで、さくらとルーシーの間に誰もいなくなった。

「決着をつけましょ」

もう二人の戦いに他人を巻き込むべきではない。さくらは魔剣の刀身に自分の血を与えた。さくらの指先から流れる赤い血が魔剣の刀身の中の管を通っていく。外から見たら魔剣の刀身の真ん中に縦に赤い筋が通っているように見える。ルーシーも自分の魔槍に血を与える。誰が見てもさくらが不利だ。だが、スバルもリインフォース？もさくらを止めることはできなかった。さくらの体から発せられる威圧感みたいなものが二人を怯ませているのだ。

「これがゼクエスの帝王候補……」

さっきまでか弱い女の子でしかなかったのに。まるで王者の風格ってやつみたいだ。だが、とスバルは思う。ルーシーからはそんな威圧感を感じなかった。なぜだろう。疑問と言えば、ルーシーには威圧感どころか何か心ここにあらずという感じがしてならない。そうした疑問はさくらも抱いていた。ルーシーとの付き合いは彼女が一番長い。ルーシーには間違いないのだが、どうもルーシーらしくないのだ。

（何か引つかかるけど……）

ルーシーに何があったかは知らないが、彼女が危険であることには変わりはない。さくらは学校での戦いを思い出していた。あの時、ルーシーはさくらの学校の児童を人質にとってさくらに降伏を迫った。ルーシーは目的のためなら手段を選ばない。しかし、さくらはルーシーが好んでそんな手段を取ったわけではないと思っていた。だが、いまもそう思っているのかと訊かれたら答えるのを躊躇してしまう。もしかしたら、ルーシーは人を殺すことを何とも思っていないのかもしれない。魔女はさくらにこう言った。

（ゼクスエスの帝王は死者を生き返らせることもできる）

それが本当なら何人殺しても苦にならない。だが、さくらはそれを信じる気にはなれなかった。もし、本当ならその候補である自分たちにも人を救える力があっていいはずだ。ところが、実際二人がしてきたことは破壊と殺傷だけである。

（誰も傷つけないし、誰にも傷ついてほしくない。だから）
さくらは魔剣を握る手に力を込めた。

「この一撃に私のすべてを込める」

次の瞬間、魔剣からオーラみたいなのが発せられた。さくらが全エネルギーを魔剣に集中させているのだ。ルーシーも、魔槍にエネルギーを集中させた。二つの武具から発せられる強力なオーラにスバルたちは吹き飛ばされそうになる。

「スバル、ここは下がるですよ！」

「はい」

危険を感じたスバルとリインフォース？は避難することにした。
ギンガもスバルに肩を貸してもらいながら移動する。

「こりゃ、俺たちも下がった方がいいな」

ちよつとでも気を抜くと転がってしまいそうな風にデュオとシャロンも下がることにした。これで皆が安全圏に避難した…わけではなかった。スバルがあつという顔になった。

「あ、ノーヴェたちが」

そう、セインやノーヴェたちが倒れたままになっているのだ。

「助けなきゃ」

いまでさえ立っているのもやっとなのだ。これでさくらとルーシーの武器がぶつかりあったら、ものすごいエネルギーのぶつかりあいで周囲のものは全部ふっ飛ばされてしまうだろう。

「ギン姉はここにいて」

ギンガを地面に寝かせたスバルは、ノーヴェたちを救出に向かった。レスキューが本職なのでこういったことは得意だ。だが、その前にさくらが動いた。

「でりゃあああっ！」

さくらの一撃が放たれた。それを魔槍の斧の部分で受けるルーシー。蓄積されていたエネルギーが一挙に放出され、かつぶつかりあったことで爆発的な衝撃波が周囲を襲った。それは窓ガラスが割れ、塀が崩れて、外壁に亀裂が生じて建物の一部が崩れるほどの威力で、当然人が立つてられるような状態ではない。

「スバル、伏せなさい！」

ギンガからの指示で、スバルは地面に伏した。ほんのちよつとも遅れていたらスバルはふっ飛ばされていただろう。

「ありがとう、ギン姉」

姉に礼を言うと同時にスバルは、二人の帝王候補の戦いにゾツとなった。ただ、武器と武器がぶつかりあっただけでこれだけの衝撃波が来るなんて。だが、ゼクススの魔闘士の凄さはこの程度ではなく、真のゼクススの魔闘士即ちゼクススの帝王の力はまさに想像を絶するものであり、スバルは数ヵ月後にそれを目の当たりにすることとなる。

第10話【黒き太陽輝く刻】？（後書き）

とある世界。とある山のとある洞窟。新一、ゲコ太、一樹、由美は洞窟内を探索していた。洞窟の外では、子供だけではないということについてきている中年男性と娘で新一たちのクラスメートでもある真衣が昼食の準備をしている。なぜ、真衣が新一たちと一緒に行かないのかというと、不確実な事には関与しないという主義からである。新一と同じく真衣もこの洞窟に財宝が眠っているなんてまったく信じていた。結構、深そうな洞窟だから何かが隠されているかもしれないが。

しかし、ゲコ太たちは宝があると信じて疑っていないようで、気の早いことに洞窟に入る前から宝を見つけたらどうするって話をしていた。早くしないと、誰かに先を越されてしまうと本気で心配していた。

（そんな奴いるわけねーだろ）

そう思っていた新一だが、かすかに人の声がすることに気付いた。

「待て、誰かいるぞ」

3人を静かにさせて、聞き耳を立てる。確かに人の声がする。新一は嫌な予感がした。こんなところに何の用があるというのか。考えた末に引き返した方がいいと判断した新一はそのことを3人に告げようとしたが、3人は新一が考え込んでいる間に先に進んでいた。

「おい、何やってんだ。ここはまずいったん外に出るんだ」

だが、3人は聞く耳を持たない。ゲコ太が言い返す。

「何、言ってるんだ。宝を横取りされるかもしれねーだろ」
続いて由美も。

「そうよ。せっかくここまで来たのにね」

「早くしないと先を越されてしまいますよ」

一樹までもが、新一の言葉に耳を傾けない。だが、新一は家を出る前に聞いたニュースが気になっていた。この近辺で起きた銀行強盗。この洞窟はひとまず隠れるのにちょうどいい。さっきの声はその銀行強盗たちのものかもしれないのだ。急いで3人を追いかける新一だったが、彼の予感是不幸にもドンピシャリだった。

第10. 3話【黒き太陽輝く刻】？

少し時間を戻して。フォーサイズの幹部サラと戦うことになったティアナだったが、サラの方が射撃の腕が上のように苦戦を強いられていた。ティアナは二丁拳銃で魔力弾を放つのだが、サラはそれを一丁の銃で皆撃ち落としてなおかつティアナに撃ちこんでくるのだ。魔力弾を遠隔操作してサラを惑わすこともしてみたが彼女は正確に魔力弾を撃ち落としていった。

「そんな！」

高速で行き交う魔力弾を正確に撃つことなど不可能に近い。神業とは思えないサラの射撃にティアナは愕然となった。

「どうやら銃の腕は私の方が上そうですね」

今度はこっちの番とばかりにサラは銃を連射した。

「くっ」

ティアナはひとまず逃げることにした。まともにやりあっても勝てないと判断したからだ。サラはティアナに銃を向けた瞬間に発砲してくる。その射撃は極めて正確で、ティアナは一瞬でも立ち止まることができなかった。なんとか遮蔽物に逃げ込んだティアナは必死に打開策を考えた。どうやらサラは魔力スフィアを形成することも魔力弾を遠隔誘導することもできないらしい。ただ、デバイスから魔力弾を直線的に撃ってくるだけだ。デバイスの性能ではクロスミラージュが上だ。しかし、射撃の腕はサラが完全にティアナを上回っていた。

「なんとか隙を見つけて一撃必殺の魔法で倒す。これしかないわね」
見つからなかったら作るまでだ。サラはゆっくりと歩いてこっち

に向かっている。ティアナは自分の幻影を複数発生させて相手を惑わす作戦に出た。一体目の幻影が現れサラはそれに銃を向ける。だが、発砲はしない。他にも幻影がいくつも出現しているからだ。

「幻術魔法？」

いくつもの幻影を発生させなおかつそれらを動かすことはかなり高位な魔法であるはずだ。サラは幻術魔法についてあまりよく知らないが、ティアナがやっていることが凄いということはわかった。

「思っていたよりやるようですね。幻影が私を引きつけている隙に別の場所に移動して私の隙を窺う作戦ですか」

どうやらサラはこの魔法を使っている時は術者はその場を移動できないことを知らないようだ。それと、戦闘機人もみたいに幻影を見破ることもできないらしい。まあ、それは当然か。サラが射撃で幻影をすべて消滅させたのを視認すると、ティアナはサラが自分の方を向いていないのを確認して素早く移動した。サラが自分の位置をわからないと判断したティアナは彼女の隙を窺った。サラを倒すには彼女の魔力弾に弾かれないだけの威力の魔力弾を放つしかない。さらに、相手に回避する余裕を与えないことも重要だ。

「もう終わりですか？ どこかに隠れて私の隙を窺っているんでしょうけど無駄です。あなたの射撃魔法は全部弾かれてしまうのはわかっていてでしょ？ 無駄な抵抗は止めて降伏してください。今なら命の保証はします」

どこに隠れても聞こえるように大声で降伏勧告するサラだが、ティアナには途中であきらめるつもりはなかった。

「やるだけのことをする。それで駄目ならそれまでよ」

魔力スフィアを一個形成してそれをサラに見つからないように移動させる。現在、ティアナはサラの右斜め後方にいる。距離は10

0mほどか。向こうはこっちに気付いていない。だが、警戒は怠っていない。いま、撃っても回避されるか撃つ前に撃たれてしまう。サラの気をちょっとでもそらせるために魔力弾を誘導しているのだ。そして、サラの左側面から一気に突撃させる。

「！」

自分に向かってくる魔力弾をサラは素早く射撃で弾く。迅速でしかも精密な射撃だ。しかし、それでサラの目が魔力弾が飛んできた方に向くこととなった。

「いまだ」

ティアナは隠れていた遮蔽物から出て、サラに銃口を向けた。ターゲットリングが現れて目標をロックする。発射するのに時間がかかるのは難点だが、このタイミングなら気付かれても回避は不可能だ。サラはまだティアナに気付いていないようだ。もう少し、気付かないでほしいと祈りながらティアナは発射までの時間を待った。そして、その時がきた。

「ファントムブレ……」

イザーとつづくはずだったティアナの砲撃魔法。この時点でサラが気付いたとしても回避はもう不可能、魔法弾で弾くにしても魔力量の差でそれも無理。なす術もなく、サラは撃破されるはずだったが、ティアナがファントムブレイザーと口にする直前にサラが彼女の方に銃を向けた。しかも、ティアナの方に顔を向けずに。銃が向けられると同時に発射される魔力弾。なす術もなかったのはティアナの方だった。魔力弾が直撃してティアナは後方に倒れた。

「な…なんで……」

前もってティアナの位置を知っていたのでなかったら、あんなことは不可能なはずだ。

「なかなかいい作戦でしたよ。でも、私は最初からあなたがどこにいてどこを移動したか全部把握していたんです」

「どういう事？」

ティアナの質問にサラは少し間を開けて答えた。

「私は普通の魔導師ではないんです。ドクター・ゲオによって体を作り変えられた改造魔導師。それが私の正体です」

「ドクター・ゲオ？」

ティアナもその名を知っていた。いや、知っていて当然と言うべきだろう。ジェイル・スカリエッティと同じくらい危険な科学者だ。スカリエッティと違ってドクター・ゲオは、人の体に機械を組み入れることは好まず、あくまでも有機レベルでの改造にこだわった。

「ドクター・ゲオもフォーサイズの仲間だって言うの？」

「いいえ、博士とフォーサイズは依頼する依頼されるの関係でしかありません。それから、さきほどの話ですが私には相手の位置を気で察する能力があるんです。改造されてね。あなただけじゃなく、この付近にいる人たち全員の位置が私にはわかるんです。ですから、あなたがいくら小細工を仕掛けても私には通用しません。もう、これであなたに勝ち目がないことはわかったでしょ。降伏していただけませんか？」

「フォーサイズとは思えない台詞ね」

「ボスからは、あなたを殺せという命令は受けてません。邪魔する者は排除しろという命令は受けましたが。ですから、あなたが邪魔をせずに静かにしていてくれたら、これ以上の危害は加えないとお約束します」

「嫌だと言ったら？」

「だったら仕方ありません」

サラはトリガーに手をかけた。そして、少し間をあけて魔力弾を

発射した。魔力弾はティアナの左肩をかすれた。

「うっ…」

ティアナは左肩を手で抑えたが、痛みはあるもののかすれただけなので傷自体は大したことはなかった。

「これが最後の警告です。次はあなたの心臓に当てます。降伏してください」

どうやらさっきのはわざと外したようだ。だが、ティアナは疑問に感じた。なぜ、執拗に降伏を迫るのか。さっさと殺してしまえばいいことなのに。

（もしかしたら……）

有り得ないと思いつつもティアナはふと思い浮かんだことをサラにぶつけてみることにした。

「あんた、もしかして人を殺したことがないんじゃないの？」

「なっ」

さっきまで冷静だったサラが明らかに動揺しているのがわかった。

「どうやらビンゴのようね」

戦争を生業としているフォーサイズの幹部が人を殺したことがないというのは不思議な話だ。確信を突かれたサラは明らかに動揺していて手が震えて銃口がぶれている。いまなら、射撃魔法を放つてもサラは魔力弾で弾くことはできないはずだ。ティアナは勝負に出ることにした。だが、その前にサラに通信が入った。

「あっ、は、はいボス」

ジャッカルからようだ。ティアナにはジャッカルの声は聞こえない。

「……はい、わかりました。ただちに命令を遂行します……」
沈痛な面持ちで通信するサラ。通信が切れると、サラはデバイスにカートリッジをロードした。

「ボスから命令が下りました。あなたを殺せとの命令です。私がいまから撃つヒートブレットは並の防御魔法なら容易く貫通します。動かないでください。せめて、苦しまずに死なせてあげます」
さつきまでブレていた銃口がピタッと止まった。

「本心を言いますね。本当はあなただけは殺したくなかった。なぜだか、そんな気がするんです。よろしければ、あなたのお名前を教えてくださいませんか？」

「ティアナよ。ティアナ・ランスター」

「ティアナ・ランスター……さん」

サラは考え込むような顔をした。

「初めて聞く名前のはずなのに、どこかで聞いたような……。すみません、私たちどこかでお会いしませんでした？」

「いいえ？」

「そうですか……」

残念そうな顔で俯くサラに、ティアナはなんか申し訳ない気分になった。しかし、ティアナが知っているサラという名前の人に彼女は含まれていない。せめて、フルネームを教えてくださいなと。

「あなたのフル・ネームを教えてください。そうすれば思い出すかもしれないから」

だが、サラは首を横に振った。

「すみません、わからないんです。サラというのは私の本名ではあ

りません。私は自分の本名を知らないんです。改造された時に記憶を無くしましたから」

「記憶を無くした？」

「人形に人間としての記憶は必要ないそうです。ターゲットが私の知っている人間だった時に迷わずに任務を遂行できるようにするためだとか」

「ちよっ、人形ってあんた」

さっきまでのサラは確かに無機質な感じがするぐらい表情に变化のない娘だったが、いまのサラは明らかに感情のある人間だ。人形には意思がない。だが、サラはさっきティアナを殺したくないと自分の意思を示している。

「何、言ってんのよ。人形がさっきみたいな悲しそうな顔をする？」

あんたには自分の意思ってもんがあるでしょうが」

「だから私は欠陥品なんです。人形は何も考えずにただ命令されたことをやればいい」

「あんたはそれで納得しているの？」

「納得する、しないではありません。私にはこうして生きていくしか道は無いんです」

「生きた人形なんてない！」

いきなり大声を上げたティアナに、サラは驚いて目をパチパチさせた。

「あんた、自分の意思で体を動かせるでしょ？ だったら、人形なんかじゃない。立派な人間よ。命令されたからって何？ こんなこと嫌なんでしょ？ 嫌ならなんでフォーサイズにいるの？ 何か事情でもあるんなら力になるから話して」

「……」

サラは黙ってティアナの言葉を聞いていた。ここまで自分に対して熱く語りかけてくる人間はいなかった。力になるとティアナが言

ってくれたことは素直にうれしかった。だが、サラには命令に従うだけの人形以外の生き方は想像できなかった。

「ごめんなさい……」

普通の魔導師だったらティアナの言葉に従ったかもしれない。だが、サラにとって普通とは上の命令で動くことだった。それでも、世間一般の普通とはかけ離れているとわかるのは、普通の女の子だった頃の記憶がかすかに残っているからだろうか。ティアナにはなかった。サラが本当は普通の女の子として生きたいと思っているのを。そうでなかったら、相手に謝ったり目から涙を流したりしない人形だったら涙を決して流したりはしないはずだ。だが、サラは自分が涙を流していることに気付いていなかった。サラの銃口に魔力が集まる。

「さようなら……」

サラが引き金を引こうとしたその時、衝撃波が二人を襲った。

「なっ!？」

突然の衝撃波にサラが気を取られた隙をティアナは見逃さなかった。

「いまだ」

落ちていたクロスミラージュを拾ったティアナは、サラのデバイスの銃口に向けてトリガーを引いた。ティアナが放った魔力弾は、サラのデバイスの銃口に形成されていた魔力スフィアに命中した。

「くっ」

危険を感じたサラは咄嗟にデバイスから手を離れた。直後、彼女のデバイスは暴発を起こして壊れてしまった。いくら改造魔導師といってもデバイスが無かったら戦闘力は無いも同然だ。

「さすがですね。咄嗟の判断で不利だった戦いを逆転させるなんて」
サラは素直に敗北を認めた。そんな彼女にティアナは降伏を勧める。

「事情を話せば管理局も決して悪いようにはしないわ。私も弁護するから」

「お気持ちは嬉しいのですが、降伏はしません。フォーサイズに降伏は許されません。任務失敗は死あるのみです」

そう言うとサラは服に忍ばせていたナイフを自分の首に突き付けた。

「ま、待ちなさい！」

「さようなら」

サラはゆっくりと目を閉じた。ティアナがクロスミラーージュでナイフを狙うがもう間に合わない。だが、サラのさようならの言葉はまたも実現しなかった。ティアナもサラも何が起こったかわからなかった。突然、ナイフの刀身が割れてしまったのだ。

「……」

茫然とするサラ。そんな彼女に駆け寄ると、ティアナはサラの頬をぶった。

「あんたね、いい加減にしなさいよ。他人の命を奪うことも許されないことだけど、自分の命を粗末にすることだって同じくらい許されないことなんだから」

「ランスターさん……」

「あんた、自分の意思で行動しないといつまでも人形のままになるよ。それでもいいの？」

「……自分で決めتانです。私にはそうして生きていくしか道はな

いからそのように生きていこうって」

「嘘ね」

「えっ？」

即、否定されたことにサラは困惑した。。

「ある人からの教えでね。泣いている子の言うことはまともに受け取らないことにしているのよ」

「泣いている？ 私か？」

その時ようやくサラは自分が涙を流していることに気付いた。

「人形は涙を流さない。でも、あんたは涙を流している。これって、あんたが人間だっていう確かな証拠でしょ？ だったら、本当に自分がしたいことを自分で決めないと」

「私が本当にしたいこと……」

サラは自分が本当にしたい事は何か考えた。その時、ジャッカルから通信が入った。しばらく、ジャッカルからの通信を聞いていたサラだったが、やがて意を決して自分から通信を切った。それはフオーサイズでは絶対に許されない行為だった。

「自分で決めるって気持ちがいいですね」

サラは初めて笑顔を見せるのだった。

第10・7話【黒き太陽輝く刻】？（前書き）

地上本部がフォーサイズに襲撃されたとの情報を得た時空管理局はただちに救援部隊の派遣を決定したが、当然フォーサイズもそれを予想して部隊を展開していた。フェイトとヴィータは、すぐに急行しようとする空から現場に向かうことにしたが、フォーサイズの自律行動型航空兵器タイプ1スカイファイターの迎撃を受けてしまった。

「こんの野郎おおおつ！」

ヴィータは鉄球を次々とグラーフアイゼンで打ち出した。鉄球は誘導式であるため、回避されても相手を追尾するのだが、スカイファイターは何回も回避してなかなか撃墜することができない。当たりさえすれば、バリアやAMFが搭載されていないスカイファイターは簡単に装甲を貫通することができる。

「ちょこまかと動きまわりやがって」

さつきよりも動きが良くなっているスカイファイターにヴィータは焦りを感じていた。スカイファイターには学習機能があるらしく、いかに効率よく戦うか戦闘中に学習するのだ。しかも、それを他の機体と共有できるため戦闘が長引くにつれこれらは手ごわくなってくるのだ。ようやく、鉄球を上下から飛ばしてスカイファイターの左右の翼を破壊して飛行機能を奪ったヴィータはフェイトに叫んだ。

「このままじゃキリがねーぞ！」

この航空兵器たちのやらしいところは妨害に徹していることである。敵の撃墜が目的なら積極的に攻撃してくる。そうであれば、フェイト達も多少ダメージは受けるだろうが、もっと早くスカイファイターを全滅させることができた。だが、実際は地上本部に向かうのを妨害するのが目的なので、なるべく時間を稼ぐように動いてい

るのだ。

「このままじゃ……」

フェイトも焦っていた。さっき、地上本部がある方から爆発らしきものが見えて、衝撃波がここまできた。何が起こったかわからないだけに不安が増す。何度も突破を試みたが、スカイファイターは無理に突破しようとする者を自爆や体当たりをしてでも阻止するためその度に失敗していた。

「もっと戦力があれば……」

敵機の数も徐々にではあるが、減ってきている。時間をかければ全滅させることは難しくない。だが、フェイトたちの目的はこれらを全滅させることではない。いますぐにでも、地上本部に行かなくてはならないのだ。そのためには、もっと戦力が必要だった。と、その時、遠くから声が聞こえた。

「フェイトちゃん、ヴィータちゃん、下がって！」

二人が一斉にその場を下がった直後、大きな魔力波が飛んできてスカイファイターが一気に10機近く破壊された。二人は魔力波が飛んできた方を見て歓声をあげた。

「なのは！」

「まったく、遅ーぞ」

強力な援軍の到着に二人は喜びを隠せない。しかも、さっきの砲撃魔法でスカイファイターの数もかなり減らすことができた。

「よっしゃ、いまのうちだ。お前たちは先に行ってくれ。ここは私が引き受ける」

なのはの到着でここを突破するのは容易になった。だが、そのまま突破したのでは追撃を受けるからヴィータが一人でここを引きう

けようと言うのだ。

「だ、駄目だよヴィータ。一人でなんて」

二人は何度も背後を撃たれようとするのを互いにカバーすることで凌いでいた。一人だったらとうの昔に撃墜されていたかもしれない。

「私なら大丈夫だ。さっき、なのはがだいぶ減らしてくれたかな」
「で、でも……」

「いまは地上本部に向かうのが先決だ。ここで議論している時間はねえぞ」

ヴィータの言うことはもっともだ。フェイトも腹を決めた。

「うん、そうだね。ここをお願い。行こう、なのは」

「うん。ヴィータちゃん無理しないで」

「おう、お前もな」

それぞれの役割を果たすため3人は全力を尽くすことにした。スカイファイターの数が減ったことで突破は容易となった。突破した二人を追撃しようとするスカイファイターの集団の前にヴィータが立ちはだかる。

「おう、お前らあいつらを追いかけたかったら私を墜としてからにするんだな」

とはいえ、やっぱり一人で相手をするのはかなり辛そうだ。

「シグナムたちがいてくれたら助かるんだがな。ったく、あいつらどこで油を売ってやがるんだ？」

通信妨害のためシグナムとアギトの二人とは連絡が取れない。こっちに向かつてはいるはずだから、もうじきにやってくるだろう。だが、シグナムとアギトは最後まで来なかった。なぜなら、彼女た

ちは別の世界の山中で倒れているからだ。シグナムには左肩から右わき腹にかけて斬られた傷があった。

第10・7話【黒き太陽輝く刻】？

互いに全力を出し切ったのせめぎ合い。さくらはいまの自分では一か八かの一発勝負に賭けるしかないと思っていた。だが、それはあまりにも勝算のない賭けだった。10センチ近くもある体格差があるうえに、涼香には左腕が無いというハンデもあった。どう見てもさくらに勝ち目があるようには見えなかった。ところがぎゅっちゃん。予想に反して、さくらがルーシーを押しているのではないか。ルーシーも負けじと魔槍を持つ手に力を込める。しかし、押し返すことができない。

「だあああああっ！！」

さくらは一気にエネルギーを解放して、ルーシーを押し切った。ルーシーは後方にふっ飛ばされ、壁に激突した。壁は崩れ、その瓦礫にルーシーは埋もれた。

「おいおい、どうなってんだ」

とんだ番狂わせにデュオはシャロンに説明を求めた。

「し、知らないわよ」

シャロンにとっても、これは意外な展開だった。どう考えても、ルーシーがさくらに力負けするはずがないからだ。考えられるとしたら：

「あの炎みたいなのが何か関係しているのかしら」

さくらの体から発せられている炎みたいなもの。火ではない。魔力でもない。シャロンは知らなかったが、それは闘気だった。なぜ、ゼクエスの魔導師が魔闘士と呼ばれるか。それは、魔力だけではなく、闘気も帯びて戦うからである。そして、闘気は要するに気迫で

あり、言われるがままの人形になってしまっているルーシーは、どうしても気迫で劣ってしまうのである。だが、闘気を発することは体力を消耗させるため、いまのさくらには負担が重かった。さらに言えば、ルーシーはほとんどダメージを受けてはいなかった。瓦礫の中から立ち上がるルーシーには傷らしい傷は見当たらない。壁に衝突する寸前にA Iシールドで防御したのだ。

（やっぱり、そう簡単にはいかないか）

一撃で終わらせろうとはいささか虫が良すぎたかもしれない。だが、さくらは手応えを感じていた。パワーでは完全に勝っている。さくらも闘気のこととは知らなかったが、武術をやっていたおかげで本能的に闘気を出せるようになっていた。問題はさくらのスタミナがもつかどうかだ。

「あっ……」

急に目眩がさくらを襲った。クラッとなったさくらは倒れそうになるが、魔剣を地面に突き立ててどうにか堪えた。

（まずい、目が霞んできた…）

動けるようになったとはいっても、傷が完全に癒えたわけではない。ほとんど、気迫で立っているようなものだ。少しでも気が緩めば、さくらはすぐにでも倒れてしまう。そうなれば、殺されるのは確実だから、かなり無理をしていると自分でわかっていても気迫を保ち続けるしかない。

（長くはもたない…一気にケリをつける！）

さくらはルーシーに突進した。体が限界を越えるまでにルーシーを倒さなければさくらの命がない。さくらの猛攻にルーシーは防戦一方となる。

「かなりやばいわね、あれ…」

このままではルーシーがさくらに負けると判断したシャロンは、何か手を打とうと周りを見回した。

「この娘を使わせてもらおうわ」

シャロンは近くで倒れているノーヴェに近づいた。そのことに、さくらはもちろんスバルたちも気付いていない。さくらはルーシーを倒すことしか頭になかった。そして、ルーシーが見せたわずかな隙を見つけて彼女の腹に蹴りを放った。

「ぐはっ」

強力な一撃にルーシーはグラツとなった。当然、完全に無防備となるこのチャンスをさくらが見逃すはずはない。さくらはルーシーの胸に魔剣を突き刺そうと構える。だが、そこへシャロンが大声で叫んだ。

「そこまでよ！」

さくらが振り返ると、シャロンが倒れているノーヴェの首筋に注射器の針を当てていた。

「降伏しなさい。さもないと、この娘を殺すわよ。私はね、水を薬にも毒にも変えることができるのよ」

シャロンは自分の言っていることが嘘でないことを証明するため、注射器をノーヴェから離してさくらの方に向けた。透明だった中の液体が毒々しい紫色に変色していくのがさくらにもわかった。だが、さくらはシャロンがノーヴェから注射器を離した隙を突いて突進した。

「えっ？」

シャロンの目にはさくらが消えたようにしか見えなかった。次の

瞬間、目の前にさくらが現れてシャロンは叫ぼうとしたが声にならなかった。

「っ！」

その時、シャロンは自分の死を確信した。さくらの目は殺気に満ちていたからだ。だが、さくらは闘気による衝撃波でシャロンをふっ飛ばすだけで済ませた。ギリギリまでシャロンの顔を横に斬り裂くつもりだったのだが、彼女にも命を救われたことがあることを思い出して躊躇したのだ。殺しはしなかったものの、シャロンは気絶して脱落した。次に、さくらはデュオを睨みつけた。デュオには何の恩も義理も無いので遠慮なく殺すことができる。すると、デュオは両手をあげて首をフルフルと横に振った。何も邪魔はしませんという意思表示だ。

（今回は失敗だな、こりゃ）

完全に目論見は崩れた。敗因は敵の戦力を完全に把握しないまま攻撃を仕掛けたことだろう。フォーサイズでは最も博識だったシャロンでさえ、ゼクスについては半分も知らなかったのだ。

（問題はいつズラかるかだ）

デュオはルーシーがさくらに殺されるだろうと予測した。そして、次は自分の番だ。前にボコボコにされた恨みをまだ忘れてはくれてないだろう。デュオは、さくらとルーシーの戦いが再開されたら、それに乗じて逃げることにした。ジャッカルは怒るだろうが、命には代えられない。

「命あつての物種ってね」

だが、この後デュオが予想もしなかった事態が起きた。とんだ邪魔は入ったものの、さくらは完全にルーシーを押していた。もう、邪魔は入らない。今度こそルーシーを仕留めることができる。ルー

シーに対しても命を助けてくれた恩義がある。その恩人を殺すことに躊躇は微塵も無いといえば嘘になる。だが、今回のように関係の無い人たちまでも巻き込んでしまう事態が今後は起こらないとはいえないだろう。ここで決着をつけなければならぬ。さくらは今度こそ絶対にルーシーを殺すつもりでいた。

（私たちはもしかしたら一番の友達になれたかもしれない）

同時に絶対に許すことができない相手。もはや躊躇いは無い。さくらは次で終わると確信していた。一度は自分の死を覚悟したこともあったが、どうやら死なずにすみそうだ。だが、さくらがルーシーに最後の攻撃を仕掛けようとした瞬間、彼女の体は限界を迎えてしまった。

「ごふっ」

さくらの口から血が吐き出された。地面に飛び散った自分の血にさくらは何が起きたかすぐには理解できなかった。だが、最悪の事態だということだけはわかった。事態が悪化する前に決着をつける必要があると判断したさくらは攻撃をしかけることにしたが、ここでさらに無茶をしたために彼女の体にさらなる負担が加わってしまった。

「あっ……」

さつきよりもさらに激しい目眩がさくらを襲った。何とか魔剣を突きたてて倒れないように踏ん張るが、頭がクラクラして少しでも気が緩めば倒れてしまいそうだった。

「あともう少しだったのに……」

目の前の勝利が急に遠ざかっていくのを感じるさくらだが、それでも気力を振り絞って戦おうとした。しかし、目の霞みもさらにひどくなってルーシーの姿もまともに捉えることができない。さつき

のシャロンの行動は結果的にルーシーの逆転に寄与したことになる。そして、ルーシーはこの機会を逃しはしなかった。魔槍を大きく振り上げてさくらに向かうルーシー。さくらは反応が少し遅れた。

「くっ」

さくらは後方にジャンプしたが、反応するのが遅かったために振り下ろされた魔槍に右足が切断された。

「!!」

さくらは悲鳴をあげそうになったが、ルーシーに首をつかまれ声が出せなくなった。首を絞められてもがくさくらだが、右足からの出血もあって段々と動きが鈍くなった。

「あぶない」

ピクピクとした動かなくなったさくらを見て命の危険を悟ったスバルは彼女を助けようと駆け寄ろうとした。そこをデュオが襲った。デュオの魔力刃が二つ発生する杖型のデバイスの攻撃をかわしたスバルは、デュオに右パンチを繰り出した。しかし、デュオはそれをひょいっという感じでかわすと、スバルの顔をつかんだ。

「寝てろ」

そして、そのままスバルの後頭部を地面に叩きつけた。スバルを沈黙させたデュオは次にリインフォース?とギンガに矛先を向けた。

「面倒だ。二人同時に寝てくれよ。バスターショット」

デュオのデバイスから放たれた少し大きめの魔力弾は、途中で無数の小さな魔力弾に散開してリインフォース?とギンガを襲った。

「うわあああああっ」

小さな魔力弾といっても、同じく小さな体のリインフォース?に

は一発でも当たればダメージは大きいし、負傷中のギンガにしても何発も当たれば気絶は免れない。邪魔をしそうな人間を片づけたデューオは、さくらとルーシーの方に目を向けた。

「あっちも終わりそうだな」

さくららもう虫の息だった。リーガル・コアから絶えず血液を供給されているゼクススの魔闘士は、出血ではなかなか死なないが、窒息に対しては普通の人間と一緒にだ。死ぬ直前のさくらをルーシーは上に放り投げた。上に放り投げられたら当然、その次は下に落ちてくる。その先には魔槍の穂先があって、さくらら串刺しになるというわけ。ゼクススの魔闘士は臓器を傷つけられても時間が経てば再生魔法で自然と治癒される。しかし、リーガル・コアが破壊されれば死んでしまう。当然、魔槍の穂先が狙うのはさくららのリーガル・コアである。だが、さくららが落ち始めたところをフェイトが横から救出した。地上本部への攻撃を知って急行したのだが、フォーサイズの妨害でいままで時間がかかったのだ。

「さくら、しっかりして、さくら」

フェイトは必死に声をかけるが、さくららピクリとも反応しない。まだ、死んではいけないようだが、それも時間の問題といった感じだ。実際は、即死でない限りゼクススの魔闘士が死ぬことは滅多にない。さくららも時間が経てば自動的に再生魔法が発動して体が治癒される。とは言っても、腕や足が再生されるわけではない。あくまで体内の組織が再生されるだけだ。しかも、すぐにではなく徐々にしか再生されない。まあ、どっちにしてもさくらら危機的状況であるのは間違いない。

「急いで病院に連れて行かないと」

右足が切断されているだけでなく、口から血を吐いている。病院要急行だが、ルーシーがそれを見逃すわけがなかった。

「ストライクイーグル」

ルーシーが放った攻撃魔法がフェイトを捉えた。

「しまった」

さくらに気を取られていたフェイトは反応が遅れてしまい、回避も防御もできない状態にあった。そこへ、別方向から魔力弾が飛んできてルーシーの魔力弾を弾いた。

「大丈夫？ フェイトちゃん」

少し遅れてやってきたなのはが、フェイトに安否を確認する。

「私は大丈夫。でも、さくらが…」

さくらの状態を見て、なのはは即座に決断した。

「フェイトちゃんはその娘を本部に連れて行って。ここは私が食い止めるから」

「で、でも……」

いくらなのはでも、ルーシーやデュオを一人で相手するのは危険すぎる。

「大丈夫。すぐにヴィータちゃんも来てくれるし、はやてちゃんたちもね」

「…うん、そうだね。わかった」

いまはさくらを治療するのが先決だ。一刻も早く、さくらを本部に連れて行きシャルに預けて、すぐにここに戻ってくるのが最善だろう。そう思ったフェイトは、すぐにここから飛び去ろうとした。だが…

「そうはいくかよ」

フェイトの意図に気付いたデュオは、自分のデバイスの先端部分を取り外した。先端部分と柄はワイヤーでつながっていて、デュオはそれをびゅんびゅんと振り回してフェイトの方に投げつけた。デバイスの先端部分はフェイトの足に絡まり、フェイトは離脱ができなくなった。

「そーれい！」

デュオはフェイトを地面に叩きつけた。

「フェイトちゃん！」

なのはが駆け付けようとするが、それをルーシーが妨害する。

「お願い。そこをどいてくれないかな？」

しかし、ルーシーは何も答えない。一方、地面に叩きつけられたさくらとフェイトは、フェイトが自分の身を盾にしてさくらを衝撃から守ったので、さくらにはそれほどダメージはなかったがフェイトはかなりのダメージを受けてしまった。

「へっ、後から来たくせに嬢ちゃん連れて逃げようなんて、このデュオ・サウザーが許すかよ」

「！」

デュオの名を聞いたフェイトはピクつと反応した。メンバーの情報がほとんどないフォーサイズで名が知られている数少ない例外がデュオだった。

「あなたが黒い死神の……」

「へえっ、俺のことを知っているなんて光栄だな。そうさ、俺はフォーサイズの黒い死神デュオ・サウザーだ」

「4ヶ月前にフェディキアでカティン執務官を殺害したのはあなたね」

「誰だ、それ？ 悪いが殺した奴をいちいち覚えているほど俺は律義じゃないんでね。そいつ、あんたのいい奴かい？」

「私の先輩だ」

フェイトは怒りを抑えながら答えた。

「そうかい、敵討ちって奴か。いいぜ、あんたも同じところに送ってやるよ」

先端部分を取り付けたデバイスをデュオはフェイトに向けた。フェイトも同様にバルディッシュを構える。バルディッシュとデュオのデバイスは形状が似ていて先端部分から魔力刃が形成されるが、バルディッシュが一本なのに対しデュオのそれは二本という違いがあった。これは、一つ目の刃が相手のバリアジャケットを斬り裂いて、二つ目の刃が肉体を直接斬りつけるようにするためである。その二本の刃がこれまでどれだけの人たちを傷つけてきたのはわからないが、デュオが人を殺したことを何とも感じていないのがフェイトには許せなかった。だが、いまはさくらを連れてここを離脱するのが先決だ。

（なんとか脱出する機会を作らないと）

デュオの隙を窺うフェイトだが、彼女の意図を見抜いていたデュオはそうはさせじと襲いかかった。

「くっ」

止むなく応戦するフェイト。しかし、さっき地面に叩きつけられたダメージが大きくて、体が満足に動かない。さらに、デュオにはある特殊能力があった。

次回、星の光に祈りをこめて

第10. 7話【黒き太陽輝く刻】？（後書き）

とある世界のとある洞窟。3人の男たちが、石の棺のまわりに群がっていた。

「アニキ、これがお宝なんですかね？」

一番若い男がリーダー格の男に尋ねる。

「そんなの俺が知るか。こんなところに宝があるって話なんてそこに転がっているガキどもに聞いて初めて知ったんだからな」

リーダー格の男が指差した先には新一やゲコ太たちが額に銃弾を撃ち込まれて倒れていた。この3人は銀行強盗の一味で一時的にここに潜伏していたのだ。新一たちは運悪く彼らと遭遇してしまい殺されたのだ。殺す前に宝探しに来たという子供たちの話を聞いた3人は、彼らに宝を探させたがどこを探しても宝らしきものはなかった。ようやく、見つけたのがこの石の棺なのだ。

「だいぶ古いものみたいだが、何か金目の物があるかもしれない。おい、開けてみようぜ」

3人は棺の蓋に手をかけた。

「せーの」

石の棺は結構重かった。やっとの思いで蓋をどかせた3人は中を覗いてみた。

「なんだ、これ。ミイラがあるだけじゃねーか」

棺の中には古びたミイラがあるだけだった。ミイラには甲冑が着せられていたが特に高価なものではなさそうだ。

「けっ、くだらねえ。とんだ骨折り損だ」

無駄骨の礼にリーダー格の男はミイラの額に銃口を向けた。すると、突然棺が大きく揺れ出した。

「な、なんだ!？」

予期せぬ出来事に3人は狼狽した。洞窟全体が揺れていたら地震だと納得できるが、棺だけが揺れているのだ。やがて、揺れが収まるとリーダー格の男は恐る恐る棺の中を覗いた。その時、

「ぐわっ!」

棺の中から手が伸びてきてリーダー格の男の首を掴んだ。男の首を掴んだままミイラがゆっくりと起き上がった。ミイラは言うまでも無く死体だ。それが動いたのだから男たちはパニックとなった。ミイラはリーダー格の男の首をゴキツと折って手を離れた。若い男はリーダーやもう一人の男がミイラに殺されていくのをただ見ているしかなかった。そして、ミイラはその若い男に目を向けた。

「く、来るな、来るな、来ないでくれ…」

若い男は逃げようともがくが、腰が抜けてしまっている。ミイラは若い男の顔を掴んだ。

「お前の顔をいただくぞ」

「ミ、ミイラがしゃべったあ?」

間の抜けた声で驚く若い男だが、それはすぐに悲鳴に変わった。

「熱っ、アチアチアチアチ…!!」

若い男の顔から蒸気がのぼった。かなりの熱を帯びているらしく、若い男は必死にミイラの手を解こうと足掻くが、ミイラは意外と力持ちだった。やがて、若い男は動かなくなり、ミイラが手を離すと男の顔面は大きく焼けただれていた。ミイラは若い男の顔を掴んで

いた右手を今度は自分の顔にあてた。

「魔技、顔移し」

ミイラが顔から手を離すと、なんとさっきまでミイラ顔だったのが若い男の顔になっていた。ミイラは若い男から顔を盗み取ったのだ。盗んだのはそれだけではない。男の知識までも盗んでいた。

「……そうか、俺がこの中に閉じ込められて3000年も経つのか」
ミイラは棺の中から剣と楯を取り出した。

「よくも、俺をこんなものに閉じ込めおって」

鞘から剣を抜いたミイラはその剣で棺を一刀両断にした。これで腹の虫がおさまったわけではないが、一つだけいいこともあった。それは、3000年後に解放されたことだ。

「ふはははははっ、まだ俺にもチャンスがあるということだな」
ミイラの笑い声が洞窟内に響き渡った。

第11話【星の光に祈りをこめて・前編】？

「お話を聞かせてほしいんだけどな」

なのはは希望を口にしたものの、それが聞こえなかったのかルーシーは何も返答しない。聞こえていたけど無視したのかもしれない。ただ言えることはルーシーにはなのはの言葉には聞く耳を持つ気は無いということだ。対話や説得が不可能であれば戦うしかないが、さしものエース・オブ・エースもルーシーに対しては慎重にならざるを得なかった。いままで戦ってきた誰よりも、ルーシーが遥かに強いのは倒れているスバルたちを見れば一目瞭然だ。それと、やりにくいというのもあった。いくら強くても、ルーシーはまだ年端もいかぬ少女だ。全力で潰しにかかるのは気が引けた。

（なんとか戦わずにすませたいけど…）

だが、ルーシーはそんななのはの思いを知ってか知らずか魔槍を振り上げて襲ってきた。接近戦は絶対に不利と見たなのはルーシーとの距離を取ることにした。つまり、逃げるということ。離れた相手に対する攻撃系魔法はミッド式に頼るルーシーは、射撃戦では同じミッド式でははるかに上位にあるなのはの敵ではなかった。ただし、ルーシーにはA Iシールドがあるので、なのはの攻撃はすべて無効化される。

「ストライクカノン」

ルーシーはなのはに向けて砲撃魔法を放った。以前は発射できるまでに時間がかかるので実戦では一度も使用しなかったが、ゼクスの帝王候補になったことで魔力も格段にアップしたのでさほど時間をかけずに撃てるようになっていた。さくらとの戦いで使用しなかったのは、使ってもA Iシールドには無力だからだ。同じ無力化されるにしても、射撃系魔法の方がまだ魔力の消費量が少なくてす

ぐ撃てる分使い勝手はあった。自分に迫りくる砲撃魔法になのはも砲撃魔法で対抗する。

「エクセリオンバスター」

二つの砲撃魔法が激突した。威力はほぼ互角のようだ。だが、砲撃魔法にはなのはに一日の長がある。

「ブラスターシステム、リミット1リリース！」

「Blast er set」

「ブラスター、シュート！」

ブラスターシステムで威力が増したなのはの砲撃魔法は、ルーシーのそれを完全に圧倒した。魔力波の勢いは、ルーシーに回避する余裕を与えず彼女を完全に捉えた。だが、魔力波はルーシーの手前で止まり、それ以上は全く進まなかった。AIシールドが展開されているからだ。

「ハアッ、ハアッ…」

息を切らしながらなのはは、その様子を眺めていた。あのシールドを突破するのは不可能に近い。しかし、なのははフェイトからAIシールドの弱点を聞いていた。レイジングハートにカートリッジがロードされる。

「Axel Shooter」

レイジングハートから発射されたいくつもの魔力弾がルーシーを捉えた。例によってAIシールドを展開するが、魔力弾は全方位からルーシーに襲いかかった。AIシールドは一方向しか防御できない。だから、多方面からの攻撃には対処できないのだ。

「プロテクトディフェンサー」

ルーシーはミッド式の防御魔法で攻撃を防いだ。AIシールドに

は比べるべくもないが、それでもかなり強固な防御ではある。だが、なのはの砲撃魔法には無力だ。

「デイベインバスター！」

A Iシールドのもう一つの弱点。それは、別の防御魔法と同時に発生させることができないことだ。なのはは別にそのことを知っていたわけではない。ルーシーがバリアタイプの防御魔法を展開しているのを見てふと思いついたのだ。なのはの放った砲撃魔法は完全にルーシーを捉えた。

「くっ…」

防御の切り替えが間に合わなかったルーシーはミッド式の防御魔法でなのはの砲撃魔法を受け止めるしかなかった。だが、その程度の防御では魔力波を防ぐことはできなかった。バリアを突破した魔力波はルーシーを直撃した。気絶したルーシーは真っ逆さまに落ちて行った。魔槍がA Iシールドを発生させたので地面との激突は避けられた。

「ちょっとやりすぎちゃったかな？」

地面に倒れたまま動かないルーシーに、なのはは不安になった。常にA Iシールドに守られていたルーシーにいきなり砲撃魔法が直撃したのだ。心配にもなる。自分も地面に着地したなのはは倒れているルーシーの体を揺さぶった。

「ん……」

ルーシーはゆっくりと目を開けた。それを見てなのはは安堵した。

「気がついた？ よかった。怪我は無い？」

心配そうに自分を見ているなのはにルーシーは困惑した。

(……誰?)

実はルーシーはなのはの砲撃魔法をまともにくらった衝撃でディアスの呪縛から解放されていた。その間の記憶はない。だから、ルーシーは目の前の女性が誰であるとか、なんで自分がこんなところにいるのかさえわからなかった。

一方、フェイトは地面に叩きつけられたダメージで動きが鈍くなったこともあって、デュオの攻撃に対し防戦一方となっていた。

「どうした、どうした? 仲間の仇を討つんじゃないのか?」

デュオの挑発にフェイトは顔を険しくする。機動戦を得意とするフェイトにとって、体の動きが鈍るということは問題だった。しかし、骨折したとかじゃないわけなくダメージもすぐに軽減される程度でしかない。それと、フェイトはデュオの攻撃パターンが読めるようになっていた。デュオは年齢はフェイトより下だが、力は女性のフェイトよりあるし、動きも決して悪くない。だが、攻撃がやや単調のようだ。幾人もの腕利きの魔導師を葬ってきた者にしては少し意外だとフェイトは思った。

(あまり時間はかけられない)

フェイトは反撃に出た。今度はデュオが防戦一方となる。

「ちっ」

分が悪いと判断したデュオは後ろにさがって態勢を立て直すことにした。だが、フェイトはそんな余裕を与えるつもりはなかった。

「一気にケリをつける。ライオット!」

「R i o t B l a d e」

バルディッシュが長剣形態のライオットブレードに変形した。この形態は威力が上がる分フェイトの魔力をかなり消耗する。フェイ

トのセリフにもあるように、一気に勝負をつけるための形態なのだ。

「へえ、それがあんたの切り札ってわけかい。んじゃ、どんなもんか見させてもらおうか！」

再びデュオが打って出た。二つのデバイスが激しくぶつかり合う。だが、やはり威力の差がありすぎた。何回か斬り合ううちにデュオのデバイスの魔力刃が一つ砕け散った。

「いっ？」

デュオは目を疑った。魔力刃が砕け散るなんて見たことがなかったからだ。

「おいおい、マジかよ」

追い込まれていく状況にさすがにデュオも焦りを感じた。フェイトから一旦離れたデュオは、砕けた方の魔力刃を再び発生させて、二つの魔力刃を一つにまとめた。これで、さっきみたいに簡単には碎かれる心配はなくなり威力も増した。だが、それだけでは勝てないこともわかっていた。

「思っていたよりやるじゃねーか。いままでの奴と全然レベルが違うな。さすがの俺もこのままじゃヤバイようだ。だから、俺も切り札を使わせてもらう」

デュオの切り札。それは自分の姿を周囲の色に同化させることで他人から見えなくすることだ。ただ見えなくなるだけではない。デュオは気配も完全に消していた。見えるのはデバイスから出ている魔力刃のみであるが、それが消えると完全にデュオの姿は見えなくなった。

「……！」

フェイトは感覚を最大限に研ぎ澄まして気配を探ろうとするが、

まったく探知することができない。どこにいるかわからない敵にフェイトは打つ手がなかった。焦るフェイトの背後に魔力刃が突然現れた。

「っ！」

背中を斬られたフェイトは、すぐさま背後を振り向き反撃しようとしたが、すでに魔力刃も消えていた。こうした、攻撃の時だけ魔力刃を出して一撃するとすぐに魔力刃を消すといった一撃離脱みたいな攻撃が繰り返された。その度にフェイトに傷が刻まれていく。そんなに深い傷ではないが、それが何回も繰り返されることでフェイトは徐々に弱っていき、ついには片肘を地面につくまでになった。

「へっ、さっきまでの勢いはどうした？」

デュオはすでに勝った気でいた。彼はこの能力を駆使して負けたことが一度も無かった。ただ難点があるとすれば、透明化している時は魔力をそんなに出せないのも魔力刃の威力も少し減少するくらいだ。しかし、そんなことはフェイトにとって気休めにもならなかった。

（何とかしないと）

このままではなぶり殺しである。だが、相手の姿が見えない事には手の打ちようがない。打開策を考えている間にもデュオの攻撃は容赦なく続く。

「安心しな。あんたのそのキレイな顔だけは傷つけずに残しておいてやるからよ」

デュオのからかうような声が聞こえてくる。全身傷だらけのフェイトはこれ以上攻撃を受けると反撃もままならない状態になりつつあった。

（せめて足音が聞こえたら）

しかし、デュオは忍び足も得意で足音はほとんどしない。わずかに足音がする時もあるが、戦場の喧噪に紛れてフェイトの耳には届かなかった。見えないし感じないし聞こえないとあっては手を上げるか白旗を振るしなくなってしまう。ここで、ふとフェイトはあることに気付いた。

（そうか、あくまで見えなくなったただけで消えたわけじゃない）

フェイトは顔を俯かせた。デュオに視線を悟らせないためだ。デュオにわからないようにフェイトは周囲の地面を注意深く見まわした。すると、

（いた！）

デュオの位置を確認したフェイトはデュオが近づいてくるのを待った。一方、デュオはフェイトが自分の位置と移動を把握していることに気付いていなかった。

（顔を伏せてやがる：観念したか？ だったら楽にしてやる）

デュオはフェイトの首を狙うことにした。足音を立てないように静かに忍び寄る。そして、フェイトの左横に立ったデュオは魔力刃を発生させたデバイスを一気にフェイトの首めがけて振り下ろした。だが、フェイトはバルディッシュをライオットザンバーの二刀流に切り替えてデュオのデバイスを受け止めた。

「な、なに！？」

自分の攻撃がまるで予測されたかのように受け止められたことにデュオは動揺した。たとえば、姿を見えなくしたとしても、地面を歩いて移動することには変わりはない。フェイトはデュオが地面を踏むことで生じる砂や瓦礫などの小さな動きを探ることで彼の位置を特定したのだ。デュオの姿が徐々に現れてきた。

「ちっ」

いったんフェイトから離れようとしたデュオだったが、フェイトはこの機を逃さなかった。

「ハアッ！」

ライオットザンバーを一つに連結してデュオを横薙ぎに斬り払った。

「ぐっ！」

デバイスの魔力刃でライオットザンバーを受け止めるデュオだったが、それは無駄な抵抗でしかなかった。またしても魔力刃は碎かれ、デュオはライオットザンバーの一撃をくらってふっ飛ばされて塀に衝突した。かなりの勢いで衝突したが、それでもデュオはゆっくりと立ち上がった。しかし、その足下はおぼつかない。デュオはフラフラになりながらもバルディッシュを指差した。

「へっ、それがあんたの本当の切り札だったんだな。俺の負けだ。潔く認めるよ」

降伏の証にデュオは両手を後頭部に回した。やけにあっさり投降の意を示した事にフェイトは不審を感じたものの、デバイスも無く立っているのもやつの状態では何もできないだろうと判断して受け入れることにした。

「地上本部に対するテロ行為の現行犯であなたを逮捕します」

「そりゃ、どうも」

デュオは両手を前に差し出した。フェイトがそれにバインドをかけようとした瞬間、いきなりデュオが抱きついてきた。

「な、なにを！」

「へへっ、一緒に吹き飛んでもらうぜ」

その言葉にデュオが自爆するつもりだと察したフェイトは必死に離れようとするが、強い力で抱きしめられているため容易には離れられない。

「じたばたすんなよ。心配はいらねえぜ。痛みや苦しみを感じずに死なせてやるからよ。まあ、さっき約束したそのキレイな顔を残しておくってのは果たせねえけどな。それは、あの世で何回も謝るから勘弁してくれ。そんじゃ、一緒に死出の旅路といこうぜ」

フェイトを抱きしめる力が強くなる。恐らく自爆する寸前なのだろう。必死で拘束から逃れようともがくフェイトにデュオはニヤツと笑いかけた。もう駄目かと諦めかけた時、横から魔力弾が飛んできてデュオの側頭部に当たった。グラツとなったデュオはそのまま倒れた。フェイトが弾が飛んできた方を見ると、ティアナがクロスミラージュを構えて立っていた。サラを拘束して、すぐに駆け付けてきたのだ。

「大丈夫ですか？ フェイトさん」

「ありがとう、ティアナ。うん、大丈夫だよ」

そうは言ってもフェイトは全身傷だらけで体力も消耗しているようだった。ヨロツとよろけたフェイトをティアナがあわてて支える。

「フェイトさんは少し休んでいてください。あとは私がやりますから」

しかし、ティアナも無傷ではない。それにフェイトは後輩に仕事をやらせて自分は休むというタイプではない。

「私は大丈夫。それより、さくらをお願い」

「あ、はい」

ティアナはさくらの方に目をやった。右足が無いことに気付いた

ティアナは絶句した。

「ひどい……」

同時にさくらを守れなかったことへの自責の念もこみ上げてくる。それはフェイトも同じだった。いや、それ以上か。

「さくらを安全な場所をお願い。私はなのはそのところに行くから」
「……わかりました」

いまはさくらの安全を確保することが先決だ。ティアナはフェイトの指示に従うことにした。

さて、正気にもどったルーシーだが、なのはから状況を知らされて愕然となった。

「そんな……」

倒れている人、破壊された建物、それらはルーシーの故郷で彼女がうんざりするほど見てきた光景だった。そんなのはもう嫌だからルーシーはゼクスエスの帝王になろうとしたのだ。それなのに、自分でこんな光景を作り出してしまったことに愕然としてしまったのだ。

「あなたが悪いわけじゃない。操られていたんだから」

なのははそう慰めるが、ルーシーの気持ちは晴れない。だんだん悔しさがこみ上げてくる。

「私は…私はこんなことのために、ゼクスエスになったんじゃないのに……」

皆が平和に暮らせる世界を作りたいがために帝王候補となったのに、戦争を商売にしている連中に良いようにされたなんて考えるだけでも腹が立つ。いますぐにでも殴りこみたい気分だ。フォーサイ

ズの指導者の正体は知っている。新興宗教の教祖だ。ルーシーからそのことを聞きだしたなのは連絡ですでに局員が逮捕に向かっている。これでこの事件は解決となるはずだった。だが、事態はそうすんなりとはいかなかった。いきなり、なのはとルーシーの前に空間モニターが現れたかと思うと銀色の仮面をつけた男が映し出された。ダニエル・ジャツカルだ。ルーシーから人相風体を聞いていたのはが確認する。

「あなたがフォーサイズのリーダーね？」

「そうだ。お初にお目にかかる管理局の犬め」

ジャツカルの侮蔑的な台詞になのはは表情を陰しくする。

「もうすぐ、あなたを逮捕しに局員がそちらに到着します。無駄な抵抗をせず投降しなさい」

「残念だがそうはいかない。我々は目的を果たしていないのだからな。ところで、そっちでへたりこんでいる奴がいるが、どうやらディアスの呪縛から解放されたみたいだな。そんなことは絶対にあり得んのだが、いやはやゼクスというのは底知れぬ力があるようだ。だが、俺がそんな事態を想定していなかったと思うか？」

直後、ルーシーが悲鳴をあげた。

「きゃあああああっ!？」

なのはが驚いて振り向くと、ルーシーの胸の中が光っていた。

「こんなこともあるのかと、ディアスをあらかじめ体内に埋め込んであったのだ。こういうのは例が無いからうまくいくかどうかかわからんが、完全にそいつの心がディアスに支配されたらもう二度と元にはもどらん」

「そんなことはさせない!」

「貴様がどう足掻こうとその娘は俺の操り人形になるしかないのだ。

それとも、そいつの胸を裂いてディアスを取り出すか？」

そんなことすればルーシーは死んでしまう。ルーシーは必死に抵抗するが、心を完全に支配されるのは時間の問題だった。

第11・5話【星の光に祈りをこめて・前編】？

ルーシーは必死に自分を保とうとするが、意識が薄らいでいくのを止める術を持たなかった。いかなる攻撃も防ぐA Iシールドも己が体内には何の役にも立たない。

（このままじゃ……）

完全にジャッカルに洗脳されてしまったら世界はフォーサイズのいいようにされてしまう。それだけはさせじとルーシーは魔槍の穂先を自分の胸元に向けた。それを見て、なのはが制止する。

「何をする気？ バカな真似は止めて！」

「止めないでください。これしか方法はありません」

ルーシーがとった最後の手段、それは自決することだった。彼女とて死にたいわけではないが、ディアスに心を完全に支配されてしまったらそれは死んだのと同じだ。もう、意識は無くなりかけている。

「ごめん…アブラヒム……」

かつて自らを犠牲にして敵の襲撃から逃がしてくれた仲間に、自ら命を断つことを謝罪してルーシーは魔槍を自分の胸に突き刺そうとした。だが、魔槍の穂先はルーシーの皮膚に触れるか触れないかのところで止まった。まさにギリギリのところでルーシーは完全に意識をディアスに支配されてしまった。

「……」

ルーシーはゆっくりと立ち上がると、指を魔槍の斧の刃にあてた。指先の傷口から刃に血が流れる。そして、ルーシーは魔槍をブンブンと振り回して、その後に地面めがけて振り下ろした。魔槍が振り

下ろされたところからなのはに向かって地面に亀裂が生じ、危険を感じたなのは空に逃げた。その直後、なのはがいた場所が大きく崩れ、なのははゾッとなった。そこをルーシーが襲った。気を取られていたなのはは不意を突かれた形となった。

「Protection」

レイジングハートが防御を展開したが、ルーシーの魔槍は防御をあっさりと破壊してなのはを一撃した。なのははレイジングハートで受け止めるも堪え切れずふっ飛ばされて、建物の壁を貫通して床に激突した。ものすごい衝撃だったが、なのはは辛うじて生きていた。

「バリアジャケットがなかったら即死だった……」

しかし、衝撃をすべてブロックできたわけではないので、ブロックしきれなかった衝撃によるダメージでなのはは全身に痛みを感じていた。それでも、痛みを堪えて立ち上がったなのはは、ルーシーが自分に魔槍の穂先を向けて先端に魔力を集束させているのを見て目を疑った。

「集束型の砲撃魔法？」

難易度の高い集束型砲撃魔法を年端もいかない少女が撃とうとしている。しかも、かなり規模のでかい砲撃魔法だ。

「駄目、体への負担が大きすぎる！」

自身も幼い頃に大規模砲撃魔法を何度も放って体を壊したこともあるなのはは懸命に制止するが、いまのルーシーにその言葉は届かなかった。

「スピリットクラッシャー」

ルーシーは躊躇なく砲撃魔法を放った。もう、回避は間に合わない

い。そこへ、横から魔力弾が飛んできてルーシーの砲撃魔法の弾道をそらした。魔力弾を放ったのはフェイトだった。

「フェイトちゃん！」

「なのは、大丈夫？」

まさに間一髪だった。しかし、これで2対1となり、なのはたちが有利となった。いかにゼクエスの帝王候補であっても、管理局が誇るエース二人を同時に相手するのは荷が重いだろう。

「うん、私は大丈夫。それより……」

なのははルーシーの身に起きたことを話した。それに対してフェイトは驚きはしなかった。ある程度予想していたことだった。しかし、直接体内にディアスを埋め込まれているとなると厄介だ。非殺傷設定の攻撃魔法で中のディアスだけを撃ち抜く方法があるが、人体へのダメージが全くないわけではないし、ルーシーの動きを止める必要がある。さらに、AIシールドをどうするかという問題もあった。何度かゼクエスの帝王候補と戦ったことがあるフェイトは2対1でも油断はできないと考えていた。

（説得できたらいいけど……）

だが、ルーシーとしての意識が完全になくなっていれば説得は不可能だ。仮に辛うじて残っている程度であっても、よほど彼女に近い人間でなければその心を打つことはできないだろう。なのはは、ルーシーとはこれが初対面だし、フェイトも最初に会った時以来ほとんど接触はしていない。頻繁に会っていたと言えるのはさくらだが、さくらをいまのルーシーに会わせるわけにはいかない。すると、ルーシーの近くに空間モニターが現れてダニエル・ジャツカルがルーシーに指示を出した。

「その二人は後回しだ。さきにもう一人の帝王候補をやれ」

ルーシーはコクツと頷くと上空からさくらを探した。

「いけない、さくらが」

いまのさくらは、襲われたらひとたまりも無い。フェイトはルーシーを取り押さえようとするが、その前にルーシーはさくらを見つけてしまっていた。

その頃、さくらは夢を見ていた。夢の中でさくらの目に映っているのは、道場で互いに正座して向き合っている幼い頃の自分と母親の姿だった。

「これって、初めて稽古した時の……」

その時のことをさくらはいまでも覚えていた。稽古を始める前、母はさくらにこう尋ねた。

「さくらはどうして強くなりたいの？」

それに対して、さくらの返答はこうだ。

「正義の味方になって悪者をいっぱいやっつけたいから！」

なんの迷いもなく元気いっぱいに答えるかつての自分に、さくらはいますぐにでもその口を塞ぎたかったが動くことも喋ることもできない。あの時は別に何も思わなかったが、いまこうして見るとかなり恥ずかしいことを言っていたんだなとさくらは今更ながらに後悔した。若さゆえの過ちというものは認めたくないものと言うが、この過ちは素直に認めることができる。

「そう。さくらは正義の味方になりたいんだね」

「うん！」

またしても元気よく答える昔の自分に、さくらは「もうやめて」

と叫びたい気分だった。しかし、同時に羨ましい気持ちにもなった。この時はまだ母も元気だった。そして、幼い自分が見せる満面の笑顔。それは、さくらが忘れかけていた表情だった。

「そっか、私ってあんなに笑えてたんだ…」

小学校に上がる前の自分の無邪気な笑顔と母の優しい笑顔。どちらもいまのさくらが無くしていたものだった。いまにして思うと、この時が自分にとって一番幸せな時期だったかもしれない。だが、ゼクエスの帝王になれば、その幸せだった時期を取り戻すことができるかもしれない。だが、そのためにはルーシーを倒さなくてはならない。それは母の望まないことだった。

「でもねさくら、本当の強さは相手を倒すためにあるものじゃないのよ。誰かを守るためにあるものなの。ちよつとさくらには難しかったかな」

母の言うとおりに、この時のさくらはあまり理解できていなかった。そして、それから程なくして母が病に倒れたことで、さくらは母の教えをしつかりと受け入れることができなかった。最愛の母を失った悲しみを紛らわすため、さくらは剣道に夢中で取り組むようになり、やがてそれは強さだけを追い求めていくようになった。強さイコール相手に勝利することと思ひ込んでしまったさくらは、ただ相手をねじ伏せることしか頭にないまま剣道を続けていた。少しでも母の強さに近づきたいがために。そうすることで少しでも大好きだった母を取り戻せると信じて。だがそれはさくらの思い違いであった。ここで場面が変わり、母が入院していた病院の病室となる。病気で余命いくばくもなくなった母は泣きじゃくるさくらにこう諭した。

「泣かないで、さくら。母さんはずっとあなたの心の中にいるから。ずっと、あなたを見守っているからね」

その翌日、母は他界した。そのショックが大きすぎて、母の言葉はほとんど頭に残らなかった。だが、こうして母の言葉を再び耳にしたさくらは自分の胸に手をあてた。

「母さんはずっと私の中にいた……？」

だとすれば、いままで母を追い求めて剣道に打ち込んでいた自分は間違っていたというのか。いや、さくらはいま気付いた。自分が追いつめていたのは母の強さだけだということを。しかし、母は強さだけではない。優しさも兼ね備えた人だった。母のことを何も理解していなかったことに気付いたさくらは愕然となった。

「母さんも、フェイトさんたちも皆強くて優しい人たちだった……。でも、私は違っていた……」

ただ相手を倒すことしか頭になかった。試合中や戦闘中は相手のことを慮ることもなかった。そのことに対して疑問を抱くことは無かった。戦いである以上、勝つのは至上命題であるからだ。そう思っていた。

「でも、それだけじゃ駄目な時もある」

相手を倒すことだけを考えていては何も解決しない難題にさくらはいま直面している。たとえ、向こうに聞く耳が無かったとしても、それで話し合いの余地無しとするのは早計だったのではないだろうか。フェイトは仲間を傷つけられてもなおさくらを説得しようとした。

「大事なのは戦いに勝つことじゃなくて、戦いを終わらせること」
ゼクエスの帝王候補の戦いはどちらかが死ぬまで終わらない。しかし、それはさくらたちの意思に関係なく決められたルールだ。

「戦っているのは私たち。だから、戦いのルールも自分たちで決め

る。私は死なない。そして、彼女も死なせない」
そう心に決めた瞬間、さくらは目を覚ました。

第12話【星の光に祈りをこめて・後編】？

さくらが目を覚ましたのは、ルーシーが彼女の前に着地した直後だった。続いて、それを追いかけていたなのはとフェイトも着地する。さくらを狙うルーシーに立ちほだかりながら、フェイトは後ろのティアナに指示を飛ばした。

「ここは私となのはに任せてさくらを連れて逃げて」

「……はい！」

本当は自分も残ってなのはたちと戦いたいティアナだが、自分がいっても何の役にも立たないのはわかっているので、さくらの安全を確保することを優先することにした。だが、さくらはここから離れるわけにはいかなかった。その場から離れようとするティアナの袖を引っ張る。

「ま…待って…」

「えっ？」

「お願い…少しでいいから…待ってください…」

「で、でも……」

ティアナは困惑した。さくらが必死に訴えているのはわかるが、いまの弱々しい声を聞けば一刻も早く治療を受けさせられなければならないこともわからない。

「お願い…私に…彼女を…助けさせて……」

「助けるって……そんな体で無理よ」

いまのさくらは、まともに動くことも声を出すこともできない。それでも、さくらの決意は変わらない。困ったティアナはフェイトに助けを求めた。フェイトならさくらも言う事を聞くかもしれないからだ。これ以上、さくらを危険にさらしたくないフェイトも説得

しようとしたがその前になのはが、

「わかった。じゃ、やってみようか」

「ええっ!？」

フェイトは驚きの声を上げた。さくらがまともに動けないのはなのはにもわかるはずだ。

「ちょっと、なのは…」

戸惑うフェイトになのはは静かに首を横に振る。

「心配ないよフェイトちゃん。きっと大丈夫だから」

「……わかった」

不安はあるが、フェイトはなのはの言うとおりにすることにした。なのはは、さくらがルーシーを助けたいと言ったことに期待したいと思ったのだが、フェイトもいままでルーシーを倒すことしか頭になかったさくらが、ルーシーを助けたいと思うようになったことが嬉しかった。なのはは、さくらにルーシーが体内のディアスを心を支配されていること、ルーシーを助けるにはそのディアスを破壊するしかないが、それには彼女を回避も防御もできない無防備な状態にする必要があることを説明した。

（そうだったのか……）

どうりでルーシーの様子がおかしかったわけだ。自ら望んであんなったはずもないから、捕まって強制的にということになる。そして、それはルーシーがフォーサイズの襲撃からさくらを助けたあの時の後だろう。

（私を助けたから……）

戦うしかないと思っていた。でも、いまは違う。お互いに相手を助けたいと思うようになっていた。

(今度は私が彼女を助ける)

「どうやって? さくらはルーシーの心が完全に失われたわけではないと思っていた。ルーシーの奥底に眠る彼女の心を再び表に出すことができれば、あとはフェイトたちが何とかしてくれる。問題はルーシーの心に直接アプローチすることができるかどうか。さくらは魔剣に訊いてみた。すると、魔剣はちょっと間沈黙してから答えた。

「……That is not possible. but I do not recommend it. Because it will be risky」

「危険って……?」

「When the worst, you may die」

たとえ生きられたとしても確実に後遺症は残るという。さすがに死ぬかもしれないと言われて、さくらも躊躇しかけたが、それしかルーシーを助ける方法は無いのならとすぐに決心を固めなおした。だが、さくらが死ぬかもしれないと聞いてフェイトが反対した。いまのさくらの状態を見れば当然だ。

「駄目だよ、さくら。そんなの」

「フェイトさん……」

自分を想うフェイトの気持ちをうれしく思いながらもさくらは決心を変えるつもりはなかった。

「し、心配しないで……ください。私、決めたんです……私も……死なないし、彼女も死なせないって……」

「さくら……」

「それに……もし……この世に……神様がいるのなら……誰かを助け……たい私の気持ちは通じると……思うんです」

心配かけまいとできるかぎりの精一杯の笑顔で語るさくらに、フ
イトはそれ以上反対することはできなかった。本当はまだ反対な
のだが、さくらが決心を変えることはないだろうからだ。

「わかった。でも、約束して。さっきの誰も死なせないって君が言
ったことを守るって」

「はい……」

さくらは頷くと魔剣を地面に突き立てて目を閉じて精神を集中さ
せた。ディアスによって強制的に閉じ込められたルーシーの心を再
び表に出すには、彼女の精神に直接侵入するしかない。しかし、そ
れにはリーガル・コアの力を使う必要があり、ゼクエスの帝王候補
にとつての心臓でもあるリーガル・コアの力を使うことは当人にか
なりの負担を強いることになる。ただでさえ満身創痍のさくらにと
つては、命の危険すらも考えられる非常にリスクの高い方法である。

二人の持つリーガル・コアは、元々ひとつだったものを二つに分
けたものであり、ふたつのコアはどんなに離れていても特別な何か
でつながっていた。それを利用すれば相手の位置を把握することも
可能なのだが、如何せんさくらとルーシーは帝王候補になって日が
浅いため、そのことにまだ気づいていなかった。精神を集中させた
さくらは、真っ暗な中で前方に光っている物体があるのを感じた。
おそらくそれがルーシーだろうと判断したさくらは、ただ一心にル
ーシーの心に接触することだけを念じた。すると、急に体が軽くな
ったような感覚に襲われた。いや、軽くなったというよりも浮かび
上がるといった感じか。最初は錯覚かと思ったが、そうではなかつ
た。さくらの意思が精神体となって彼女の体から脱け出したのだ。

「これって……」

まるで魂が体から抜け出したような感覚にさくらは少し戸惑った。
周りは真っ暗で見えるのは先ほどの光の塊だけだ。

「……よし！」

意を決したさくらは、その光に向かって行った。離れた所からみたらただの光る物体にしか見えなかったが、近づいてみるとルーシーが壁に閉じ込められた状態でいるのが見えた。

「ブランケットさーん！」

さくらは力いっぱい叫んだが、ルーシーは何も反応を示さなかった。

「これを壊せばいいのかな？」

とりあえず壁から浮き出ているルーシーに触れてみる。すると、さくらの脳裏にある光景が浮かび上がってきた。

「な、なに？」

さくらが戸惑うのも無理はなかった。彼女が見ているのは荒れ果てた世界だった。破壊された街、強姦された女性、銃を持って戦う子供……そう、それはルーシーが生まれ育った世界だった。

「これは、ブランケットさんの記憶……？」

ルーシーの心に直接触れたことで、彼女の記憶がさくらに流れ込んだのだろう。さくらはルーシーがいままでどのような生きてきたのか、なぜゼクスエスの帝王候補になったのか初めて知った。

「争いの無い誰もが平和に暮らせる世界を作る……」

それが、ルーシーの願い。しかし、そのためにはライバルとなるさくらを死なせなければならぬ。大を活かすには小を犠牲にしなければならぬこともある。そう割り切りながらも常に自分の願いを叶えるために他人を犠牲にすることに疑問を抱き続けてきた。そして、さくらに自分の左目を斬りつけられてようやくどんな崇高な願いであっても他人の命を犠牲にしてまで叶える価値がないことに

気付いたルーシーは、さくらと話をしたいと思って接触しようとしたところさくらがフォーサイズに襲われているところに出くわしたのだ。そして、フォーサイズに捕えられたルーシーはディアスによって洗脳されてしまったのである。

「そうだったの……」

初めて知る相手の思い。自分を殺そうとしたことにはまだ許せない気持ちもあるが、それはお互いさまだった。それよりも、もうこんな事は嫌だという気持ちが大きかった。

「あなたも戦うのはもう嫌なんだね。その思い、私が……」

さくらは壁に手を当てた。そして、両手に力を込めた。力だけでなく思いも込めて。

「あなたが命がけで私を助けてくれたように私も命をかけます」

そんな思いを抱いたのは初めてだった。さくらの両手がぼんやりと光る。そして、壁にヒビが入った。

さくらがルーシーの心を閉じ込めている壁を壊そうとしている頃、外の世界ではなのはとフェイトがルーシーと戦っていたが、さっきとまるで動きの違うルーシーに二人は苦戦していた。動きだけではない。さっきまでろくに操れていなかった闘気も自在に扱えるようになっていた。なのはが空中のルーシーを多数の魔力弾で包囲した時、ルーシーは闘気によるバリアでこれを防いだ。ミッド式の防御魔法でガードした場合、それと同時に又は直後にA I シールドを展開することはできないが、闘気によるバリアならそういう問題は無い。これで、防御面での死角はほぼ消滅した。さらに、闘気は攻撃面をも強化できた。拳や武器に纏わせることでその威力は数倍にもなる。バンパイア・デバイスにまとわせた場合、その物理的破壊力は主の血を与えた時よりも勝る。ただ、一つ問題があってバンパイア・デ

バイスに闘気を纏わせると、それ以前に与えられた主の血は蒸発してしまつたためゼクスエスの帝王候補に対しては何の意味も無い。しかし、それ以外の相手に対しては破壊力抜群で、フルドライブモードのバルディッシュの刀身をあっさりと粉碎した。愕然とするフェイトの隙を突いてルーシーは彼女の腹に蹴りを加える。まともにくらつたフェイトは地面に落下して大きくバウンドして倒れた。

「フェイトさん！」

ティアナがフェイトのところへ駆け寄ろうとしたが、フェイトはそれを制止した。ティアナにはさくらを守る役目があるからだ。そのさくらはさつきからピクリとも動かない。ルーシーに対して何らかのアクションを起こしているようだが、現状ルーシーには何の変化も見られない。フェイトに追い打ちをかけようとするルーシーをなのはがブラスタースタービットで牽制する。すると、ルーシーは矛先をなのはに変えて襲いかかった。白兵戦では絶対に勝ち目がないと判断したなのははブラスタースタービットで牽制しながら距離を取った。だが、ルーシーは魔力弾を拡散して撃つことでブラスタースタービットをすべて撃墜した。

「あぶない！」

なのはに迫るルーシーを牽制しようとティアナはクロスミラージュを構えるが、それを見たなのはは叫んで制止した。

「駄目！」

ティアナがルーシーを攻撃すれば、さくらが危険になる。ティアナは唇をかみしめながらデバイスを下ろすしかなかった。フェイトは落下時のダメージが大きくてまだ立ち上がれていない。闘気によるバリアとA Iシールドではば無敵の防御力を誇るルーシーに、なのはは逃げ回りながら時間を稼ぐしかなかった。だが、スピードでもルーシーの方が上でとうとうなのはは至近距離に接近されてしま

った。ルーシーが振り下ろす魔槍をなのははレイジングハートで受け止めるが、ルーシーはすごい力で押し切ろうとした。

「なんて力なの……」

さくらよりは大きいとはいえ、ルーシーもまだ子供である。力なら大人であるなのはに敵うはずもないのだが、ゼクスESの身体強化魔法で腕力を強化したルーシーの力なのはを上回っていた。なのはは必死に抗うが、魔槍の斧は徐々になのはの顔に迫っていた。このままではなのはが殺されてしまう。しかし、ティアナ達にはどうしようもなかった。唯一の希望はさくらだが、まだジツと動きを止めたままだ。一体、何をしているのか、うまくいつているのかそれとも手こずっているのか皆目わからない。だが、ルーシーに何の変化も見られない以上、ティアナにはどうしてもうまくいつているようには思えず苛立ちが募る一方だった。こうしている間にも魔槍の斧の刃がなのはの鼻先すれすれにまで迫ってきていた。

「なのはさん、ごめんなさい！」

堪え切れなくなったティアナは、なのはの指示を無視してルーシーにクロスミラージュの銃口を向けた。ルーシーは気付いていない。ティアナは狙いを定めて引き金を引いた。発射された魔力弾は完全にルーシーを捉えていた。ここでようやくルーシーが気付いたが回避は不可能だった。魔力弾はルーシーに命中するかに思えたが、ルーシーは寸前でAIシールドを展開させた。

「あ……」

魔力弾が防がれたのを見てティアナは自分の過ちに気付いた。ルーシーが自分の方に矛先を変えたからだ。側にさくらがいるためティアナは逃げることもできない。

「さくらだけは絶対に守らないと」

さくらをガードするように立つティアナにルーシーは猛スピードで迫った。ティアナはそれを目で捉えることができなかった。そして、気付いた時には魔槍の穂先が顔面に迫っていた。

「……！」

ティアナは恐怖で動けなかった。もう回避はできない。彼女にできることは覚悟を決めて目を閉じることだけだ。ティアナは自分の死を覚悟していた。だが、寸前のところでルーシーの魔槍は食い止められた。

「えっ？」

ティアナが目を開けると、さくらがA I シールドでルーシーの魔槍を止めていた。魔剣を杖代わりにして、まさにギリギリのところ
でルーシーとティアナの間に割って入ったのだ。しばし、ルーシーと対峙したさくらだったが、やがてフラツとよろけた。

「さくら！」

後ろに倒れそうになったさくらをティアナが支えてやる。

「大丈夫？　しっかりして」

「すいません。平気です」

さくらは無理に笑顔を作ろうとするがかなり疲弊しているのはティアナにもわかった。

「もう終わりました。彼女の心は解放しました」

「えっ？」

ティアナがルーシーの方に目をやると、ルーシーはコクリと頷いた。敵意が無い証としてルーシーは魔槍を地面に置いた。それを見てティアナがなのはに叫ぶ。

「なのはさん！」

なのはは頷くと地上に降りてレイジングハートを構えた。

「レイジングハート！」

「Starlight Breaker」

ルーシーの意識が回復したとはいえ、ディアスはまだ彼女の体内に埋め込まれたままである。それを集束型砲撃魔法で破壊しようというのだ。なのはは以前に同様の方法で娘の体内のレリックを破壊したことがある。今回は前よりは負担の少ない通常のスターライトブレイカーを放つことにした。

「ちょっと痛いけど我慢してね」

なのはの言葉にルーシーは無言で頷く。非殺傷設定にしてあるといても、まったくのノーダメージというわけにはいかない。だが、ルーシーは逃げるわけにはいかなかった。自分のために命をかけてくれたさくらのためにも。決意を込めてなのはと向き合う。

「お願いします」

「いい娘だ」

なのははルーシーに向けてスターライトブレイカーを撃った。

「うわあああっ！」

爆発と同時に悲鳴が上がる。ディアスの破壊は確認できたが、ルーシーは無事なのか。爆煙がおさまり、ルーシーが立っているのが確認できるとティアナが歓声を上げた。

「やった！」

なのはとフェイトも互いに顔を見合わせホッとした表情になった。これでルーシーがジャッカルに操られることはなくなった。その功労者であるさくらに労いの声をかけようとフェイトは彼女のところ

に寄って行き肩に手を置いた。

「よくがんばったね、さくら。君のおかげだよ」

だが、さくらは何も反応しない。ティアナに体を支えられて顔を俯かせているだけだ。

「さくら？」

ティアナもさくらに声をかけるがやはり反応はない。さっきまで喋っていたのに。不安になったフェイトとティアナはさくらを強く揺すった。

「さくら、しっかりして。さくら！」

だが、さくらの眼は虚ろで二人の声が耳に届いているか不明だった。

「さくら！」

ティアナはさくらの頬をピシャピシャと叩いた。その直後、

「ぐほっ」

さくらの口から血が吐き出された。最悪の事態が発生したことで周囲の者たちの顔が青ざめる。リーガル・コアの力を使い過ぎたのだ。さくらの体は限界を越えてしまっていた。

「ぐふぁっ」

また、さくらは血を吐いた。それも大量に。

「さくら!!」

フェイトの悲痛な叫びが辺りに響き渡った。

デバイス紹介

名称…フォース

使用者…マリア・バーク

種類…アームドデバイス

両手に装着する。先端から短い魔力刃を発生させるが、数秒だけ刀身を200mまで延伸することが可能。ただし、延伸後は魔力刃は消滅してしまうため再度発生させるまでの間に隙ができてしまう。

名称…インフィニットセイバー

使用者…マリア・バーク

種類…ストレージデバイス

両足に装着する。ブーツタイプで膝から足首までと爪先や踵から魔力刃を発生させる。攻撃専用で移動速度向上などの機能は無い。

名称…オルトロス

使用者…ルナ・バーク

種類…インテリジェントデバイス

砲撃魔法専用のデバイス。砲撃魔法の術者の負担をある程度軽減する。直射、掃射、集束など砲撃のパターンによって先端部が変形する。杖自体は構造的にそれほど頑丈ではないため近接戦闘での使用には難がある。

名称…ヴィット

使用者…ネイル・ストライク

種類…ストレージデバイス

狙撃銃の形をしているデバイス。分離可能で通常は単発の狙撃銃だが、敵が接近しているときは分離して連発が可能なハンドガンで戦うこともできる。また、オプションを装着することで数十キロ以

上の超長距離射撃も可能。ただし、この場合は裸眼で標的に命中させるのは不可能なので専用ゴーグルが必要となる。

第12・3話【星の光に祈りをこめて・後編】？

フォーサイズの時空管理局地上本部襲撃が発生して4時間が経過しようとしていた。一時は総崩れ寸前に追い込まれた地上本部の守備隊も、各地からの増援部隊が次第に到着しはじめたことで徐々に形勢を盛り返しつつあった。フォーサイズの部隊を指揮していたサラをはじめとする幹部たちが相次いで管理局の特務隊ストライカーズによって拘束されたことも大きく影響していた。

一方、空の戦いでも八神はやてが指揮する空戦魔導師部隊が到着したことでフォーサイズの無人航空兵器スカイファイターが一時全滅するなど管理局側が優勢になっていた。しかし、フォーサイズは無人兵器を大量に生産していたらしく、次から次へと部隊を送り込んできた。

「でりゃあああああっ！」

マリア・バークは自分に襲いかかるスカイファイター？型の集団を自身のデバイスであるフォースの魔力刃で次々と破壊した。だが、スカイファイターの数は一圧倒的で、しかも彼女の死角から攻撃してこようとするのでマリアは常に全周囲を注意しながら戦わなければならず必然と疲労は蓄積されていった。最後の一機を回し蹴りで破壊しても、また別の集団が向かってくるので休む間もない。

「ああ、もう！」

マリアはフォースの魔力刃を延伸させて数機のスカイファイター？型を撃墜した。だが、まだ十数機残っている。？型は？型のような射撃兵装は搭載していないが、鋭利な刃を複数取り付けられていてそれで標的を殺傷する。襲い来る？型を阻止しきれずに全身を切り刻まれる者、あるいは全身くまなく刺される者など空戦魔導師部隊の犠牲者も決して少なくなかった。マリアも何回か危ない場面が

あったが、その度に仲間に使われて難を逃れている。無論、マリアも仲間が危機の時は助けるが、彼女の装備では自分を守りながら他人を助けるのは限界があった。必死にスカイファイターの攻撃をかわしながらこれらを破壊するマリアの視界に、スカイファイター？型が別の空戦魔導師の背後に突進している様子が映った。

「危ない！」

咄嗟に右手に装着したフォースの魔力刃を延伸させてそのスカイファイター？型を破壊したが、フォースの魔力刃は一度延伸すると消えてしまう。次の魔力刃を発生させるまでに数秒のタイムラグがあり、それが時には大きな隙になる危険もある。その隙を突くかのように3機の？型が彼女に迫ってきた。

「ちっ」

幸い気付いた時にはまだ距離があったためマリアはそれから距離を取って右手のフォースの魔力刃を発生させる余裕があった。あとは迫る？型をフォースと両足のインフィニットセイバーの魔力刃で破壊するだけだ。だが、マリアは自分に迫るスカイファイターの形状がさっきまでと微妙に違うことによりやく気付いた。そして、決定的な違いを目の当たりにする。近接殺傷用の武器しかないはずの？型に銃口が備え付けられているのだ。

「新型！？」

そう、それはスカイファイター？型だった。スカイファイターの銃弾には強力なバリア貫通効果が付与されている。ダブルAランクのマリアでも3機のスカイファイターの銃撃をバリアで防ぎきるのには不可能だろう。もう、回避する余裕も無い。フォースの魔力刃を延伸させて2機を破壊しても残る1機の攻撃を阻止する術はない。絶体絶命と思われたその時、斜め下から魔力弾が飛んできてスカイファイター1機を破壊しさらに跳弾でもう1機を破壊した。そして、

2発目が飛んできて3機目も撃墜した。マリアが弾が飛んできた方向に目をやると、ビルの屋上でネイル・ストライクがデバイスのヴィットを構えていた。彼は数人の陸戦魔導師とこのビルの屋上で戦っていた。

「ありがとうございます！」

礼を言うマリアにネイルは親指を立てる。そして、すぐに別の標的に狙いを定める。まだ敵機は多数残っている。のんびりしている暇は無い。だが、マリアに比べるとネイルにはまだ余裕があった。標的を照準に捉えた瞬間に引き金を引くという早撃ちによって、ネイルは次々とスカイファイターを撃墜していった。しかも、ただ撃つのが早いだけでない。狙いが極めて正確な上に先ほども見せたように跳弾を利用することで1発で2機を撃墜することもできるのだ。しかし、ネイルの真骨頂は何よりも狙撃だった。

地上本部が襲撃されたとの一報を受けヘリに乗って現場に急行していたネイルは偶然ティアナとフォーサイズのサラが交戦しているのを目撃した。ティアナが苦戦しているのを見たネイルは援護しようとして揺れるヘリの中でヴィットを構えた。その距離およそ2キロ。距離が長くなるほどにちよつとした角度のずれでも大きく標的を外してしまう。さらに、風なども考慮するとこの距離での精密射撃は非常に厳しい。しかし、ネイルはサラが自分の首に突き付けたナイフを見事に撃ち抜いた。間違いなく管理局で最も優秀な狙撃手であろう。

優秀なのはネイルだけじゃない。マリアもフロントアタッカーとして優秀だし、その双子のルナも優秀なセンターガードである。だが、ルナはまだここには到着していない。

「ルナの奴、こんの忙しいのに！」

敵機は一向に減らない。マリア一人ですでに50機は破壊している。それでもスカイファイターは雲霞のごとく迫ってくる。ルナの

砲撃魔法なら一気に数を減らせるので幾分か楽になるのにまだ来ていない。マリアが怒るのも無理はない。そこには、このままではいずれ自分たちも疲労によって動きや判断力が鈍くなって隙が多くなってしまうという焦りがあった。

焦っているのはルナだけではなかった。はやてにも焦りの色が浮かんでいた。一時は盛り返した管理局だが、次から次へと送られてくる敵の増援に一人また一人と力尽きていった。ヴィータ、ネイル、マリアの奮戦で何とか踏ん張っているが、この3人も疲労には勝てない。昔、傭兵として苛酷な戦場を渡り歩いてきた経験を持つネイルはまだそうでもないが、マリアは動きが鈍くなっているように見えるし、はやてたちが来る前から戦っているヴィータもさすがに息を切らしていた。

「シャルとザフィーラも呼んだ方が良さそうやな」

本部の守りにと残っていた二人だが、はやては呼び寄せることにした。フォーサイズによる通信妨害はメイとリンのアーク姉妹によってすでに解除されている。

「メイ、すまんけどな、シャルとザフィーラに……」

『隊長！』

はやてがメイに指示を伝えている途中にルナからの通信が入りこんできた。

「な、なんやルナびっくりするやないか。どないしたんや？」

『大変です！ シグナム二尉が……』

ルナからの急報、それはシグナムが何者かに襲われて意識不明の重体という衝撃的なものだった。

「どういうことや、一体何があったんや？」

予期せぬ凶報に動揺しつつも、はやては戦闘指揮の最中であるた

めそれを極力抑えながらルナに詳細を尋ねた。ルナが言うには、彼女とシグナムはルーシーを搜索していた世界が一緒だったため、地上本部が襲撃されたとの急報を受けると合流して一緒に向かうことになったのだが、待ち合わせ場所に来て一向にシグナムとアギトが来ないので不審に思い探すことにしたという。そして、倒れている二人を発見したのだ。

「誰が二人をそんな酷い目に……」

『アギト三士によれば、犯人は薄い赤の甲冑に身を包んだ剣と楯を持った男だそうです』

ルナが駆け付けた時、アギトにはまだ意識があった。そして、ルナに何があったか伝えた後に意識を失った。

「剣と楯を持った鎧姿の男か…何者やろ？ 魔導師ではなさそうやけどな」

『はい、それについて少し気になるんですが、その男の楯にヘビとリンゴが刻まれていたそうなんです』

「ヘビとリンゴやて？」

さくらのデバイスの待機モードもヘビとリンゴのブローチで、彼女のバリアジャケットの左胸にもヘビとリンゴが描かれている。これは単なる偶然だろうか。

「いや、ひょっとしたらその男が預言にあった『資格無き者』かもしれないへんな……」

『はい？』

「あ、こっちのことや」

ルナはカリムの預言のことを知らないのです、はやては適当にごまかした。ずっと『資格無き者』が誰を指しているのか疑問だった。さくらとルーシー以外の人間が該当するからだ。だが、預言には『月を覆いし者、資格無き者の刃に倒れし時』とある。月を覆いし者

がルーシーとした場合、彼女を倒せる人間はそう多くない。アギトと融合したシグナムを倒す実力を持ち、さくらと同じヘビとリングがシンボルみたいになっている謎の剣士。確定と言ってもいいだろう。

「気になるけど、いまはこっちが優先や。ルナ、すまんけどな急いで来てんか。その謎の剣士は後回しや」

『了解しました』

シグナムとアギトは病院に搬送されたい。いますぐにでも駆け付けたいはやてだが、部隊指揮官としての立场上それは許されない。指揮する者の辛いところだ。

「なのはちゃんたちはどうなってるんやろ」

通信妨害は解除されているので連絡は取れるはずだ。あっちの状況はどうなっているのかと確認もしたい。早速、なのはを呼び出す。

『あ、はやてちゃん？ どうして？』

「メイとリンが通信妨害を解除してくれたんや。それよりそっちの方はどうや？」

『ルーシーって娘は洗脳を解くことに成功したんだけどさくらが大変なことになっているの。急いで病院につれていかないと』

なのはから状況を訊いたはやてだが、地上と空で戦闘が続いている状態ではさくらを病院に搬送するのは難しい。それに普通の人間の体ではなくなっているさくらを診れる医者がいるかどうか。だが、治療はできなくても、さくらを静かな場所で安静にさせておくことはするべきだろう。

「なのはちゃん、その娘つれてここから脱出することは可能か？」

『うん、ルーシーも協力してくれるだろうからできると思うけど、それでどうしたらいい？』

「とりあえずさくらを安静にさせんな。シヤマルとザファイラも呼んでおいたから後は二人に任せてんか」

『了解』

通信が終わると、はやては戦闘が開始されてから初めてホッと息を吐いた。フォーサイズの最大の目的は地上本部の壊滅ではない。自分たちが洗脳したルーシーのライバルとなるさくらを殺すことである。そのルーシーの洗脳が解けた以上彼らの敗北は決定的である。ここはいったん退いて態勢を立て直そうとするだろう。今回は管理局側の損害も甚大だから追撃はできないが、幹部も多数逮捕できたしルーシーの証言もある。今度こそフォーサイズとレッドコメートの繋がりを解明することができはずだ。幹部の大半を失ったフォーサイズに前ほどの脅威は無いだろう。だが、フォーサイズのリーダーであるダニエル・ジャツカルにはまだ切り札があった。

「部隊長、あれを！」

近くにいた魔導師が叫んだので、はやてがその魔導師の指差す方に目をやると巨大な物体が空に浮いていた。

「な、なんや、あれは？」

巨大な浮遊戦艦に見えなくもないが、一体なんだろうか。

「部隊長、指示をお願いします！」

指示を求められてはやては困った。相手がわからないからだ。状況から判断してフォーサイズである可能性が高いが、シグナムを襲った謎の剣士に関係しているかもしれないのだ。もし、その剣士が預言にある『資格無き者』だとしたら、ゼクエスの帝王候補が二人揃っているこの場所の現れるのは不自然ではない。攻撃すべきか、それとも警告を発するべきか。

「……攻撃や。全員、あの戦艦を攻撃や！」

結局、はやては攻撃を命じた。あの浮遊物体が全く事件には無関係である可能性も否定できず、本来なら慎重な対処が求められる。しかし、いまは有事であり特殊部隊であるストライカーズにはそうした有事における超法規的措置が取れる権限が与えられている。ただし、部隊長の全責任においてだが。はやての命令で浮遊物体に攻撃がかけられる。この浮遊物体にもAMFの類は搭載されておらず、攻撃はそのままダメージとなるが、物がでかすぎるのと被弾した箇所が自動的に修復されてしまうのでなかなかダメージを与えられない。それに、スカイファイターはまだ存在している。と、そこへ浮遊物体の下部が開いて大量のスカイファイターが出てきた。それだけではない。コロコロと球体が地上に落ちた。球体は地面に落下すると4本足のロボットに変形して陸戦魔導師部隊と交戦を開始した。このロボットはデストロイドという名前でバリアで相手の攻撃を防ぐ厄介な奴だ。デストロイドの一斉射撃でまた多数の魔導師が傷ついていく。これで、浮遊戦艦がフォーサイズであることが確定した。恐らくダニエル・ジャッカルは中にいるだろう。問題は内部にどう侵入するかだ。

「難しい問題やね」

浮遊戦艦の自動修復が早すぎて、いまのところ内部に侵入できるだけのダメージを与えられていない。突入できるだけの穴を開けて、しかも内部に突入するまで穴が自動修復で塞がれないだけのダメージを浮遊戦艦に与えるには砲撃魔法しかない。それも、それなりに威力のある。だとすれば、なのはの出番なわけだが彼女はかなり魔力を消耗しているし、突入班の核になってもらわなければならない。できれば現時点でのさらなる魔力の消耗は避けたい。なのはほどではないが、そこらの魔導師よりは砲撃魔法が得意な人材。この場にはいないが、もうすぐ来るだろう。少ししてヘリコプターが来た。

「お待ちせしました、部隊長！」

ヘリからルナが顔を出す。

「待ってたで、ルナ。アレをお願いや！」

はやてが浮遊戦艦を指差したのを見たルナはすべて心得たとばかりに大きく頷いた。

「なのはちゃん、いまからルナが砲撃魔法を撃つからその後に戦艦に突入してくれへんか!？」

『うん、わかった』

「ルナ、準備はええか？」

「はい！」

ヘリから降りたルナが大声で返事する。遅れてきた分をこれで一気に返そうと気合も十分だ。ルナは逸る気持ちを抑えてデバイスを構えた。後ははやての指示を待つだけだ。

一方、突入準備を整えるなのはだが、フェイトは迷っていた。なのはとともに突入するか、さくらを安全なところまで運ぶか。立場上、フェイトはなのはと一緒に浮遊戦艦内部に突入する義務がある。そんなフェイトになのはが優しく声をかける。

「フェイトちゃんはさくらをシャルマルさんのところまで連れて行つて。私は一人で大丈夫だから」

「なのは……」

親友の気遣いに嬉しく思うフェイトだが、それに甘えるわけにはいかない。なのはもかなり疲労している。他の局員は無人兵器との戦闘に忙殺されている。実質一緒に行けるのはフェイトぐらいなものだろう。だが、ティアナ一人ではさくらを守るのは無理だ。火力の小さい彼女では新たに出現した4本足の無人兵器のシールドを破るのは困難だろう。すると、ルーシーが自分たちの周囲に結界を張った。

「行ってください。この結界は中から外に出ることはできても外から中に入ることはできません。ですから、この娘のことは心配いりません。私が絶対に守りますから」

「でも……」

「大丈夫です。ゼクススの帝王候補はそう簡単には死にませんから。こうして安静している限りは安心です」

「……わかったお願いするよ。ティアナは念のために残ってて」

「はい」

ティアナが返事するとフェイトはなのはに目を向けて頷いた。なのはも同じく頷く。

「はやてちゃん」

なのはが準備完了を告げると、はやてはルナに合図の送った。

「ルナ、いまや」

「はい！」

すでに照準は済ませてある。ルナのデバイスにカートリッジがロードされる。

「行きます！ ファイナルフラッシュュ！！」

ルナのデバイスからものすごい量の魔力波が放出される。魔力波はスカイファイターを何機か巻き込みながら浮遊戦艦を直撃し、その外壁に大穴を開けて船体を貫通した。撃ち終えたルナはガクッと両膝と両手を地面に着いた。破壊力が大きい分、疲労も激しい。だが、これで突破口が開かれた。自動修復で穴がふさがれる前に突入しなければならぬ。なのはとフェイトは全速力で突入しようとす
るが、スカイファイターの大群が行方を阻む。これをいちいち相手にしていたら穴が塞がれてしまう。なのはは一気に片付けようとレイジングハートを構えた。ここで砲撃魔法を使うのはきついがいま

は時間が無い。そこに鉄球がいくつか飛んできてスカイファイターを何機か撃墜した。

「ここはあたしらに任せてお前たちは行け！」

「ありがとうヴィータちゃん！」

なのははヴィータに礼を言うとフェイトと戦艦内部に進入した。内部にもスカイファイターが配置されていたが二人はそれらを破壊しながら前に進んだ。すると、今度はデストロイドの部隊が行く手を阻んだ。なのはは着地するとレイジングハートを構えた。

「デivainバスター！」

デストロイドを一気に殲滅した二人はさらに奥へと進んだ。しかし、エリアサーチを駆使してもジャッカルの居場所は掴めなかった。そうしている間にも二人はスカイファイターやデストロイドの迎撃を受け続けた。

「一体どこに……」

いまのところこの浮遊戦艦に武装は見られない。しかし、ジャッカルが見せびらかす為にこれを投入したとは思えない。何かあるはず。それがわからない状態ではジャッカルを捕縛するしか対処のしようがない。焦る気持ちを抑えながら船内を搜索しているとフェイトが何かに気付いた。

「なのは、あれ」

「なに？ フェイトちゃん」

なのはがフェイトの指差した方を見ると壁に長方形に亀裂が入っていた。ちょうど一人一人がおさまるぐらいの範囲で。

「これって……」

「うん、いかにも隠しドアって感じだね、なのは」

「……入ってみる？」

「……そうだね」

ドアなら近くに開閉のスイッチがあるはず。しかし、どこにもそれらしい物は見当たらない。もしかしたらドアじゃないかもしれない。

「どうする？」

「うーん、このまま見なかったことにするのよね」

「わかった。ちょっと下がって」

フェイトはなのはをドアから離すとバルディッシュでドアを破壊した。やはり隠しドアだったようでドアの先は通路になっていた。通路は狭いので二人は徒歩で進むことにした。しばらく進むと出口が見えてきた。そして、その先は何もない部屋だった。誰もいない物と言える物もない。本当に何もない部屋だった。

「どういう……あっ！」

「罠か！」

すべては二人をこの部屋に誘き入れるための罠だった。二人は部屋から出ようとするがその前に出口が閉じられてしまった。フェイトがバルディッシュを出口だった壁に振り下ろすも魔力刃が突き刺さるだけで壁を崩すことはできなかった。

『くっくくくっようこそ管理局の犬ども』

背後から声がしたので二人が振り返ると空間モニターに銀色の仮面をつけた男が映っていた。フォーサイズの指導者ダニエル・ジャッカルだ。

『いかがかな？ ドクター・ゲオ製作の浮遊戦艦は。貴様ら俺がその戦艦の中にとでも思ったのだろうか、そこには貴様ら以外に誰もいない。この間抜けめ』

「……この戦艦で何をするつもりだ。もうあなたの企みは潰えている。無駄な抵抗は止めて大人しく投降を」

『ふん、確かに勝ちはずなかつたがまだ負けはしていない。俺は負けるのが極端に嫌でな。最低でも痛み分けにでもせんと気がすまん』
そして、ジャッカルは恐ろしいことを口にするのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9667m/>

魔法少女リリカルなのはTwo girls

2011年12月1日01時50分発行